

198. 9-B72ウ



1200500728913

1989
2

救霊者の秘訣



東京神田
救世軍出版及供給部

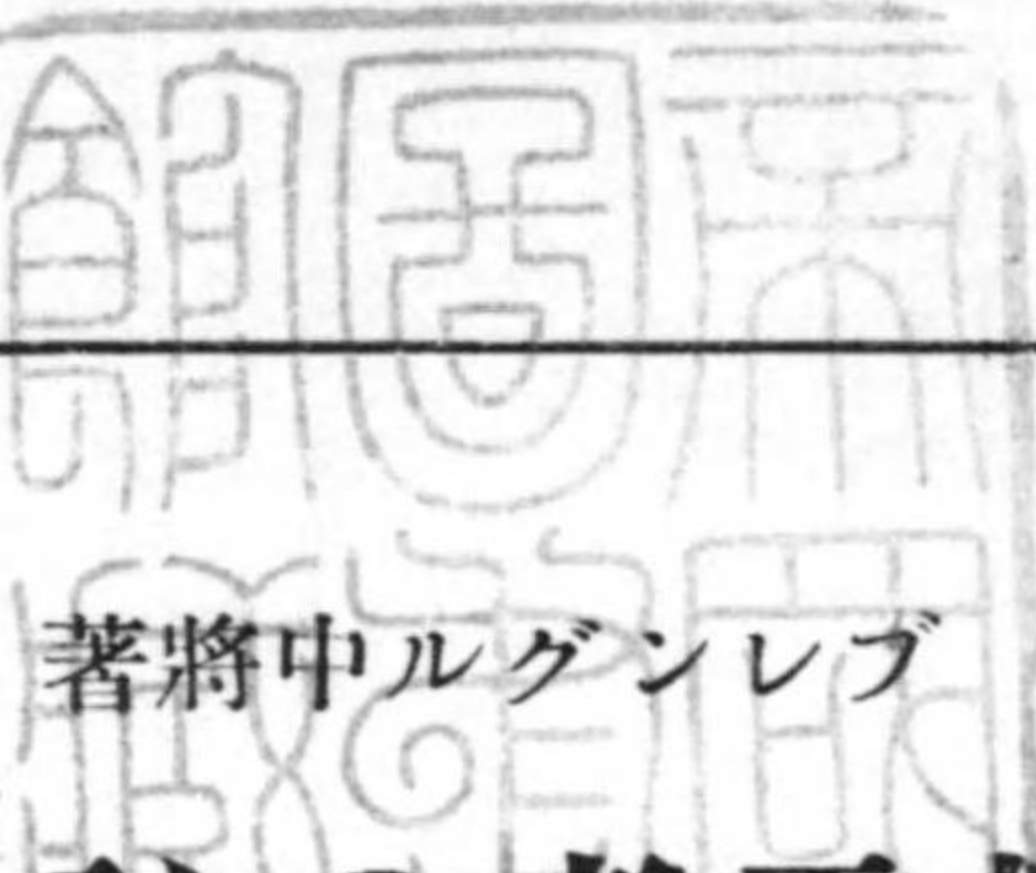
1989



始



198.9
B72



著將中ルゲンレブ

救靈者の秘訣



東京神田

救世軍出版及供給部



山室武甫氏寄贈本

序

序

ブレングル中將は救世軍が有する、最も偉大なる救靈者にして、
 又最も卓越なる聖潔の教師である。彼はその本國、北米合衆國
 に於てのみならず、廣く歐羅巴諸國を歴訪し、到る處、幾百幾
 千の靈魂を救に入らしめ、聖潔を受けしめ、進んで神の軍隊の
 戦士とならしむる上に、異常の成功をせられたのである。
 その著「聖潔の葉」は早くから、日本語にも翻譯せられ、原著と
 共に、凡て全き愛の恵を求むる人々の、愛誦する所となつて居
 る。恐らく今日まで聖潔に關する書物の中で、「聖潔の葉」程廣く
 我が國に行はれたものはあるまいと思ふ。

此の度發行せらるゝことゝなつた「救靈者の秘訣」は、又ブレン
 グル中將の名著の一つである。此は彼自ら最も優れた救靈者た
 る著者が、その多年聖戰場裡に得來つた教訓を、些の作り飾り
 もなく、簡單明瞭に語り出た體驗の記録として、殊に熟讀の價
 値ある書物である。
 神が此の書の讀者を祝福し、その中から多くの能力ある救靈者
 を、起し給はんことを祈るのである。

昭和七年十二月

救世軍中將 山室軍平

救靈者の秘訣

目次

第一章	救靈者の個人的經驗	一
第二章	服従	九
第三章	祈禱	一九
第四章	熱心	二七
第五章	靈的指導者	三七
第六章	時間の尊重	四七
第七章	何を學ぶべきか	五九
第八章	健康に就いて	六九

第九章 能力の更新……………八三

第十章 一心一念……………九三

第十一章 經濟……………一〇〇

第十二章 救靈の眞理……………一〇九

第十三章 牧會……………一二八

第十四章 兒童の救(上)……………一三三

第十五章 兒童の救(下)……………一四三

第十六章 戰術……………一五〇

第十七章 如何に語るべきか……………一五八

第十八章 集會の後……………一六七

第十九章 救靈者の警戒すべき危険……………一七二

第二十章 神の秘密……………一七五

救靈者の秘訣

中將 サムエル・ブレンダ著

第一章 救靈者の個人的經驗

凡ての救靈者は主の秘密に與つてゐる。そして、己れをして救主との親しき友好關係と共鳴とに導き入れる靈魂の救及び聖靈のバプテスマの、確實な體驗を有する者である。詩篇の作者は祈つて云つた。「願くば聖顔を、わが凡ての罪よりそむけ、わが凡ての不義を消し給へ。あゝ神よ、わが爲に清き心をつくり、わが衷に、なほき靈をあらたに起し給へ。われを聖前より棄て給ふ勿れ、汝の聖き御靈を、我より取り給ふ勿れ。汝の救のよろこびを我にかへし、自由の御靈を與へて我をたまち給へ。さらば我、愆ををかせる者に、汝の途ををしへん、罪人は汝に歸り來るべ



ししと。

彼は救霊者となり、曲れる世に主の途を傳へ、罪人を神に立ち歸らせん爲には、先づ第一に彼自身の罪が悉く消し去られ、清き心となほき思念とに満ち、又彼自身、聖霊の恵を身に受け、主の歡喜に與るものでなければならぬことを知つてゐた。一言にして云へば他を救はんが爲には、己れ先づ確實な、不斷の樂しき救の經驗を持たねばならなかつたのである。彼の願求は「救を得たい」との求道の經驗ではなかつた。又、念入りの推論或は論理的過程によつて到達せらるゝ結論でもなく、或は又義務の遂行乃至は儀式禮典に與る等の經驗でもなかつた。それは實に、彼の全心全靈の驚くべき變貌と聖潔、即ち聖霊によつて彼の衷に成し遂げらるゝ光輝ある新生であつたのである。

一、それは、神の聖言と一致する確實なる經驗でなければならぬ。斯る經驗のみが、我等に能力と確信とを與へ、進んで他を導き靈魂を獲得せしむるのである。人に知識を與へんとする者は己れ自身が先づその知識の所有者でなければならぬ。火を點せんとすれば先づ火を持たねばならぬ。生命を生み出す者は、生命の所有者でなければならぬ。イエスを世に紹介せんが爲には、先

づ己れ自身が、よく主を熟知し、主との親しき交際にあるものでなくてはならぬ。人々を導いて主の生命に伴れ來らんが爲には、イエスと全く一つとせられ、「共に生命の包裹の中に包まれた者でなくてはならぬ。

ペテロは洗禮のヨハネの下で悔改め、凡てを抛つてイエスに従つた。そして熱い祈と、抑へ切れぬ熱望とを以て、聖霊と火のバプテスマを待ち望んだ。やがて上よりの能力を着せらるゝや、忽ち、あの懼るゝ處なき力強き説教者となり、一日に三千人を回心せしめたのである。パウロはダマスコ途上にて大いなる回心をなし、何を爲すべきかを告ぐるイエスの御聲を聞き、アナニヤの下にて聖霊のバプテスマを受け、而て後、かの全世界を驚倒せしむる程の熱烈なる大使徒となつたのである。又ルツターは、ロマのセント・ピーター寺院の階段の上で確實な回心を經驗し、更に信仰によつて、義とせらるゝを悟り、かくて後、法皇及び國王達の前に敢然と起ち、捕囚の諸民を釋いて、自由を與へたあの不屈の完教改革家となつたのである。ジョージ・フォックス、ウエスレー、フィニー、ホイットフィールド、ジョンサン・エドワード、ジェームス・コフエイ、而してわがブリス大將等は、何れも皆、撥を一にして、彼等をして焔の使徒、神の預言者、又は人々

の救済者たらしめた處の、確實な個人的経験を有つてゐたのである。彼等は救はれたと想像したのではない。又單に救はれ度いと願つたのではない。彼等は彼等の信する主を熟知し、而も「暗黒より光明に、サタンの力より神に移つた」人々なのである。

此の経験は、進化ではなくして革命である。過去に於て、如何に偉大なる進化論者とも雖も偉大なる救霊者ではあり得なかつたが、將來に於ても又然りであらう。人が救霊者となるのは成長によらずして啓示によるからである。神が天の蔽を破つて降り、その御獨子に於ける信仰を通して人々の心に顯はれ、各自に我、神に受入れられたりとの自覺を與へ、その心に神よりの愛を注ぎ給ひ、かくて、不信仰を壊ち、罪を焼き拂ひ、利己心を掃蕩し、その靈に、イエスの御心を満しめ、熱情を以て満しめ給ふ時、初めて人は救霊者たり得るのである。

人をして救霊者たらしめる経験は、更に之を次の二つに分けることが出来る。

(イ) 彼は自己の一切の罪が赦されたことを知らねばならぬ。即ち己れが、會ては、神の御愛と御慈しみに背を向け、神との親しい關係を絶ち、その御聲に耳を傾けず、その御旨を傷め、神と離るゝことの如何に恐るべきかをも知り得ざる、憐むべき一個の罪人なりし事を認めただけでなく

てはならぬ。かくて此の自覺が彼を導いて、神の御前に悔改めさせたのでなくてはならぬ。何となれば此の経験こそ、彼が罪より全く離れた事、及びキリスト・イエスを救主として信頼申上げた事を證しするものだからである、斯く信することによつて、キリストの故に、彼の一切の罪が赦されたこと及び彼も又、神の家族の一員に加へられたとの安けき自覺が與へられるのである。此の自覺はパウロの所謂「御靈の證」から生れるものであり、靈の奥底から深い親子の信頼と愛情に満ちて「アバ父よ」と叫ばしむるものである。

(ロ) 彼は聖別されねばならぬ。彼はその心が潔められ、傲慢、自己中心、野心、争闘、嫉妬、疑、不信仰その他凡ゆる、神の御旨に適はざる性質が、聖靈のバプテスマによつて粉碎され——即ち個人的ペンテコステの火である——キリスト・イエスに對する熱愛と忠誠に満され、かくて後初めて人の靈を漁るに役立つものとなり得ることを知らねばならぬ。

二、それは持續せる経験でなければならぬ。自己の内的戦に於て、屢々勝利を失ひ、敗北に遭遇する者は、救霊戦に於ても、又大なる勝利を望むことが出来ないのである。敗北の自覺そのものが、彼の獎勵を不確實にし、その證を疑はしく、又怪しきものとなし、その信仰を動搖せし

め、かくして、對手の心に確信を與へ、信仰心を喚起することを甚だしく困難ならしむるのである。フィニー、ウエスレー、フレッチャー、ブラムウエル・ブース夫人、その他幾多の偉大なる主の僕達は、皆エノクの如くに「神と共に歩み」絶えず「御霊によりて歩み」つゝ、その全生涯を力ある救霊者として送つたのである。

三、それは喜悅の經驗でなければならぬ。「主の喜悅は汝の能力なり」とネヘミヤは云つた。「汝の救の喜悅を我に還し給へ」とダビデは祈つた。若き天稟的な靈的説教者で、その救靈戦に驚異すべき成功を収めた、かのスコットランドのマツキンネーは、「私は、主が私に望み給ふ最上に、喜悅に満されてゐることは、私の義務と心得てゐる云々」と書いて居る。「お、我心は歡喜に溢る。お、實に主は我と共に在し給ふ」とコーフェイは、彼の「御霊の活動」の説教最中に絶叫したのである。宜なる哉、彼は多くの靈魂を獲た。ホイットフィールド、ブラムウエル等は、共に世に優れたる偉大なる説教者であつたが、屢々説教しつゝ歡喜の絶頂に達するのであつた。これは實に然あるべきが當然であつたのである。ジョン・バンヤンは彼が「天路歷程」を、むさくるしい牢獄の中で書き綴つた時の様子を次の如く書いてゐる。「かくて私は獄舎に伴れ行かれた。

そしてそこに座し乍ら、私は休む間なく書きつゞけた。込み上ぐるやうな心の喜悅が、私を書かして已まなかつたのである」と。

神はその民が喜悅に満されることを望み給ふ。「われ、之等のことを語りたるは、我が喜悅の汝等にあり、かつ汝等の喜悅の満されん爲なり」ヨハネ傳一五・一一「求めよ、さらば受けん。而して汝等の喜悅満さるべし」(ヨハネ傳一六・二四)と主は仰せ給ふた。又ヨハネは「之等のことを書き贈るは、汝等の喜悅の満ちん爲なり」(ヨハネ第一書、一・四)と書いてゐる。パウロは叫んで「御霊の果は、愛、喜悅、平和……」
「それ神の國は、義と平和と御霊によれる歡喜とにあるなり」と云つてゐる。

御霊によれる歡喜！それは實に艱難の海に四面を圍まれ、病苦と苦難と悲哀の大濤に足をさらはれんとする時、尙毅然として立ち得る、聖き信仰に燃ゆる靈の中に、洋々として漲る大洋の如き流である。私達は今まで、主が實に溢るゝ喜悅に富み給ふ御方なるを忘れて、主をたゞ「悲しみの人」としてのみ考へて來た。

喜悅は之を涵養し得る。否、信仰及びその他の御霊の果に於けると同様に、是非共これが増大

を圖らねばならぬ。即ち、

(イ)我等をして主の喜悅に與らしめんが爲に、特に語られ又書かれた御言を、信仰を以て適用することによつてある。パウロのローマ人への書に「さらば希望の神は信仰によつて汝等の心を喜悅と平安にて満しめ給ふ」とある。

(ロ)それ等の御言に就て冥想し、それを深く心に銘し、恰も蜂蜜を味ふが如くに、その御言から凡ての嘉きものを吸収することによつてある。

(ハ)喜悅は、信仰、愛、又は忍耐に於けると同様に、これを働かせることによつて増大し得るのである。即ち主にありて喜び、その御恩恵に對して神を讚美し、御靈にて満され、喜の胸に溢るるまゝ歌ひ出すのである。或る人々は胸にある喜と讚美の靈を消し、かくて次第に夫を失つてしまふことが往々ある。然し乍ら、彼等が今一度悔改め、祈り、信じ、而して神を讚美し始めるならば、神はそれを喜び給ふて、再び彼等に恩恵を注ぎ、かくて彼等の喜悅は、罪人を回心せしめ、又、靈をキリストに導かんが爲の大なる助となり得るのである。

ペテロがペンテコステの説教によつて、三千人の異邦人を悔改めさせ、基督の十字架にひき來つ

た其時、彼の心に満ち溢れた喜悅——更に火のバプテスマを受けた他の百廿人の弟子達の、靈から靈へと波打ち、彼等の顔に輝き、その眼より迸り出た喜悅——の中にあつたであらう驚くべき能力を誰が量り得るであらうか。

第二章 服従

「われは天よりの黙示に常に従へり」とパウロは云つてゐる。その言葉の中に、彼は救靈者としての彼の驚くべき成功を物語つてゐる。

救靈者とは、神より遣はされたるもの、その心と信仰に、神よりの直接の命令を有つものである。そして彼がその命令を喜びて迎へ、心から大膽に之に従ふ時に、大いなる成功が與へられるものである。彼は他に勝つた「神と共に働く者」であり、「イエス・キリストの兵」である。その意味に於て、彼は益々神に従はねばならぬ。神よりの命令を受け、而してそれを實行することが彼の本分なのである。「われ汝をつくらざりし先に汝を知り、汝を聖め、汝を立て、萬國の預言者となせり」と神はエレミヤに語り給ふた。エレミヤは之をさえぎつて「あゝ主エホバよ、視よ、我は幼少により語ることを知らず」と云へば、エホバは更に語り給ふて、「汝われは幼少と云ふ勿れ、凡て我が汝を遣すところにゆき、わが汝に命する凡てのことを語るべし、汝、彼等の面を畏るゝ勿れ、そはわれ汝と偕にありて、汝を救ふべければなり……されば汝腰に帯して起ち、わ

が汝に命する凡ての事を彼等に告げよ。その面を畏るゝ勿れ、否らざれば我かれらの前に汝を辱しめん」と。又主は或る偽預言者達に就て「彼等もし我が議會に立ちしならば、我民にわが言葉を聞かしめて、其の惡しき途とその惡しき行とに離れしめしならん。」と語り給ふた。

救靈者は、神よりのメッセーヂを受け、神の命じ給ふことを語らねばならぬ。彼は神の僕にして、イエスの友、至高者の預言者、また天より遣はされたる全權大使である。されば彼は天の言葉を語らねばならぬ。又天國とその主とを代表し、己が意ならず、遣はし給ひし者の御意を求めねばならぬ。聖書に「見よ、従ふは犠牲に勝るなり」とある。彼は人に媚びんが爲に、己が途を飾り、又は人の行爲に頼ることがあつてはならぬ。彼は常に主を見上げ、心を聖くして主に従ふべきである。パウロは我等に告げて、「イエスは死に到るまで従へり」と云ひ、又屢々彼自身を「イエス・キリストの僕」と呼んだのである。

第一。服従は急速なるを要する。ヨシユヤやカレブの求訴と獎勵にも係らず、イスラヘル民はカナンに渡ることを拒絶した。處がその後、直に命令に従はざる事の罪なるを知り乍ら、今は渡るべき時にあらずとの、モーゼの警告に耳を藉さずして突進し、無慘な敗北に遭遇した。若し

も彼等が直に命令に服従したならば、恐らくあの四十年のさすらひの旅も、又荒野に同朋の屍をさらすの愚も演ぜずに済んだであらう。

一度び救霊者が主の御旨を知る時は、それが實行に、ゆめ躊躇てはならぬ。若しも疑はしく感ぜらるゝ時は、更に時を割いてそれが確實性を確かめねばならぬ。己が遣はされたるや否やを知らずして走り出で、或は又神よりのメッセーヂを受けずして出掛け、その使命やメッセーヂの不確實なるが爲に途中にてまどひ、終に倒れてしまふが如きは、神の喜び給はざる處である。併し乍ら一度神の御命令を受け、そのメッセーヂを得たる時は、「主の御用は急速を要する」ことを知り、又「鐵はその熱き中に打たねばならぬ」ことを思つて、御霊の導きのまゝに語り、又行はねばならぬ。あの貪慾なバラムの如く、神はその御心を變じその御命令を更へ給ふのではないかなどと、ゆめ躊躇することがあつてはならぬ。

デユイー大將のマニラに於ける異常なる大勝利と、それに伴ふ國境の地理的大變化とは、スベイン艦隊を撃滅せよとの彼の命令が、極めて敏速に實行されたからである。前述せる如く、御霊に導かるゝまゝ語る時は、必ず欣快なる勝利を以て、個人に又は群集に向つて、宗教の問題を語

り、神の御旨を告げ知らしむることが出来るのである。若し躊躇せば、その機會は永遠に過去つて再び來らず、又よしんば再び到來することありとも、それが實行にはより多くの困難を感ずるに到るものである。

第二。服従は完全なるを要する。サウルは只その偏頗なる服従の故に、終にその王土のみならず、己が生命までも失はねばならなかつた。イエロポアムに忠告をした老預言者の言葉も又これであつたのである。

「何にてもその命する如くせよ」とカナの婚宴の時、マリヤはその召使達に命じた。そして彼等が命ぜらるゝまゝ行つた時に、主は最初の奇蹟を現はし給ふたのである。その如く今も尙、主は何事にもその御命令に従ふ選民を通して奇蹟を現し給ふ。救霊者は殊に聖靈を消さぬやうに心掛ければならぬ。さらば語り出づるは己れにあらすして、御霊御自身なるを知り、彼も又主の如く「わが汝等にいふ言は、己れによりて語るにあらず、父われに在して御業を行ひ給ふなり」と叫ぶことが出来る。主は「何事にも我が名によりて父に願はゞ、我これを爲さん」と仰せられた。

第三。服従は勇敢になさるべきである。神はエレミヤに向つて「彼等の面を懼るゝ勿れ」と仰

せられた。又エゼキエルに向つて「汝人の子よ、たとひ薊と棘、汝の周囲にあるとも、又蛇蠍の中に住むとも、之を懼るゝ勿れ、その言葉を懼るゝ勿れ。夫れ彼等は悖れる輩なり。彼等之を聞くも之を拒むも、汝我が言葉を彼等に告げよ」と仰せられたのである。彼は人を喜ばすべき事を語るにあらず、神が彼をして語らしむるまゝを語り、而も懼るゝ處なく語らねばならなかつた。そは神彼と共に在し給ふたからである。

「かくてサウル、サムエルに云ひけるは、我エホバの命と汝の言とをやぶりて罪を犯したり。そは民をおそれて其言にしたがひたるによりてなり」と。神彼を棄て、その王位と國土とを他人に渡しゝは宜なる哉である。「恐るゝ勿れ、われ汝と共にあり、驚く勿れ、我は汝の神なり、我汝を強くせん、誠に汝を助けん。誠に我がたゞしき右手なんちを支へん。」と神は仰せ給ふ。

救靈者をして、われは天國の前哨勤務にあるものなるを覺らしめ、その身を全く神の御守護に任せ、天父の暖き御守護と、主イエスの深き御憐愍と、能力ある御腕に安らにか憩ひ、パウロと共に「我を強め給ふ者によりて、我凡てのことを爲し得るなり」と叫びつゝ勇敢に、その義務を遂行せしめよ。

私は幾度か、老王ヨシャバテの「汝等心を強くして事をなせ、エホバ善人を祐け給ふべし」との確信を思ひ出して、己を慰めたのであつた。又ペテロが怒り狂へるサンヒドリの議員達の前で叫んだ「われ等は人に従はんよりは神に従ふべきなり」との大膽な言を思ひ出して、自らを勵ましたのである。又「我が如き人いかで逃ぐべけんや。わが如き身にして誰か神殿に入りて生命を全ふすることをせんや。我は入らじ」と叫んだネヘミヤの言葉に、或は又「然れど、我わが走るべき道程と、主イエスより受けし職、即ち神の恵の福音を證する事を果さん爲には、固より生命をも重んぜざるなり」とのパウロの言葉に、更に又「おゝネブカデネザルよ、この事に於ては我等汝に答ふるに及ばず。若し善からんには、王よ、我等の仕ふる我等の神、我等を救ふの能力あり。彼その火の燃ゆる爐の中と、汝の手の中より、我等を救ひ出さん。假令しからざるも、王よ知り給へ、我等は汝の神々に事へず、また汝の建てたる金像を拜せじ」と叫んだ勇敢なヘブルの三青年の言葉を想うては自らを反省させられたのである。

これが救靈者を作り上げる一つの要素である。さらば如何にして此の勇敢な服従の精神を我物となし得るであらうか。

私は答へて云ふ。死ぬることによつてある——即ち自己の利害に死に、世の毀譽褒貶に死に、此の世の報酬を求むる心に死ぬることによつて、而して又、御國にて我等が受くべき、より大いなる報酬を確信し、たゆたわす主を見つめ、主の御言に従ひ抜くことによつて、更にまた肉情を節し、しばらくの軽きなやみを、永遠の榮光に較ぶることによつてあると。過日讀んだ書物の中に、「生ける説教者とは、只死せる人々のみである」と書いてあるのを見た。

第四。服従は喜悅もてなされねばならぬ。律法に「喜もて主に仕へよ」とあり。又詩篇の作者は「おゝ神よ、われは汝の御旨をなすを樂しむ」と歌つてゐる。彼の服従には一點の眩きもなかつた。神への服従は實に彼の喜悅であつたのである。神の望み給ふものは、愛の奉仕である。而して愛の奉仕とは喜の奉仕に外ならぬのである。「我を遣し給へる者の御意を行ふは、是れ我が食物なり」と主は仰せられた。又パウロは「若し我、心より之をなさば報を得ん」と叫んでゐる。神の我等に求め給ふものは、心よりの愛の奉仕である。我等が一度び、全く神のものとせられ、神の御靈我が裏に宿り給ふ時、服従は厭はしくなくなり、否服従によつて我等自身のみならず、主に導かるゝまゝ、他の人々をも貴き救に導くことが出来るのである。

語りぬ給ふ汝が御聲聞かせよ、

われ御聲に従ひゆかん。

十字架の御下にわれはふしてたづぬ、

おゝ、わが恐怖を追ひやり給へ。

おゝ、今光を天より降し、

わが凡ての需を顯はに示せ。

わが叫び求むる聲に耳を傾け、

主よ語りませ汝が僕聞く。

御聲のまゝに我は従ひゆかん、

よし行く途に笑しげるとも。

汝が悲しみに興るは、わが喜、

主は御手もてあらしな沈め給ふ。

わが心を潔めて汝が宮となし。

主よ、今來りて宿らせ給へ。

われ凡ての愆をすて、

今よりただ汝がものとならん。

第三章 祈 禱

祈禱は神に近づく路である。されば救霊者は絶えざる使用によつて、その通路を常に開いて置かねばならぬ。凡ゆる靈的恩恵と能力とは實に此の墜道を通して與へられるのである。されば救霊者の生活は絶えざる祈りの生活でなければならぬ。「絶えず祈れ」とパウロは云つてゐる。祈りは又靈の呼吸である。そして他の凡ての條件が等しいとすれば、祈りこそ能力の祕密の出所である。主イエスに關する記事に「その頃イエス、祈らんとて山に行き祈りつゝ夜を過したり」とあり、かくてその祈りの後に大いなる御業が爲されたのである。私達は又、次のやうな驚くべき記事を見るのである。

「凡て祈りて願ひたることは、己に得たりと信ぜよ、さらば得べし」。「誠に、汝等に告ぐ、汝等の凡て父に求むるものをば、わが名によりて賜ふべし」及び「汝等若し、我に居り、わが言葉汝等に居らば、何事にても望にしたがひて求めよ、さらば成らん」と、此等は、實に驚くべき御約束であるが、皆「眞理の書」に記さるゝものであり、神の榮光を慕ひ義の勝利を希ひ、又靈

の救を求むる神の子供達に對する一つの大きいなる挑戦である。

救靈者は密室の祈りを守らねばならぬ。善き成功を收めんとすれば、まづ神と只一人對座し、その御前に彼の全心を注ぎ出し、執成し、訴へ、又願ふ處を主張せねばならぬ。聖靈にて滿され、智慧、能力、勇氣、希望、信仰、時と靈とを辨へる能力を得、更に又大いなる焔の如き、而も廣汎な神より人々へのメッセージを受くるの途は、常に目ざめ、信仰を以て、只獨り主を待望む外にないのである。此の一點に於て失敗せんか、他の多くの點に於ても亦大いなる失敗を免れ得ぬであらう。イエスは併せ給ふ、「汝等祈る時、己が部屋に入り、戸を閉ぢて隠れたるに在す汝の父に祈れ、さらば隠れたるに在す父は報い給はん」と。此處に成功の秘訣がある。これは父なる神との密室の靈交であり、熟議であり親しき會話である。神は我等が從順な愛情に滿ちた幼兒となつて御前に起つ時、恰も窓や戸をあけ放つ時流れ込む太陽の光線が、我等を包んで離れ去らないと同じやうに、神は私達から離れ給はない。離れやうとし給はないのである。實に神は我等から離れ去ることが出来ない。のみならず我等の祈りに報い給ふ。而も公然と報い給ふ。主はそれを約束し給うた。而して神は詐はり得ざる御方である。

祈りは明確でなければならぬ。曾て主が弟子達及び多くの群集に圍まれて、エリコを去らんとした時、盲人のバルテマイは路傍で物を乞うてゐたが、イエスの過ぎ給ふと聞き、叫び出して云つた、「ダビデの子イエスよ、我を憐み給へ」と。併し乍ら之は明確な祈りではなかつた。それは餘りに漠然たるものであつた。イエスはバルテマイの心の願を知つて居られた。併し、バルテマイに、その求むる處を明に告げしめんとして彼に向ひ、「汝我に何を爲さんことを願ふか」と問ひ給うた。すると彼は初めて明確な祈りを捧げた。「主よ、見えんことなり」。この明確な祈りが明確な答を與へられたのである。「行け汝の信仰汝を救へり」と。かくして彼は直に見ることが出来たのである。我等は神の御下に到つて祈る時、丁度買物に行く時と同じやうに、我等の求むるものを明確にして置かねばならぬ。商人は自分の店にある品物は、何でも賣らうとして待つてゐる。併し乍ら實際は我等がその求むるものを告げる迄は、何も賣ることが出来ない。天の父に於ても亦之と同様である。

次に、祈りは大膽であらねばならぬ。パウロは云つてゐる。「我等の大祭司は、我等の弱きを思ひ遣ふこと能はぬ者にあらず、罪を外にして、凡ての事、われ等と等しく試られ給へり」と。更

に續けて「されば我等は憐憫を受けんが爲、また機に合ふ助となる恵を得んが爲に、憚らずして恵の御座に来るべし」と。勿論、此の勇敢なる態度には、又その一面に、深い謙虚が伴はねばならぬ。そして、その中に信仰が織り込まれて居るならば、その謙虚が深ければ深い程、他面、大膽さは増し加はるものである。子供が欲しいと思ふものを、親の許にねだりに行く時のあの大膽さを、私は屢々面白く感じ、又驚かされたことがある。而も、親は如何に喜んでその要求——特にその要求が正當であり、必要なものなる時——を満さうとするか。イエスは仰せ給うた「汝等惡しき者ながら、善き賜物をその子等に與ふるを知る。まして天に在す汝等の父は、求むるものに聖靈を賜はざらんや」と。

サタンは、祈らんとして跪つく靈を冷笑して、膝を立たせ、父の聖顔から離れさせやうとする。されど尙、イエスの御名によつて大膽に祈れ、而して忍耐もて、その答を待て。さらば豊かな報は必ず與へられるのである。自分を信頼する小供達を失望させることは、天の父の御心ではないのである。神は彼等の最上の望をかなへさせんとして居給ふ——否「彼等の願ふ處、思ふ所よりも、更に優りたること」を爲さんとして居給ふのである。何となれば神は彼等に對して、愛

そのものであり給ふから。されば神の小供として、ためらはず又氣落ちせずして、大膽に、御前に出でて祈らねばならぬ。

祈禱は又、執拗に、忍耐深くせねばならぬ。イエスはこの事を執拗な一人の友の譬の中に明に教へ給うた。「汝等の中、誰か友あらんに、夜半にその許に行きて、友よ我に三ツのパンをかせ、わが友、旅より來りしに、之に供ふべきものなし、と云ふ時、かれ内より答へて、我を煩はすな、戸は早や閉ち子等は我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し、と云ふことありとも、われ汝等に告ぐ。友なるによりては起ちて與へねど求めの切なるにより起きてその要する程のものを與へん。われ汝等に告ぐ。求めよさらば與へられん。尋ねよさらば見出さん、門を叩けさらば開かれん。すべて、求むるものは得、尋ねるものは見出し、門を叩く者は開かるゝなり」と。これによつて主は我等に、祈りはその答を得るまで續けるべきものなることを教へ給ふたのである。

若しも答が延引されると思はるゝ時は、我ら自身の心を、今一度探つて見る必要がある。即ち動機の不純を疑ふ必要がある。さらば我等の信仰は聖められ、鍊へられ、伸ばされ、更に強められて、大いなる將來の勝利を望むことが出来るのである。イエスは、三度び苦き杯の己れ

より過ぎ去らんことを祈り給うた。併し、彼が恐れたのは、十字架上の死ではなくて、ゲツセマの園に於ける死であつた。パウロは主の御祈りは聞かれたのだと告げて居る。ダニエルは、三週間美味なる食を斷つて祈つた。神は彼に顯はれて語り給うた、「愛せらるゝ人よ、懼るゝ勿れ、安んぜよ、心強かれ、心強かれ」と、又「眞理の御書の中に記されたる處のものを我汝に示さん」と。かくて彼が知らんと欲した凡てのことを、彼に告げ給うたのであつた。又エリヤは、バアルの祭司達を打破つた後、その首を膝の中にうづめ、心を注ぎ出して神に祈りつゝ、七度びその僕を遣はして雨雲が現はれたかどうかをさぐらせた。終に待望んだ雨雲が現はれて、雨は沛然と降つて來た。

たとひ答が永引いたとしても、神は我等にその理由を示さずして、徒らに我等の祈りを拒否し給はないのである。

祈りは神の御榮を現はさんが爲めのものであり、又神の御旨に適ふものでなくてはならぬ。若しも徒らに我等の欲望を遂げんが爲の祈ならば、神はそれに答へ給はないであらう。ヤコブは、或る人々に就て斯く告げてゐる。「汝等求めて尙受けざるは、欲の爲に費さんとて妄りに求むるが

故なり」と、併しヨハネは「我等が神に向いて確信する處は之なり。即ち御意に適ふことを求めば必ず聞き給ふ。斯く求むる處、何事にも聞き給ふと知れば、求めし願を得たることをも知るなり云々」と。

イエスは又仰せられた。「汝等若し我に居り、わが言汝等に居らば、何事にも望にしたがひて求めよ、さらば成らん」と。我等は聖言の中に神の御旨として示されてゐる事柄に基いて求むるのでなくてはならぬ。されば我等は絶えず聖言を學び、夫を心の中に貯へ、又己れ自身は眞に主の御旨の中に居るか否かを檢べて見なければならぬ。かくして眞理に満さるゝが故に、我等は妄りに求むることをしないであらう。又かくして聖靈に満さるゝが故に、我等の祈りは拒絶されることがないであらう。

祈りには又信仰が伴はねばならぬ。即ち信仰の祈りでなければならぬ。「汝等祈りて願ひたることは己に得たりと信ぜよ、さらば得べし」である。私は數日、自分の信仰と確信とを搖がさんとするサタンと激しく戦つた後、或朝實にすばらしい勝利を握つた。私は主のこの御約束を堅く抱いた。そして戦ひ抜いた揚句、終に信仰の祈りの堅き巖の上に立ち得た。かくてその日未だ曾て

経験しなかつた光榮に満ちた救靈會を持つことが出来たのである。信仰が絶えず風に動かさるる海の波の如く動揺してゐる人々は、終に主より何物をも受け得ないであらう。

最後に祈りはイエスの聖名によつてなされねばならぬ。

「汝等がわが名によりて願ふことは、われみな之を爲さん、父、子によりて榮光を受け給はん爲なり」と主は仰せ給うた。

「主の血、主の血、わが凡ての望み」此の願望をもつて、罪にもがける人々は来る。又神の子供は憶せぬ大膽さをもて、父なる神の御座に近づき、罪との戦の爲に、救靈の戦の爲に、又御國建設の爲に、必要な一切の天の能力を祈り求むるのである。

第四章 熱心

曾てシエリダン將軍は、狂暴な敵と戦ひ、雨霰と降る敵弾の中に、大膽に躍り込んで行つた。

「戦に出る時は、いつも勝たざれば歸らずと覺悟してゐた」と、彼は友のボーター將軍に語つた。

此の生命掛けの彼の意氣が、部下の將士を強く鼓舞し、破竹の勢を以て敵を撃破せしめたのである。人を殺す戦争に於てすら、かくの如く生命を賭してかゝるとすれば、況や人を救はんが爲めの戦に於て、我々は更に幾層倍かの眞劍味がなくてはならぬ。

主に就て、「汝の家を憶ふ熱心我を食はん」と記されてゐるが、之は實に凡ての救靈者に就ても同様なことが云へるのである。

パウロと共に「固より生命をも重んぜざるなり」「我主イエスの御名の爲には死をも覺悟せり」と叫ぶことが出来なければ、救靈に於て大いに用ひられることは期し難い。徒らに食物のことを思い煩ひ、早く就寢することのみ願ひ、体給に思を馳せ、健康に氣をとられ、又世の毀譽褒貶に心を動かされ、己が地位の經濟的狀態をかこち、疲れを厭ひ、苦痛を避け、やれ頭痛だ、心勞だ、

咽喉が痛いなどと、理由を述べたてゝゐるものは、例へ外面的には立派な士官或は牧師たり得たとしても、到底偉大な救霊者とはなり得ないのである。

等しく熱心と云ふものの中にも、甚しい害を及ぼすものとして排斥さるべきものが種々ある。

例へば、

一、エヒウの如き偏頗な熱心である。(列王記下一〇・一五—三〇) 神はエヒウを遣はしてアハブの家のものを殺し、バアルの禮拜をこぼたしめんとした。彼は行いて狂暴をつくして、それを行つた。然るにエヒウは尙、心を盡してイスラヘル神エホバの律法を行はんとせず、尙かのイスラヘルに罪を犯させたるヤラベアムの罪を離れざりき……と。かくて神はやがて、彼の家をも亡ぼさざるを得なかつた。

かゝる種類の熱心は、一方に於て或る一つの罪を激しく攻撃し乍ら、他方に於ては他の罪をひそかに犯してゐる人々の間にも屢々見られるものである。

彼等は罪を許容することが出来ないのみならず、又罪人をも許容することが出来ない。然し乍ら、眞の熱心は人をして一方に於ては罪と斷じて妥協せしめないと同時に、又他面に於ては罪人

に對して飽くまでもやさしく又忍耐深からしむるものである。

二、パリサイ人や、サドカイ人達に見らるゝ黨派的熱心である。

今日では甚しい宗派的熱心、教派的熱心となつて現はれ、それが爲に頑迷固陋な人達を作り出してゐる。己が屬する教會又は團體に對して有つ熱心は、或程度まで正しいものである。我等は各々或る宗教團體を通して救はれたのである。そしてその靈的、家庭的、子供となつたものである。即ち聖靈に導かれて、會員を有し、組織を有し、主義綱領を有する天國の雛形なる教會を通して、その家族の一員に加へられたものである。されば其意味に於て、主にありて我等を導き、我等の靈を育む指導者達に對して忠實でなければならぬ。又彼等がキリストに従ふが如く、彼等に従ふやう心掛けねばならぬ。我等は又、それが神の御言と調和する限り、團體の主義に忠實でなければならぬ。更に又、凡ゆる方法をつくして、即ち祈りと願により、或はたゆまざる熱心な働によつて聖潔と公義の中に、その團體を築き上げて行かねばならぬ。これは聖靈の助を得てなすならば、全力を盡してなすことが出来、神も又それを喜び給ふとの確信が與へられるのである。併し乍ら又同時に他の團體の働や、働人を誹謗し、輕蔑し、又は彼等の業をこぼつて、

その上に己れ等の事業を建設しやうなどと企んではならぬ。かゝる熱心は地より出でたるものにして、天より来たものでは断じてない。それは明にかの「己が利を求めざる愛」或は「己れの仕事のみを思はず他のことを思ふ愛」の精神に相反するものである。それはかのブーメンタンの如く、自分の頭上に歸り來つて、己が破滅を齎らす原因となるに過ぎないであらう。

神の御愛は深くして

人の心の測り知られず

永遠の神の御胸は

いみじくもやさし。

眞の熱心は人をしてかく叫ばしむるものである。

三 無知の熱心。パウロは彼の同胞たるユダヤ人達に就て云つた「我が心の願、神に對する祈禱は、彼等の救はれんことなり。われ彼等が神の爲に熱心なることを證す。されどその熱心は知識によらざるなり。それは神の義を知らず、己れの義を立てんとして神の義に服はざればなり。」(ローマ一・一三)と。

眞の熱心は上より來る。その源は主の聖別の山にあり、その噴出する泉は謙遜の深い静かな溪谷にある。それは神の御靈より生れ、「イエスにある眞理」の知識から逆り出づるのである。此の知識には二つの意味が含まる。

その一つは、キリスト無き罪人の、恐ろしき状態に就ての知識である。自らは氣付かざる中にサタンの奴隷となつてゐること、生來の罪の性質、罪の鎖、罪の愛着、神への叛逆、犯せる愆、その孤立無援の姿、父の家と其の幸福とに歸り行くべきすべも知らざる憐れな有様、及び彼がイエスの救を拒けて陥入り行く恐るべき危険等に就ての知識である。

他の一つは云ひ盡せぬ神よりの賜物に就ての知識である。極悪人にも注がるる神の御恩寵、御憐愍、慕ひ喘ぐが如き深き御愛、罪を許し、愆を取除き、神の家族に引入れ給ふ御めぐみ、及び啓蒙、慰安、御導き、御育み、更に又惡しき罪の性質を壊ち、血汐にて洗ひ潔め、御靈もて聖別なし給ふ御業、地獄より天國への救ひ、永遠の御靈によりて、結ばれる父と御子の不變の友好、惠まれたる奉仕と果を結びゆく生活、凡ての悲哀に試練に、或は又損失に苦痛に病苦に勝ち抜いて、終に「おゝ死よ、汝の針は何處にかある、慕よ汝の勝は何處にかある。感謝すべき哉、神は

我等の主イエス・キリストによりて勝を與へ給へり」との、聖き大いなる勝利の凱歌を叫ばしむる信仰と希望等に就ての知識である。

眞の熱心は、我等をして主イエスに對し、又彼がその爲に血汐を流し給うた處の人々の靈魂に對して、忠誠なるものとならしめる。その熱心がパウロをして三年間のエペソ傳道に於て「夜も晝も涙もて警告」なさしめ、又「謙遜の限りをつくして主に仕へしめたのである。又人々に益となる眞理を退かばこそ、憚らずして告げ「公然にても、家々にても、人々を教へ、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に對して悔改め、主イエスに對して信仰すべき事を證」せしめたのである。彼は單に罪人を導き、イエスを救主として仰がしむるを以て満足せずして、更に彼は「彼等の中に在すキリストは實に、榮光の望なること、彼はそのキリストを傳へ、智慧を盡して、凡ての人を訓戒し、凡ての人を教へ、凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて神の御前に立つことを得しめんとすること、及び彼はその爲に、「己れの衷に能力をもて働き給ふ者の活動にしたがひて、力を盡して勞するもの」なることを教へたのであつた。パウロは回心者たちが、その愛と忠誠に於て完くならんことを、嫉むが如くに希望んだ。そして彼の熱心が彼を驅つて、能力をつく

して、人々を此の恵まれたる經驗に導き入れんと努めしめたのである。バツクスターも亦パウロの如くであつた。彼は生涯病苦になやまされ、時には殆ど堪へ切れぬやうな苦痛の中に、百折不撓、人々の完成の爲に戦つた。ウエスレー、フォックス、ブリス大將及び同夫人等皆然りであつた。その他神の熱心に満されたる、凡ゆる救済者等も又然りである。

眞の熱心は又、犠牲的である。神の御榮光の爲に、人類の救とその聖別の爲に、熱情に燃え給うた主イエスは「屠場に就く羔羊の如く」曳き行かれた。主の辱しめと、犠牲的生涯と、死の樣とをイザヤは預言して云うた。「われを撻つものにわが背をまかせ、わが鬚をぬく者に、わが頬をまかせ、恥と唾を、さくる爲に面を掩ふことをせざりき……」と。又「彼は侮られて人に捨てられ、悲哀の人にして病患を知れり……彼は侮られ、我等も彼をたふとまざりき。まことに彼は、我等の病患をおひ、我儕のかなしみを擔へり。然るにわれら思へらく、彼はせめられ神にうたれ苦しめらるゝなりと。彼はわれらの愆の爲に傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罪をうけて、われらに平安を與ふ。そのうたれし痕によりて、われらは癒されたり。……エホバはわれら凡ての者の不義をかれらのうへに置き給へり」と。

主は我等の爲に死ぬるまでに全霊を注ぎ給うた。そしてその御生命を贖として與へ給うた。おゝ聖名を讃めよ！

我等の主が御自身をいけいとして捧げ給うた如く、凡ての救霊者は、各々己が犠牲を捧げねばならぬ。彼等は皆「キリストの體なる教會の爲に、我が身を以て、キリストの患難の缺けたるを補ふ」ものでなくてはならぬ。

或る印度人が、白人から熱心のこと就て、色々の批評を聞かされた時、答へて云つた「熱心があり過ぎて困るなどは考へられませぬ。もえたぎつて、壺からあふれ出てる方が、少しも沸騰しないよりは、よつほどましではありませんか」と。

悪魔大王が或時、何かの大きな記念集會を開いた。そしてその席上で彼の使達が、各々の使命の報告をすることになつた。

第一の使が云ふには、

「私は沙漠の野獸を放つて、クリスチャンの隊商の中に躍り込ませました。そして彼等の骨は沙の上に散亂して居ります。」「それからどうした」と悪魔が聞くと、「が彼等の靈は皆救はれま

した。」「第二の使が云ふには「私は東風を巻き起して、クリスチャン達の乗り込んでゐる船に突き當らせました。彼等は皆溺れてしまひました。」「それでどうした」「彼等の靈は皆救はれました。」「私は十年間たつた一人のクリスチャンを眠らしてしまはうと努力しました」と、第三の使が云ふた。「で到頭成功しました。そして彼をそのままにして來ました」之を聞いて悪魔大王は絶叫し、地獄の夜の星群は歡喜の歌をひびかせた。(ルーテルによる)

われを戦の爲に装はせ、

我が手に戦ふことを訓へ給へ。

われに清き正しき心をそなへ、

語る言の葉を導き給へ。

わが凡ての罪をのぞき、

凡ての業を汝に在りてなさせ、

たゞ愛の故に偽させ給へ。

あゝ主よ、われを、

汝が柔和なる心もて装はしめよ。

わが知にもゆる熱心をして、

余き愛と結ばしめよ。

かくて静かな底ひなき熱心もて、

汝が御意を行はせ、

凡ての人に生命を與ふる、

恵の御言を傳へしめよ。

お、汝が如く、愛するを得せしめよ。

我、御足のあとをふみてゆかん。

汝は、凡ての不義をにくみ給ふ。

されど柔和なるものは、いさしかも、

責め給はず、汝が御業にならばん哉。

われ心をつくして、罪を厭はん、

されど尙罪人を愛せしめ給へ。

第五章 靈的指導者

救靈者は靈的指導力を持たねばならぬ。靈的指導資格は、専ら御靈によるものであり、門閥、地位、名稱、教育乃至は境遇の如何によるものではない。

此處に、世の卑賤なる地位より引上げられた、一介の救世軍士官の、不思議な能力の秘密がある。

ヨセフは年若くして、エジプトの牢獄に投げ込まれた。併し彼は神と共に歩み榮えた人であつた。神、彼と共に在し給ひて、やがて彼はその行くべき處に到つてパロ王の宰相となつた。

パウロはカイザルに上訴せんとしてローマに旅しつゝあつた時、彼は一人の囚人としてローマ兵の監視の下にあつた。併し或る日不思議なる神の御攝理によつて、海荒れ、暴風と大濤が激しく船を打つた。同船の人々が、恐怖にうちふるえた時、パウロはその靈的能力を以て、船中の指導者となつてしまつた。

私は一人の副官(中尉の士官)を知つてゐる。彼は静かな瞑想的な祈り深い忠實な、而も謙遜

な青年士官であつた。彼は特別に、その才能が勝れてゐると思はれぬ士官であつた。處が彼と共に働いてゐた處の少校とその妻とは、彼の膝下に伏して、その靈の指導を求めたのであつた。彼等は彼れの慧き言葉を頼りとした。彼の例に慣はんとした。その靈を尊んだのである。やがて彼が彼等を離れて大尉として他の小隊に轉任した後、彼等は此の若き青年士官の聖らかなその歩み、その基督的生活を讃稱して已まなかつた。少校は小隊の統治者であつた。併し乍らその青年士官は、靈の指導者であつた。何となれば彼は神と共に歩み、神は彼の裏に住み給うたからである。

靈の指導者としての資格は、地位の上昇によつて得られず、又建設せらるゝものでもない。それは多くの祈と、涙と、罪の告白と、深い反省と、神へのへりくだりに依つて、更に又神への絶對服従、凡ゆる偶像の放棄、斷じて惡と妥協せずして終に死をも辭せぬ大膽さと、勇みて十字架を負ひ、十字架の上に生命をすてし主を、永遠に、たゆたわす見つむる信仰によつて得らるゝのである。それは我が身の爲に偉大なる事を求むることによつて得らるゝのではなく、むしろパウロの如く、前には益たりし事を、キリストの爲に損と思ふ事によつて得らるゝのである。即ち

パウロは叫んで云つた、「されど曩に我が益たりし事は、キリストの爲に損なりと思ふに到れり。然り我は我が主キリスト・イエスを知ることの優れたる爲に、凡ての物を損なりと思ひ、彼の爲に既に凡ての物を損せしが之を塵芥の如く思ふ云々……」と。こは實に高き價である。併し乍ら、それは單に名目上の救靈者たるのみならず、進んで人々の眞の靈的指導者となり、その能力が三界に互つて認められ、又天にも地にも陰府にも畏れらるゝ處の、有力なる指導者となる爲には、何人でも拂はねばならぬ價である。モーセは此の靈的指導者としての能力をパロの王宮で、シナイ山の深奥で、又斷食の生活に於て與へられた。彼は「パロの女の子と稱えらるゝを否み、罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民と共に苦しまんことを善しとし、キリストに因るそしりはエヂプトの財寶にまさる大いなる富」と、思つたのである。

靈的指導者は人によつて作られるものではない。又人々の結合によつて生れるものでもない。如何なる集會も、會議も、又帷幄も、之を作り得ず、たゞ神のみがよく作り給ふのである。

靈力とは靈的生命の外部への進出である。そして凡ての生命——壁の上にはらばふ苔の生命から、神の御座近く侍る天使長の生命に至るまで、皆神より出でたものである。されば此の靈的指

導者としての能力を得んと希ふ者は、拂ふべき價を拂うて、神にそれを求めなければならぬ。あのエリヤと洗禮のヨハネ——荒野に叫ぶ、毛深い見すほらしい一介の男——をして、諸侯をふるひ戦かじめ、國々をしたがはしめたあの大預言者たらしめたものは、果して誰であつたか、それは神様である。モーセをエジプトの大學、バロの王宮から取り還して、四十年の間、ミデアンの野に群羊の中で鍛へた後、あの柔和にして、而も二百萬の民衆を率ゐるに足る豪毅な大指導者たらしめ、或は又永遠に輝く立法者、法規の泉源たらしめたものは果して誰であつたか。それは神様であつた。少年サムエルの口に、年老いたる祭司エリに對する預言の言葉を授け、又彼をしてイスラヘルの指導者たらしめたのは果して誰であつたか。神様であつた。少年ダビデを捉へて、柔和なる、忍耐強き羊牧者たらしめ、又彼の胸に凛々たる勇氣をそなへ、その腕に強き力を與へて、獅子や熊と闘はしめ、或は又、巨人ゴリアテを倒さしめ、イスラエルの大軍を統率する技倆を授け、娘達の口から「サウロは千を殺し、ダビデは萬を殺す」と歌はしむるに到つたものは果して誰であつたか。更に又サウロの死後、國の長老達を彼の下に來らしめ、「前にサウロ我等の王たりし時、イスラヘルを導き育てし者は汝なり、主汝に給ふ、汝我が民イスラヘルを育ひそ

の民の首となるべし」と云はしめたのは果して誰であつたか。それは神様であつた。然らば神は何故かゝる人々を特に選び出して、それに入々を指導する能力を賦與したのであらうか。それは彼等にとつては、神が最上の實在であつたからである。彼等は神を信じた。そして神を慕ひ、之を畏れ、信頼し、又従つた。詩篇を読めば、如何に神が彼ダビデの想望、愛情の全部を占めてゐたかをつぶさに知り、彼の指導者としての資格を疑ふことが出来なくなるであらう。それは實に彼の靈的生活、靈的能力、而して神との友好に基を置いたからである。此の靈的指導力は一度之を得たならば、之を永續して保有することが出来る。モーセ、エリヤ、パウロを見よ、フオックス、ウエスレー、フィンニー、ブリス大將その他幾多の指導者達を見よ、彼等は年老いて愈々果を結び、愈々榮えたではないか。私が曾て訪れた齡八十になる白髮の老聖徒は、私の祈つた後で、次のやうに祈り出された。「お父よ、私は貴方の御前に又御使達及び若き兄弟達の前に、老年とは、暮祿して、再び小供に歸り行くてふ、哀れな姿ではなくて、永遠に若しい青春であることを、證することが出来て感謝に堪へませぬ……」と。私は屢々比較的若い人々の中に、自分達がやがて年老ゆれば、經驗に於ては、自分達の足下に

も寄りつけぬやうな貧弱な、然し乍ら元氣に満ちた青年達によつて地位を奪はれ、除け者にされはせぬかとの危懼を抱いてゐる方々を見るのである。彼等は眞の靈的指導者を作るものは、永き奉仕又は深き經驗にあらずして、實に活潑なる靈的生活なることを忘れてゐる。そして又、若しも除け者にされたとしたら、それは彼等が神と共に歩まず聖き生活、又彼等の中に住み給ふ聖靈をゆるがせにしたからである事を忘れてゐる。その奉仕の歲月がいかに永く、その經驗がいかに數多く、又深酷であらうとも、若しも彼等が祈りの心を失ひ、信仰、熱烈な愛、小兒の如き單純さと信頼、及び犠牲の精神を缺き、只古びた過去の經驗と啓示と恩恵にのみ頼つてゐるとすれば、いかで人々の靈に迎へらるゝであらうか。然し乍ら此に反して神よりの新鮮な聖靈を常に注がれ、ひからびた過去の恩恵ではなくて、現在經つゝある經驗に立つ者は、例へその目はかすみ、その指は曲り、聲は老齡の爲に力なくとも、人々の心に歡迎されることは必然である。

その若き頃、聖潔の教理に反對し、聖靈のバプテスマを拆けた或る牧師達、或は又聖靈のバプテスマを受け、後それを失ひ、而も尙大きな講壇を保ち、高き給料を受けてゐる者が、次第々々にその感化力を失ひ、晩年には不平と失望と悲哀と嫉妬とに満ち、神をおろそかにしたが爲に、

終に心の太陽が、はるか雲の彼方に沈んでしまつた人々がある。

又私は他の一群の老人達を知つてゐる。彼等は神に満された人々である。その若き頃イエスの故に迫害せられ、而も尙その靈の味を失はず、主にありて喜び溢れ、彼の弓は力強く張り、心の太陽は赫々と輝き互り、人々の聞かんとして待望む神のメッセージを、全世界に語り傳へてゐる人々である。この點を我等は深く考へねばならぬ。

永き奉仕も又經驗も、所謂時代後れになることから諸君を防止することは出来ぬかも知れぬ。然し乍ら、只々諸君の裏に住み給ふ神にはそれが可能なのである。神は常に最新にて在し給ふ。人々の要するものは神である。

かのモーセや、サムエル、ダビデ、ダニエル又はパウロ等は、彼等が指導者として起たしめられた時、過去に於て果して幾何の奉仕をなし、又何程の經驗を積んで居つたか。殆ど皆無だつたのである。併し乍ら彼等は神に觸れて居つた。彼等は惟々として神の御意思に服つた。柔和にして信頼に満ち、従順にして勇敢な、而も不平を知らざる人々であつた。

彼等は神の恵に満ちてゐた。やがて自分等の活動が迎へられなくなり、隅の方に押込められる

日の来る事を危惧してゐるものがありとすれば、此の一事を考へて戴き度い。即ち神に満ちた人は斷じて御用済にはならぬと云ふことを。若しも沙漠の如き地に置かれたとするか、曾てエルサレム及び近在の人々が、イエスやヨハネの下に集つた如く、人々は諸君の周圍に集り來るであらう。又社會の片隅におし込まれたとするか、世界は立ち止り、耳をそば立て、その片隅に向け、神よりの新しきメッセヂを聞かんとするであらう。人々はパウロを牢獄にとち込めた。併し彼は其處で聖靈の焔に燃えた生命と能力の言葉を語り、又書き綴つた。處がそれが以前にも増して人々の思想を嚮導し、信仰を勵まし、愛を燃やす爲に、大なる仕事をなしたのである。ユダヤ人やロマ人は、パウロの首を刎ねた時、彼は永遠に消え去つたと思つたに違ない。然るに見よ、二千年後の今日、彼の感化は更に愈々増し加はるのみではないか。之と同じく人々はグーヨン夫人をバスチーユの牢獄に、又バンヤンをベッドフォードの牢獄に投じて、その口を黙さしめんとした。が併し誰か、神が人を通じて語らんとし給ふ時、天雷の如きその御聲を鎮め、又細き靜かなるその御さゝやきを消し得るであらうか。その靜かなる牢獄は、たと天と連結せる公衆電話局となるのみである。

或る日、或る都會の一個で一人の人が死んだ。彼は七十を過ぎた老牧師であつた。四十七歳の頃、過勞のため、終にその健康を害し、その後五ヶ年程は、書物の一章も否、聖書すらも讀めぬ程であつた。而も尙彼は神と人々とに對する信仰を堅く握り、その愛は日々に成長し、斯くて餘生を全うして逝いたのであるが、全世界を通じて彼に依つて救はれ、潔められ、或は勵まされた人々から、或は又彼の言葉を通じ、生活を通じ、又は彼が人々の救済と聖潔の爲に設けた諸機關を通じて、神の御用に起たしめられた人々から、心よりの哀悼を受けたのである。彼の最大事業は、實に彼が六十を過ぎてから完成されたのである。

然し乍ら、かゝる靈的能力及び指導力は、之を保持し得るものなると同時に、他面、又、極めて微妙なるものであつて、永遠に之を失つてしまふ恐れがある。

己が微弱者なるを知つた時、サウルは王とせられた。併し、やがて彼が高く引上げらるゝや、彼は不從順となり、彼の王土は取上げられ、他の人に移されてしまつた。これは我等が次の如き聖言もて、常に警戒される點ではなからうか。「汝の有つものを守りて汝の冠冕を人に奪はれざれ」と、ユダの使徒としての資格は他に移されてしまつた。「悪しくして怠慢なる僕より」取り上げら

れた一タラントは、十タラントを有てる者に與へられたのである。

私は一人の傳道者を知つてゐる。彼の周囲には、彼の指導と啓發とを求めてゐた幾多の、前途有爲な、眞摯な、而も柔和にして靈的向上に燃ゆる、若き傳道者達が集つて居た。彼は一夕、彼等を自分の家庭に招待した。處が彼等が靈の糧を待望してゐた時に、コーヒーと菓子運ばれ、彼等が祈りと獎勵とを望んだ時に、將基の盤が持ち出された。その夜の機會は永遠に逸せられ、神にあつて彼等を互に確く結びつけてゐた繼は、次第に緩み弱められて來た。斯くてその中の一人二人との間の鎖は依然結ばれてはゐたが、そして又彼の社會的、名義的な指導者としての資格は尙認められてはゐたが、彼の強大なる靈的指導力はあはれ悲しくも永遠に失せ去つたのであつた。「愛する者よ、汝等は己が甚潔き信仰の上に徳を建て、聖靈によりて祈り、神の愛の中に己れを守り、永遠の生命を得るまで、我等の主イエス・キリストの憐憫を待て……願くは汝等を守りて躓かしめず、瑕なくして榮光の御前に歡喜をもて立つことを得しめ給ふ者、即ち我等の救主なる唯一の神に、榮光、稜威、權力、權威、われらの主イエス・キリストに由りて萬世の前にも、今も、萬世までも在らんことを、アーメン。」

第六章 時間の尊重

救靈者は時を尊重せねばならぬ。ダイヤモンドも金塊も「時」の價値に比すべくもない。ウエスレーは或る朝五時頃、馬車の別當の怠慢によつて、十分間を失つてしまつた。そしてその日、一日中恰も寶でも失つたかの如くにそれを慨いたと云れてゐる。ジョンソン博士の談によると、メラクトンと云ふ人は、約束をする時、何時何分までも正確に定められんことを乞うた。と云ふのは、彼は一日が中ぶらりんの中に過ぎ去つてしまふことを極度に嫌つたからである。一人の婦人が私の處に來られて云ふには「私は時間を正確に守りさへすれば、きつと教師の地位に就けると存じて參りました。」すると今一人の婦人は「前の人よりもつとその地位には適任者ではあつたが——少し遅れてやつて來られて云ふには「二三分位遅れましても別に御差支へなからうかと存じました。」後の婦人は、既に先生が定まつて居りますからと云ふ理由で、丁寧に斷られねばならなかつた。「永遠」とは分秒の集積である。されば「失はれたる時は」即ち「失はれたる永遠」と云ふことになるのである。

グラッドストーンは云つた。私は確信を以て云ふ事が出来る。時の節約は後年に及んで必ずや諸君に、その最も樂觀的な豫想を遙に越して、高い利子を以て酬ゆるであらうし、又時の空費は、諸君の最も絶望的な計算を更に越えて、その知的及び道德的身長を縮むるであらう」と。しかも無思慮な怠惰者は、退屈を凌ぐにことよせて、彼等の最も尊むべき所有物を破壊しつゝある。神に在すとのたのしき自覚、使命の確信、及び神への心からの服従なくして、何の人生があり得よう。暇つぶしをやる人は、忘却を求めてゐるのであるから、寧ろ死んでゐる方がましだと思はれる。

ジャン・パウル・リヒテは云つてゐる。未來と云ふも、それは今眼前に迫りつゝある現在のことに過ぎない。而して諸君が怠慢に過しつゝある現在とは、諸君が曾て未來として望んで居つた處のものである」と。又或る哲學者の言に、「人の生活は現在の中にのみ存する。何となれば過去は既に過ぎ去つたものであり、未來は不確實だからである」とある。

若も諸君が時を利用せんとするならば、諸君が朝、目を醒したその瞬間から初める事である。怠惰にして愚な、又有害な思念を心に抱かぬ先に神に祈り、聖名を讃美しその御榮光を默想し、

神の善と信實と眞理とに就て冥想して見給へ。必ずや諸君の心は裏に燃え、靈は歡喜に満ち溢れるであらう。直に床を蹴つて起き出で、仕事に取り掛り、それを進行せしめて行くのである。さうでなければ諸君は一日中、その仕事に追はれ通して 過ぎねばならぬであらう。

或る士官が或る日私に向つて、こんなことを云うたのを思ひ出す。働く習慣をつけますと、大きな利益があるものです。一度習慣をつけますと、人は自然にさうなつて来るものです。私はそれを體驗して知りました。その結果は、以前のやうに時間を損失する事がなくなりました」と。賢き者と、愚なる者、富める者と貧しき者、聖者と凡人、及び救はれたる者とわざはひなる者との相異は、境遇や、人生のスタートの如何によるよりも、むしろ人々が如何に時を利用したかと云ふ一點に存する場合が多い。甲はその抱懐する一つの目的の爲に時を有益に用ひる。乙は目的もなく徒らに之を浪費する。或る人は分秒をも惜しんで働く、他の人は多くの日と月と年を空費して何事をも成さない。Aは常に醒めて何事かをなしてゐる。その凡ての時を眞理の追求に、神への祈禱に、イエスとの交に、或は同朋への奉仕に、又は聖者の訪問に、罪人への警告にそれを費してゐる。Bはいつも目の前に現はれる機會を看過して、漠とした目的を抱き、行けば行く

程、愈々遠くなつて行く鬼火のやうな將來の空想に耽つてゐる。或る者は、己が馳場を忍耐と確信とをもつて走りつゝ、やがて「榮光と名譽、平和と永遠の生命」に到り、他の人は夢幻の中に漂ひつゝ、憤怒と災害と苦悶の地に、そして終には永遠の亡びに到るのである。

時を利用すると云うても、何も特別な急激を要するのではない。要は只、躊躇せず確實に、靜かに分秒を用ひて行くことである。「ゆつくり急げ」とは、陳腐だが併し穿つた諺である。

時を節約する爲に、救霊者は夜の集會後、直に床に就き、朝は定まつた時間に、きちんと起きるやうにすることが必要である。偉大な事業を成遂げた人々は皆、同じやうに朝早くから仕事に取掛つた人々である。

或る人は只朝食前のわづかな時間丈を用ひて、十六冊の本を、それよりも少い年數の中に、書き上げたと云ふことである。

又時間を節約する爲に、いつも聖書とノートブックとペン等を手にしてゐることはよいことである。旅行をする時でも、二三冊の書籍を携へることはよいことであるが、例ひそれが出来なくとも、尠く共聖書丈は是非持つて行くやうにせねばならぬ。そしてそれを大いに利用するのである。

例へばマタイ傳は二時間で讀了出来る。之れは決して有益な讀方とは云へないが、然し一寸座つてゐる間に、或る他の人の傳記を讀むやうに、イエスの御生涯の概略を讀み直ることが出来る。と云ふ益がある。テモテ前書は二十分で讀めるし、又ユダ書は僅か三分間で容易に讀める。さればこれらの時間を、無意味に擲つてはならぬ。

ブリス大將夫人は、多忙な家事と小供達の養育の間から、わづかの時間を見出して、あの全英國を動かした大説教を作成し、又救世軍の創業に大いなる力を盡したのであつた。

煙草をくゆらし乍ら小説に讀み耽つてゐる牧師や、又ギターを弾いたり新聞を讀み耽つてゐる兵士は、到底救霊の事業に於て成功を望み得ないものである。

更に又救霊者は「機を得るも機を得ざるも」信仰の事に就て、人々を奨励することによつて時を有効に用ひることが出来る。アンクル・ジョン・バツサルは、一風變つた、然し驚くべき救霊の成功者であつた。或る日のことボストンのホテルで、二人の貴婦人がバーラーに居るのを見付け、早速近づいて行つて、彼等が神と和いであるかどうかを尋ねた。そしてそれを端緒として親切に而も熱心を込めて主イエスのことを語り、彼等がイエスを救主として仰ぎ、死と審判とに對して

準備するやうにと奨めた。數分経つた後、その一人の貴婦人の夫が入つて来て、彼等が目に涙を浮べてゐる様を見つけ、不審に思ひその譯を聞くと彼等が答へて云ふには「或る見知らぬ小さな男の方がおいでになつて、今まで私達に宗教のことを語り、神様を信じて、救はれるやうにとすゝめて下さつたのです」ふん、若しわしが此處に居つたらそんなことぐづく云はんで、早く自分の仕事でもやれと云つてやつたになあ」でもあなた、あなたがもし此處にいらつしやつたらきつと、その御方は自分の仕事をしていらつしやるんだと御思ひになつたに違ありませんわ………。

ジェームス・ブレナード・テラーが或る時水槽の處で一人の旅人に會つた。そして彼等の馬が水を飲んでゐる僅か五分の間に、彼はその旅人に向つてイエスのことを語つた。その後になつてその旅人は救はれてやがてアフリカの宣教師となつた。彼等はその時以來再び會ふ機會がなかつた。そして旅人は自分をイエスに導いて呉れためぐみの天使は一體何人であつたかを知らなかつた。アフリカで或る日書物の入つてゐる箱を受取つた。そしてその中から一冊の記念帳を取出し

て開いて見ると、彼はそこに一人の聖者のやうな姿をした若者の繪姿を見出した。その若者は、父の仕事を手傳ひながら、水槽の處で馬に水を飲ませてゐる間に、つまらない時候の挨拶などにつぶす暇を利用してイエスの證をしてゐる處であつた。

時間から云ふと、友達にその靈の状態をたづねるのは、御健康は如何ですかと尋ねると同じ位簡單である。然し前者の場合は、後者の場合よりも、より大いなる愛と祈りと知慧とを要する。又それが爲には自分の靈が常に覺醒して居らねばならない。されば救靈者は之等をいつも自ら備へて居らなくてはならない。

多くの人々は無秩序の爲に時を空費する場合が甚だ多い。多くの事が無秩序に行はれ、仕事が無脈になつて来る、そして一つの仕事を終へると、次には何を爲さんかを決定するのに時間を空費すると云ふ状態である。されば、毎日々々一定のプログラムを作つて置くことはよいことである。更に進んで出来ることなら、會つてブラス大將が、旅行する時いつも、なしたやうに毎時毎分に到るまで、プログラムを作成して置くことは尙更結構なことである。數ヶ月の先まで彼は一日の各時間に對してプログラムを作つた。そしてその細部に渡つて實行し得ても得なくとも、兎に

角、それに依つて仕事を進めて行つた。かくて彼は餘計な心配もせず又時を空費することもなく殆ど信ぜられぬ程の莫大な仕事を成遂けて行つたのである。

勿論此の忙がしい社會生活に於ては時々驚くやうな事件が起つたり、又豫期しない訪問などがあつて、如何なるプログラムでも撓められ勝て、到底鑄鐵のやうに堅固ではあり得ない。されば一旦事ある時は、救霊者はそのプログラムを、風に任せて、己れは御靈に導かるゝ最善の判断に随つて、いそしみ歌ひつゝ進んで行くべきである。

きみなるエスよ、けがれしわれを、

あらひきよめて、めぐみをたまへ。

わが日わがとき、わがものみなは、

きみの御ために、もちたまひれ。

われのしたをば、すくひのぬしの、

めぐみをうたふ、うつわとなして、

わがくちびるに、よきおとづれを、
あふるゝばかり、みたしめたまへ。
こがれしろがれ、ちよもちからも、
いまさぐれば、みなとりもちぬ。
われのこゝろを、みくらとなして、
みむれのまゝに、しろしめしてよ。

最後に、時を利用せんとすれば常に良心を深く保ち、又イエスに對し、又亡び行く世に對して、自然的愛に満されて居らねばならない。「神を信頼せよ！」斯くて勝利を期待せよ。疑や失望ほど人の精力を奪ひ、活動力をにぶらし、聖い高い努力に對する勵みを奪ひ去るものはない。勝利を期することは諸君の義務である。アリに於ける敗北の後ヨシユアは、失望の餘り、その凡ての努力を投げ打ち、面を地に伏せて倒れてしまつた。エホバは彼に近づき仰せ給うた。「立てよ、なんぢ何とて斯くは、ひれ伏すや。イスラエルすでに罪を犯し、わが彼等に命じおける契約を破

れり、即ち彼等は誑はれし物を取り、竊み、かつ詐りてこれを己の所有物の中に入れてたり。是をもてイスラエルの人々は敵に當ること能はず……汝等其の誑はれし物を汝らの申より絶つにあらざれば我ふたゞび汝らと借にをらじ。たてよ民を潔めて云へ、汝等身を潔めよ……しと。

神はヨシユアが起つて、何事でも爲すことを望み給うた。若しも敵を掃蕩することが出来ないとなれば、その時は己が軍營を潔めて、而して失望するなど仰せられたのである。神を信頼せよ又人を信頼せよ、而して人々を信頼し得ないときは、彼等を愛し、彼等の爲に祈れ、さらば時を節することが出来ると共に、靈を神に導くことが出来る。

歌

一 主よ、我れ聖名をしたひてゆかん、

そはわが日々のつとめなり、

思ふにも語るにも働くにも、

汝を、たゞ汝のみ知らんと欲す。

二 主が授け給ひし御つとめを、

こゝろいさみて遂げしめたまへ。

わがなす凡ての業に、汝が臨在を拜し、

主の御聖旨をばさとらしめ給へ。

三 主をわが右手におき、

わが哀なる心常に聖顔を見つめしめよ。

汝が聖聲聞きて働き、

わが凡ての働を聖前に捧げしめ給へ。

四 われに汝が易きくびきを負はせ、

常にめざめて祈らしめ給へ。

常に永世を望み見て、

汝が榮光の日に入らしめ給へ。

五 汝が爲に、喜びて果さん、

恩恵もて汝が與へし凡てのつとめを、

歡喜もて、わが道程を走り、

主と共に歩みて御國に入らん。

第七章 何を學ぶべきか

何人も眞理を忠實に探求し、又神の御意と御攝理、人間の心理及び救靈の方法等に就て、常に勤勉な研究をするものでなくては、到底成功ある救靈者となることは出来ない。充分の研究なしでは、家屋の建築も詩の創作も市政の運用も、或は又商店の經營も出来ない。否唯一つの蹄鐵も鼠取りの良すらも、之を製することは出来ないのである。醫者は微妙な内臟組織を知り、肉體を侵す陰險なる病氣と、それに對する種々の治療法に通曉せんが爲には、常に勤勉な研究を怠つてはならない。又辯護士は裁判官や陪審員達を前にして、利己的な、陰險な對手を向に廻して、勝を得んとすれば、又勤勉な研究を必要とする。

斯く考へ來れば、救靈者こそ靈魂を蝕む病氣、種々雑多な邪惡、欺瞞及び靈の凡ての要求を滿さしめんとして神が供へてゐる給ふ偉大な救治方法等に就て、常に深い研究を必要とするものではないか。貌を變へて云へば、良心の法廷に於て、過去六千年間、人の子達を欺き、永遠の亡びに投げ込んで來た、不具戴天の敵サタンの助けを受けて、惡辣な反抗を試むる欺瞞の心と戦ひ、

之に打勝たんが爲に、尙一層の深い研究を必要とするではないか。

パウロはテモテに書き遺つて「汝眞理の言を正しく教へ、恥づる處なき働人となりて神の前に鍊達せるものとならんことを勵め」讀むこと、勤むること、教ふることに心を用ひよ……汝に賜はりたる賜物を等閑にすな。汝心を傾けて、之等のことを専ら務めよ。汝の進歩の明ならん爲なり。」と勸めて居る。おゝ一度び身を救霊者の地位に置いた者は何人も、彼が如何に驚くべき多くの障害と戦ひ、而して信仰の神と忠實なる研究によつて「神に嘉ばれ、恥づる處なき働人」となり得たかを充分認めることが出来るであらう。感謝すべき哉、神に召されたる者には失望落膽は斷じて無用である。その持てる才能を袂紗に包み、死藏するを罷めよ。又その時を、徒なる空想に費すを罷めよ。かくて己が衷にある凡ての才能を喚起し、一日の中、たとひ極めて微細なる時なりとも之を利用し、己が心の啓發の爲に又、神が召し給ひし仕事に己れを適せしめんが爲に絶えず研鑽を勵むべきである。さらば必ずや神の御祝福の中に「凡ての善き業に備へらるゝ」に到るであらう。

一 我々が研究すべき最初のものにして而も最後のものは聖書である。醫者は例へ法律、藝術、

歴史、或は神學に精しくとも、若しも醫書に通曉してゐないとしたら醫者としては失敗である。又法律家は萬卷の書を讀了し全世界を遊歴し、所謂「生きた百科辭典」になり得たとしても、法律の書籍に精通してゐなかつたとしたら彼は法律家としては失敗である。

それと同じことが救霊者に就ても云へるのである。即ち、救霊者が例へ何萬卷の書物を讀破したとしても、又長い詩を引用し得ることが出来、その他、科學、歴史等に關する凡ての事實に精通したとしても、或は又深い理論家であり得たとしても、若しも彼が聖書の勤勉なる研究家でないかつたとしたら、彼は救霊者として、永く成功を收めることは出来ぬであらう。救霊者は神の思想に滿された者にならなければならぬ。彼は御言を受けて之を消化し、心靈の血となし、骨となし肉となし、神經となし、髓となし、終に或る人が云つたやうに、人間の皮膚に包まれた、長さ六呎、幅十八吋の「生きた聖書」とならなくてはならぬ。

フィンニイは毎朝四時に起き出で、八時まで聖書を讀み續けた。ポストンに於ける或るリバイバル集會の席上で彼は云うた。「私は深い祈りに身も心も打込んだ。夜の集りが終ると、出来る丈早く寢に就き、朝はいつも四時にきつと起きた。それ以上眠つてゐることが出来なかつたのであ

る。そして神との深い交りに浸りつゝ、屢々八時に朝食に呼ばるゝ頃まで祈りつゞけるのであつた。私は又過去の日々、能ふ限り多くの時を、聖書の研究に費した。私は此の冬中通して唯一巻の聖書にのみ読み耽つた。そしてその多くの部分は私に取つては、いつも新しく感ぜられた。もう一度主は私を創世記から黙示録まで導いて下さつた。主は私に凡ての記事の關聯する處や又主の御約束、御警告及び預言等に就て、又それら凡ての成就に就て、新しく悟らせて下さつた。聖書全體が煌々たる光を放ち、聖言の一つ一つに神の御生命が満ち／＼て居るやうに感ぜられた……。」

聖旨を勤勉に學ぶことは實に神よりの御命令である。神はヨシユアに併せ給うた。「此の律法の書を汝の口より離さずして、夜も晝も之を思ふべし」と。かゝる勤勉な研究の目的は何かと云へば「その中に録されたる所を悉く守りて行」はんが爲であり、その結果「汝の途、福利を得、汝必ず勝利を得べし」と云ふに到るのである。メビデの所謂、恵まれたる人々は、單に不信の輩との交際を拒絶した人々と云ふのではなくて、彼等の途から全く離れ、「神の律法を喜びて、夜も晝も之を念ふ」處の人を云うたのである。義しき人と罪人とを較ぶれば、一は水流のほとりに

植ゑられて果を結ぶ樹であり、他は風にふき去らるゝ糞糖の如きものである。イエスはサタンに向つて「人はパンのみにて生くるものにあらず、神の口より出づる凡ての言葉による」と叫ばれ、聖言の如何に重要なかを宣言せられたのである。

ブース大將夫人は、十二歳になるまでに已に幾回となく、聖書を繰り返し通讀して居られた。神が彼女をして、「萬國民の母」となし給うたのは宜なる哉である。彼女は眞理にて満ちてゐた。一度口を開けば、そこから恥と虚欺とを責め、欺瞞に満つるサタンの王國を覆へして、人々の心に、義と眞理の神の御國を建設せしむる、神の御言が、泉の如く迸り出るのであつた。

私も又、今日まで幾度も繰り返し聖書を通讀したが、而も尙それは常に新しい。これはダビデの如く「汝の聖言は、之を蜜にくらぶるも蜂のすの滴瀝にくらぶるも、いやまさりて甘し」と歌ふことが出来る、又ヨブと共に「我が法よりも彼の口の言語を重んぜり」と云ふことが出来る。

ウエスレーは、その晩年に於て、自らを「一書の人」と稱して居つた。救霊者は此の武器庫から、凡ての惡と戦ふべき武器を取り出すのである。又その中に於て、彼は神の御意を悟り、キリ

スト・イエスに就ける眞理を學び、又罪に就き、罪よりの救に就き、更に天國、地獄に就き、又審判、永生等の問題に就て學ぶのである。其處に於て、彼は神の律法を學び、無智なるものへの警告、回心者への約束、望を失へる靈への奨勵、傷つける者、病める者への癒し、而して又、死にたる如き靈に、生命を吹き込むことを學ぶのである。救霊者は神の御言葉を述べ傳へる。何となれば、聖言は即ち「教誨と譴責と矯正と義を薰陶するに益」があり「神の人の全くなりて、諸般の善き業に備へ」せしむるからである。而してそれを述べ傳ふるに當つて、「天より遣はされたる聖靈」によつて、古の預言者達の如く語る時は、その御言は實に活きて働き、「兩刃の劍よりも利くして、精神と靈魂、關節と骨髓を透して之を割ち、心の念と志望とを驗す」ものである。私は屢々聖書の御言を讀み、又引證した時、人々の胸に抱ける問題に命中して、電光の如くその心を打つのを見た。エホバ云ひ給ふ「我が言葉は火の如くならずや、又磐を打碎く鐵の如くならずや」と。

併し乍ら救霊者はたゞ單に説教する爲に、聖書を研究するものであつてはならぬ。彼自身が、先づそれによつて生き、それによつて備へられ、力づけられ、啓發せられ、矯正せられて、慧き

者とならねばならぬ。先づ第一に御言が己が靈の糧となり、靈的生活の一部分となつた後、始めて力強くそれを説教し、又人々の救に適用して、善き効果を收め得るに到るのである。而して斯くあらんが爲には、先づ何よりも聖靈に滿されてゐることを必要とする。事實聖靈に滿されてゐる時にのみ眞に、聖言より益を得、又それに對して一層の愛を持つことが出来るのである。聖書は靈眼の開けない人々に取つては、實に封せられたる書物である。併し乍ら、慰主なる聖靈が來る時、その不可思議なる意味が眞晝の如く明になつて來る。

私が最近讀んだものの中に、一人の少年のことが書いてあつた。彼は未だ聖靈のバプテスマを受けると云ふことに就て、文字では讀むことの出来ぬ幼い子供であつた。そこで未信者の姉にそれを讀んでもらつた。そして彼はその意味をその姉に説明することが出来たと云ふのである。古の聖者達を動かして書かしめ給うた聖靈が、その少年の心に宿り給うて、彼をしてその意味を悟らしめたのであつた。實に、只々聖靈のみが人々を助けて、神の御言を悟らしむるのである。

聖書を、非常に愛讀してゐた一人の黒人の婦人がゐた。彼女がいつもそれに讀み耽つてゐるの

を見て、或る人が一冊の註釋書を彼女に與へた。二三日経つて與へた人が彼女に會つて「アンテ
イさん、先達つて差上げた本は如何でした？」と問ふと、「ええ、随分いゝ本で御座いました。け
れど、バイブルをつけて見ますと、一層よくわかりますの」と彼女は答へたと云ふ。

ペリアンス教團の人々は我々に聖書の讀方を教示してゐる。

(イ) 彼等は聖言を心から信じて受けた。

(ロ) 彼等は聖書を深く追求した。決してあわたましい、おろそかな態度で讀まないで、丁度

隠れた寶でも探すやうな態度で、其の眞意を探ねた。

(ハ) 彼等は、さうした研究を日々につづけた。

私自身に就て云うても永い年月、私は一日の最善の時間を聖書の研究に用ひた。そして今では

私は食物以上に聖書を求むるものとなつた。

聖書は、朝早く、まだ他の事柄が入込んで來ない前に拜讀すべきである。そして拜讀した事は
よく記憶することである。食物に就て見ても、我々に益を與へるものは、我等の攝取する量の多
少ではなくて、我等が消化する量の多少によつて定められる。普通の讀書に於ても、聖書の研究

に於ても全く之と同じで、我々を益するものは、我等が讀んだ全部の量ではなくて、よく記憶せ
られ又消化せられたもの丈である。

二 救靈者は又、聖書以外にも、種々な讀書の途を講すべきである。そして一日に數頁宛讀ん
でその習慣を確實につづけることである。一日に十頁宛讀んでも一年間には十冊から十五冊位の
本は裕に讀める。凡ての救世軍士官は大將の書簡、聖書讀本、戰場士官の卷、及びブース夫人の
著書、テラーの「聖徒の生と死」、ローの「嚴なる召命」及びバックスターの「聖徒の永遠の安息」、
エドワードの「ブレインードの一生」、ウエスレーの著作、及び「フレツチャの生涯」プラムウエ
ル傳「天路歷程」等は、是非共讀むべきである。又フイニイや、コーフェイの著書等は、救靈者
が再三再四通讀して、而も尙無限の糧を與へらるゝ一つの文庫を成すであらう。

餘りに多くの時を新聞の閲覽に費すのは感心出來ない。さりとてそれを全く棄てゝ省みぬのも
又賢明ではないであらう。只々深い研究と眞剣な祈りに用ふべき時間を、新聞の閲覽によつて奪
はれる恐れがあるとすれば、むしろ全然それを棄てた方がよいと云ふ丈のことである。ブース大
將が「わしはもう十日も新聞を讀んでゐないよ」と云はれたのを聞いたことがある。凡て有用な

知識は救霊者にとつて悉く貴いものである。されば凡ゆる方面から知識を求むべきである。而してそれが爲に、いつもノートブックを手にして、常にノートを取るやうにすることはよいことである。

三 救霊者は書物の研究以外に又、人々の心理及び救霊の手段方法等に就ても、研究をなすべきである。自分の知る限りに於ては、人間の心理と、彼等を救はんとして働き給ふ聖霊の御導きを確知する最善にして、又最も確實な方法は、自分の周囲にあるクリスチャン達に、個人的に接し、親しく語り合ひ、その宗教経験に就て尋ねて見ることだと思はれる。これは人間の心理、クリスチャンの生活、及び宗教経験等を研究するに當つて用ひらるゝ科學的な研究方法であつて、語るべき靈を見出したならば何處にても適用され得る方法である。

「智慧ある者は人を捕ふ」(箴言)

第八章 健康に就て

救霊者は己が身を無法に抱きしめ、愛撫し憐めと云ふのでは勿論ないが、自分の肉體を保護する爲に、凡ゆる適當な方法を用ひねばならぬ。それは彼の聖い義務である。肉體は心や靈が此の地上に於て、依つて以て働かんが爲の機關である。優れたる樂器が音樂家に取り、又鞏固な舟が漕手に取り重要であるやうに、肉體の健康は、救霊者にとつて極めて重要なものである。されば恰も獵師が銃を大事にし、樵夫が斧を大切にするやうに、救霊者はその肉體を大切に保護せねばならぬ。パウロは云つた、「汝等の身は聖霊の宮なるを知らざるか」と。更に又「人若し神の宮を毀たば神彼を毀ち給はん」と。巧なる音樂家が、豊かな妙えなる音を奏で得るのはその樂器に負ふ所が多い。それと同じく人々は人生の凡ゆる活動に於て、その知的或は靈的能力が、よつて以て活躍する處の肉體の健康に制限され、又それに依存する處が甚だ多いのである。

世に名をなした人々の大部分は——勿論その中には特異な例外もないが——みな肉體の健康でふ立派な足場を恵まれてゐた。モーセが百二十歳で、ニーボー山で死んだ時、彼の目は

「尙ほ其の氣力は衰へ」なかつたと云ふ。而もその時まで既に彼は、四百年の永き奴隸の鎖から釋き放たれ、磽确の荒野を彷徨するイスラエルの民衆を率ひて、或は組織に、立法に、或は審判に統率に、四十年の間驚歎すべき多くの仕事を成し遂げて來たのであつた。

日々心をなやます教會の問題に苦しめられ、剩へ或る時は石を投ぜられ、鞭打たれ、牢獄に繋かれ、又或る時は破船に遭ひ、飢と渴きに追はれ、猛獸と闘ひ、更に狂暴なる人々と戦はねばならなかつた斯のパウロは、がつしりした體格と、善き健康の持主であつたに違ない。

ウエスレーは僅か百廿磅の小男であつた。然し彼の健康は人並勝れてゐた。そしてそれは生來の肉體の精力によると云ふよりは——勿論それもあつたが——彼が須ひた規則正しい習慣と、健全な計畫とに負ふ處が多かつたのである。彼には十九人の兄弟があつた。そして彼の父は貧乏な牧師であつた。數年の間彼はパンの外何も食べるものがなかつたと云ふ——それが彼の小男である理由かも知れぬ——然し彼の言ふ處によると、それが後日、彼の善い健康の基礎を築いたのであらうと云ふ。然しそのパンたるや、全く麥製のもので、近頃のパン屋の製る、白い、澱粉の入つたパンではなかつた。彼は晩年に及んで、一食に二三種の僅かな食物しか攝らなかつた。彼の

生活は大部分戶外で過された。而も殆ど毎日説教し、或る時には野外で一日に數度の説教をしたこともあつた。七十三歳の時の彼の日記には次のやうな變つた記事が載つてゐる。自分は今七十三歳になるが、二十三歳の若い頃よりもつと元氣に説教が出来る。自然的方法に依つて神がいかに大いなる結果を齎らし給ふかをたゞ驚かすには居られない。」

「第一に一年に四千哩を旅行することによつて、絶えず運動し、又轉地をなし得ること（事實、彼はいつも馬か或は馬車で、寒い冬の日も又眞夏の日中も旅行して居つた。）第二に毎朝四時に起きること。第三に自分がいつも求めてゐた技術があつたとすれば、それは床に就けば直に眠りつけることであつた。第四に夜、就寝を缺かさなないこと。（勿論、彼の日記の或處には數夜徹夜して祈つたことが書いてある。）第五には、二度激しい熱病に冒されたことと、二度惡性の肺疾に罹つたことであつた。併し之等は實際荒い療治薬ではあつたが、驚くべき効驗を自分の體の上に顯はして、それを小供の肉體のやうに若々しく蘇らせて呉れた。最後に私は氣分の平靜を附加へることが出来ようか。私は深く感じもし又、悲しむことがある。然し神のめぐみによつて、決して思ひ煩ふことがなかつた。而して尙、若し此の世に何事かを貢獻し得たとすれば、それは多

くの祈りに答へられて神御自身が爲し給うたのである。」

一七八二年の彼の日記の中にも同じやうな記事が見られる。私は今八十になつた、併し感謝すべき哉、私の時は「勤勞とかなしみ」の時ではない。私は二十四、五歳の頃と同じやうに、今も尙、心勞も又肉體的苦痛も感じない……」と。そして前述の諸種の理由以外に、更に附加へて「私は第一にこのことを、私をその貴い御用に召して下さつた神の御能力に歸せねばならない。そして第二には説教すること、殊に早く朝説教することに歸することが出来よう……」と。彼は朝の説教は夏はいつも五時に、冬は六時にするのが常であつた。

若い人々は自分の健康や力を放漫に浪費する。そして自然は彼等に、之等の實に對して大きな爲替を組むことを許してゐる。併しやがて厳格な計算を要求する時が来る。その時には利子も元金も一所に要求されるのである。處が屢々、若い頃は、健康の貧弱であつたものが、たえずその健康に意を用ひ健康の法則を守り、肉體に過重の荷を負はせぬやうにして、初めはより大きな健康の資本を以て出發した人達よりも、遙に永く生き又更にまさつた多くの仕事を成遂けてゐる例はむしろ顯著な事實である。

健康と長壽と楽しい晩年とを希ふ者は、簡易な、規則正しい生活を送らねばならぬ。又充分な睡眠をとると同時に、餘分の眠りを取らぬやう注意することが必要である。ウエスレーは夜は六時間の睡眠でやつて行けたが、彼は又一日の中に何度となく短い眠りをとつたし、又時には馬上でも眠れると云ふ風であつた。ナポレオンは屢々僅か三時間の睡眠で足りたと云つてゐるが、グラント將軍の如きは、その最も激しい戦に於ては、どうしても九時間の睡眠を必要としたと云ふ。ブリス大將は、尠くとも八時間の睡眠が必要だと云はれたのを聞いたことがある。婦人は一般に男子よりも一時間餘分に、睡眠をとることが必要だとせられてゐる。併し勿論、凡ゆる人々に共通な規則は定め得られぬものであるから、規則正しい救靈者は、自分自身でその必要と認むる程度を知り、それを己が規則として主に對する如く、宗教的良心を以てそれを實行し、守りつゞけることが必要だと思はれる。

ベッドに横つてゐる時が、餘り短かすぎると云ふ危険があると同時に、餘り永過ぎると云ふ危険も亦あり得る。ウエリントン侯は曾て云つた。「寢返りをしたいなあと思ふ頃は、もう寢床から出る時である」と。ベッドに横はつてゐると體の組織が緩む。そしてそれがあまり永きに過

ぎると、體全體の組織を弱むるに到る。

睡眠は夏は勿論、冬に於ても換氣のよい部屋で攝るべきである。此のことは凡ての醫者も、衛生方面の學者も、一様に主張してゐる處である。更に又睡眠には、日中に着用した衣服を用ひないことも心得べきである。ベンチャミン・フランクリンは大發見をしたと云つた。彼は太陽は朝上つて來ることを知つた。そして世の人々が此の一事實を眞に認め、かの人工的な光によつて夜を晝に變へる代りに、夜は早く寢て朝は太陽と共に起き上るやうになつたら、驚くべき經濟的節約が全世界に齎らされるであらうと考へた。疑もなくそこには何億弗かの節約と、多量の精神力の節約が産み出されるに違ひない、併し私達は悪い星の下に生れた。そしてもう一度祖先達の習慣に歸つて、小鳥と一所に眠りに就くなどと云ふやうにはなりさうもない。

併し乍ら救靈者は、夜の集會後は心して、出來得る限り早く寢に就くべきである。いつまでも坐り込んで愚にもつかぬ雑談に耽つたり、又晩くなつて夜食をとる事などを差控へたなら、これは容易に實行出来ることである。若しさうでないとすれば、例へその健康は破壊をされないまでも、尙大いに傷められ、その力は歪められ、又救靈の能力をも滅殺されるに到るであらう。

運動も又健康の保持には極めて必要である。いつも一定の訪問に従事し、又「ときの聲」賣りに、或は野戰に従事してゐる救世軍士官は、それ文でも既に相當の歩行運動を取つてゐることになる。そして少し背を伸ばし、深呼吸でもすれば、最早それ以上特別の運動を取る必要は殆どない位である。が併し、人間の身體は丁度鎖のやうなもので、たつた一箇所でも微弱な點があると危険であるから、僅か乍ら、誰にも出來る秩序立つた運動をとることは、身體の全機關を健全に、又潑刺たる元氣に保つと云ふ點から見ても、甚だ有益なことである。

少しも寛がない人は、どれ程宗教的であつても、氣むづかしい、神經質な、いら／＼した人間になり、周囲の人々に心配と困惑とを與へることが多い。或は又憂鬱になり、意氣銷沈して、自分の使命を疑ふやうにさへなる。

此處に一つの傳説がある。それによると、かの使徒ヨハネが丁度百歳の頃、或日一人の男が主の愛弟子に一日御目にかゝり度いとて、彼を訪れた。その時その訪問者は、老使徒が子供達と一所にたわむれてゐるのを見出した。そこで彼は老使徒を詰つて云ふには、「よい御年をして、子供じみた遊戯をしてなさるなんて、キリスト様の御弟子に相應しくないではありませんか。」すると老

使徒は、「弓はその弦をちつともはづさすにおくと、力が弱くなるものだ、弦をはづしてごらん、さうすれば元の力を保つてゐます。それと同じで、わしは小供達の仲間入りをして、遊びながら靈の弓弦をゆるめて居るのですよ」と答へたさうである。

感情の興奮、同情、その他精神的な凡ての能力、及び身體の神經組織等は、殊に救靈の仕事に於て大きな負擔を負はされる。そして、この靈及び肉體が、その最高能率を發揮する時の大いなる緊張は、その能率を維持する爲に、屢々定期的に弛められる必要がある。言葉を換へて云へば、休息が必要なのである。

私は非常に疲れて、何もし度くないと思ふやうな時、何か爲さねばならぬやうな命令的な必要を感じる事がある。さうした時こそブレーキをかけ、意思の力によつて休息せねばならぬ時である。私の友人に非常に秀れた救靈者がある。彼の妻は又非常に惻愾な婦人で、夫が身も心も疲勞し切つてゐる時は、強ひて一日中彼を眠らせて置き、又菜食ばかり攝らせる。翌日になると彼の元氣は必ず恢復して、どんな激しい仕事にでも直ぐ取掛ることが出来るやうになる。

「汝等食ふにも飲むにも何事をなすにも、凡て神の榮光を顯はすやうにせよ」とパウロは訓へて

居る。單なる飲食は救靈の仕事とは何等の關係もないやうに見えるけれ共、實際に於ては、大いに關係があるのである。多くの人々がなやむ病氣の四分の三は、その源を尋ねると、みな不節制な飲食から來てゐるのである。砂糖菓子は、二つ三つがよいところ」と云ふ諺がある。

數年前私は一友人と「禁酒の父」と呼ばれるニール・ドウを訪れたことがある。その時彼はもう九十を越した老人であつたが、尙矍鑠たるものであつた。私の友は彼にその長壽と、すばらしい健康の秘訣を尋ねた。すると老人は答へて曰く「第一に、わしは若い頃、放蕩をやらなかつたこと、又煙草を飲まずウイスキー及びその他一切の興奮性の飲物を用ひなかつたこと。第二にいつも早く寝て熟睡し、朝は早く起きたこと。第三には社會公共の道徳に、又同胞の福祉の爲に積極的な興味を有つてゐたこと。そして第四には自分の過去の經驗によつて、自分に害があると思つたものは一切食べなかつたこと等です。一例を云へば、わしは元來、焙り豆が好物なだけれど、それは自分の身體に合はないことを知つてゐるので、食へぬことにしてゐる……」と。焙り豆は凡ての人に害があるとは云へないが、併し神の御榮と、他の人々の靈の利益とを自分の快樂以上に置いてゐる救靈者は、ニール・ドウの分別を有すべきである。そして例へどんな好物

でもそれが自分の健康に害ありと知つたものは取らぬことである。

私は、胃炎を病んでゐた一人の男を知つてゐる。彼は夕食に何か肉を食べ度いと思つた。折も折、テーブルの上に細切り肉が出てゐた。彼は彼の胃にはミンスパイが合はないと云ふことを、よく知つてゐた筈である。否、恐らく知つてゐたであらう。然し彼はそれが好物であつた。そして到頭食べてしまつた。處がその夜、彼は瀕死の苦悶をしたのであつた。豊かな脂肪の多い夕食は餘り攝らぬ方がよい。新しいパンよりは、前日焼いたパンの方が體にはよいと云はれてゐる。グラツドストーンは一つの規則を作つた。それは一口に、三十二度嚙むのなさうである。つまり全部の齒に味はせると云ふことである。

ダニエル・ウオルドは云つた。「私は今や老人になつた。齡は百に垂んとしてゐる。どうすれば長壽を享み、幸福に暮せるかと問ふ者がありとすれば、私は次のやうに御答しよう。いつもゆつくり食べて、よく咀嚼すること、笑顔で仕事に對し、何處に行つても愉快な氣分を保つて居ることが必要である」と。

ハナフォード博士は、咽喉加答兒を病んで苦んでゐる一人の聲樂家に宛て、次のやうに書い

て送つた。「御病氣の原因の一つは煉菓子を食へ過ぎなかつたことにあると存じます。それは屢々加答兒の著しい原因となるものです。貴婦は御菓子や鹽や香料及び砂糖等の使用が餘り自由過ぎたのではないでしようか、普通、咽喉、血膜、鼻加答兒、その他之に類似した病氣の大部分はその原因を風邪に歸せられて居りますけれど、私の確信する處では、それは日常食物の過多な攝取から、或は菓子とか脂肪、油、澱粉、麥粉等の刺戟物を亂用することから生ずる胃の攪亂に因くものだと思はれます……………云々」と。

此處に健康を望む人々に對して、二三の簡單なルールがある。即ち、

「決して心を煩はすな。」パウロの言葉に「汝等何事をも思ひ煩ふな、只事毎に祈をなし、願をなし、感謝して汝等の求を神に告げよ、さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝等の心と思とをキリスト・イエスによりて守らん」とある。

「決して失望するな。」絶望は致命的な病氣である。御靈の果の一つは希望である。

「人間らしく働け、然し死ぬ程働く必要はない。」

「夜も晝も新鮮な空氣を求めよ」

「食ひ過ぎるな。又餓ゑるな。」汝の節制を凡ての人に知らしめよ。

「清潔は敬虔に次ぐものであることを忘れるな」

而して最後に、例へ諸君が貧弱な健康の持主であり、又肉體が損はれてゐるとしても、失望は無用であることを云つて置き度い。曾て神に用ひられた最も力ある説教者の一人で、その當時の使徒パウロ、或はブース大將であつた彼のバックスターは、一生涯、病人であつた。そして殆ど堪へられぬやうな苦しみに遭つた。併し乍ら、彼はそのことに對して、神を讚美して居る。と云ふのは、そのことが彼を永遠のものに結びつけ、此の世より解き放ち、彼をして絶えず「死に瀕する人が死に頻する人々に向つて説教する如くに説教」することを得せしめたからである。

その聖い生涯と使徒的な活動と克己の積鬱たる香とが、殆ど二百年の永きに亘つて教會に滿ち、その意氣を鼓舞した處の、あのデヴド・ブレナードは、齡三十に到らずして肺患の爲に死んだ。併し健康と力とを誇つて居た者で、ブレナードがその病弱の中に神に用ひられた程に、神に用ひられたものは尠いのである。

私自身に就いて云へば、私も曾て健康を害し、神経は衰弱し、眠れぬ夜が幾日も續いて、最早

自分の仕事は済んでしまつたのではないかと思はれることが度々あつた。併し祈りと注意とによつて、その後大いに健康と力とを恢復し、一週間の中、六日間全力をつくして働き、而も小猫のやうに、ぐつすり眠れるし、又食物の消化も可也よく、心は主の歡喜に滿ち、飛雀のやうに幸福に、生きてゐることが、たまたまなくうれしく感ぜられるやうになつた。ハレルヤ。

お、我が心の裏に、たゞ汝が聖き愛のほか、

他の住居をな許し給ひそ、

お、汝が愛、わが凡ての、

喜、寶、冠を捉へ給へ、

異邦の思を我が心より遠く離れしめ、

日毎の行、言葉、思、只愛にてあらしめ給へ。

我、この愛を倦まず追ひ求め、

高き響をたゆたわず望まん、

時々我が心に、此の聖き炎、

御國の炎、新にし、

夜も晝も、心つくして、

聖き愛の寶を移らせ給へ。

艱難の日に、汝が愛は、我が平安なれ、

微弱き日に、汝が愛こそ我が能力なれ、

わがて世のあらし吹き止む時、

その大いなる時、わが爲に死にしイエスよ、

わが死ぬる日も、生くる日にありしこと、

導手となりて救はせ給へ。

第九章 能力の更新

神の御用に携はる者は、神よりの能力を持たねばならぬ。さればイエスは仰せ給うた、「汝等上より能力を著せらるゝまでは都に止れ」(ルカ傳二四・四九)と。又「聖靈汝等の上に臨む時、汝等能力を受けん」(使徒行傳一・八)と。

救霊者は全く潔められ、聖靈に満さるゝ時此の能力を身に著せられる。而してその後は、それを保ちつゞけることが必要である。聖靈は信する者と共に在し給ふ。併し乍ら又それと同時に、その能力は頻繁な更新を必要とするのである。

感謝すべき哉、神は此の要求を満さんとして充分の準備をなして給ふ。イザヤは云つた、「エホバを待望む者は新なる能力を受けん」と。又ダビデは「エホバを待望め、雄々しかれ、神汝の心を強くし給はん、我云ふ、汝エホバを待望め」と叫んでゐる。

數年前、アサ・マハン校長は、その舊友のことに就て次のやうに書いてゐる。

「フィニイ氏の若い頃の説教に満ちてゐた異常な能力は、彼が回心後間もなく受けた聖靈の特別

なバプテスマによるものである。彼が一度、世の罪惡を完膚なき迄に責め立てる時は、恰も「火の燃ゆる觸り得べき山、黒雲、黒闇、嵐、ラツバの音、言の聲」に近づくやうに感ぜられた。併し又、彼が主イエスのことを語り出づるや、彼の教は「雨の降るが如く、その言葉は露の置くが如く、小雨の若草の上にふるが如く、細雨の青草の上に下るが如く」であつた。彼が晩年に及びても尙驚くべき多くの果を收め得た理由は、彼の業が、著しき聖靈に導かれてゐたと同時に、又曾て受けたバプテスマが絶えず更新されて、その力を増し加へたからである云々。

一 斯くの如く屢々能力を更新せられ、又新しき油を注がれる必要は、必ずしも背教を恐れることから生れるものではないのである。大いなる反對、危険又は強大なる敵になやまされる時、靈はその能力を常に更新せられる必要がある。使徒達は聖靈に満されてゐた。そしてかのペンテコステの日の如き大勝を獲たのみならず、頑強なる障壁が突如として彼等の前に落ちかゝつた時も、彼等はその悉くを勝利を以て乗り越えることが出来た。

彼等は役人達に捕へられ、獄に投ぜられ、大祭司の前に引き行かれ、何の權威と名に依つて奇蹟を行ふかを鋭く糾された。そして何等處罰の理由が見出されない時は脅され、再びイエスの名

によつて説教することを禁ぜられた。彼等は鎖を釋かれ、友の處に行くや、起りし事の次第を彼等に告げ、幼兒の如くなつて、嵐を倦き起すやうな祈りの集りを開き、主イエスにその物語を告げ、主の御能力の顯はれんことを熱告した。かくて後に驚くべきことが起つた。ペンテコステが次に繰り返されて行つたのである。彼等の集り居る處の場所振ひ動き、人々聖靈にて満され、懼ることなく神の言葉を語り……斯くて使徒達は大いなる能力をもて、主イエスの復活の證をなし、みな大いなる恩恵を蒙りたりとある。彼等は主の御前に出でその能力を更新せられた。彼等の能力は天よりの援を與へられた。又彼等の過去の勝利は影をひそめて「今や祭司達の中にも信仰の道に従へる者が多く出たのであつた。

二 能力を更新する必要は又屢々大いなる勝利の直後に起るものである。大いなる勝利を得るには、大いなる靈的、精神的、そして又屢々肉體的活動を必要とするものであつて、従つてその反動が起るのは自然の勢である。振子は手を離すと、他の一端に向つて飛んで行く。大いなる緊張の反動として弛緩が伴つて来る。靈の緊張が弛み、喜びに燃えた感情が衰へて来る。すると經驗の浅い救靈者は、此時非常な困惑に陥り、激しい誘惑に襲はれ、そして今までの感情の力を

持ちつゞけやうとして、自らを引き締め、タビデの如く「我靈魂よ、汝何ぞうなだるゝや、何ぞわが裏に思ひ亂るゝや」「我身と我心とはおとろふ」と叫びつゝ、自分は今にでも背教するのではないかとさへ考へ出すのである。

斯る場合に必要な事は、いら立つて神と相撲取るよりは、むしろ新しい能力を得ん爲に、靜かに神を待望む態度である。己が靈に向つて、「なんぢ神を待ちのぞめ、われに聖顔のたすけありて、我なほ、わが神をほめたゝふべければなり」と叫び、また身も心も衰へた時に於ても「されど神はわが心の磐石、わがとこしえの嗣業なり」と、我と我身を勵ますことである。かゝる時には靈は、神御自身がその能力となり給ふべきを確信して、靜謐と確信の中に座して待望むべきである。

或る老傳道師が次のやうに話するの聞いたことがある。しばらくの休息後、家に止つてゐると、御靈はやがて彼に迫つて、彼を眞劍なる祈りと、人々の救の爲の靈の陣痛に導くのであつた。これが神が彼を、次の戦の勝利に備へ給ふ方法であつた。かくて彼は救霊の戦場に出かけ、勝利を得ざるはなかつた。然し又しばらくすると能力の減退を來す、その時は又再び休息の折を

見出して家に歸り、能力を更新せらるゝ爲に靜かに神に祈つた。斯の如くにして八十を越すまで戦つゞけ、晩年にも尙多くの果を結んだとのことである。

三 繰り返すやうであるが、肉體の弱きが爲に能力の更新を必要とすることが屢々ある。パウロは神が「その刺を取り去り給」はずして、「我恵汝に足れり、我が能力は弱きうちに全ふせらるればなり」と仰せ給うた時に、より大いなる能力を増し加へられたに違ない。かゝる時にこそパウロは「此の故に我はキリストの爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふことを喜ぶ」との靈的飛躍をなしたのであつた。即ちキリストの能力彼を敝ひ、彼はその微弱き時に強くせられたのであつた。

靈的能力は必ずしも肉體の能力に依存するものではない。されば如何程病苦になやまさるゝこととがあつても、慧き心と信仰とを以て、靜かに忍耐強く、上よりの能力を求むる時、救霊者には驚くべき能力が注がれるものである。

四 また或る時は、ゲツセマノの園に於ける主イエスの如くに、或は又、他の凡ての預言者が悉く殺され、己の外に神に對して眞實なる者は、イスラエルの中に一人だに無きことを感じた

時のエリヤの如く、孤獨と靈的苦悶のどん底に追ひやられることがある。或は又、何處を見ても荒廢に掩はれ、リバイバルの火は終息し、世俗的勢力は洪水の如く世を浸し、幻も見えず、神は只黙せるが如く、サタンのみ嘲笑と侮蔑をほしきにする時、その時こそ、救霊者は切に能力の更新を必要とするのである。又彼は、かゝる更新を充分期待することが出来る。御使達はみな彼の周圍を取り圍み、天は彼の上に蔽ひかゝり、又主はそのやさしき御守護と憐愍とを惜しみ給はない。

天使は來つて、苦悶せるイエスを力づけ給うた。又長いさびしい旅にエリヤを勵ました。又ダニエルに來つては、「愛せらるゝ人よ、懼るゝなかれ、安んぜよ、心強かれ、心強かれ」と慰めたのであつた。御使のみかは、主御自身も亦、信頼すべき己が、働人を強め給ふのである。千卒長の館にてパウロを勵まし、パトモスの淋しき島にて老ヨハネを慰めたのも、主御自身であつた。その如く今も尙、主は己が僕達及び戦人を勵まし、力づけ給ふ。聖名を讃めよ！

此等の能力の更新は、必ずしも特殊な性質のものとは限らない。時には何等目に見ゆる原因もなく、肉體の力が非常に増大することがある。併し乍ら普通、肉體の力の更新は、休憩と適當

な食物の攝取とによつてなされるのである。それと同じ時には救霊者の上に聖靈が注がれて、大いなる飛躍と、幻と、勇氣とが與へられることがある。併し普通は規則的な祈禱、忍耐深い、眞剣な聖言の研究、及び日々神の御聲に耳を傾ける等の簡單な方法によつて、能力は與へられるのである。それは火の如く新しくせられ、天より電光の落つが如くならずして、新しい燃料を増加へるが如くにして更新せられる。それは丁度肉體の能力が血液の皮下注射によらず、適當な食物の攝取によつて増加へられるに似てゐる。ダビデは己が衷なる靈をして、「口を嘉き物にて飽かしめ、かくて若やぎて鷲の如く」ならしめ給ふ神を讃美せしめた。

されば靈が強くせられるのは、適當な糧を攝ることによつてである。その糧の何たるかに就て、主は次の御言の中にそれを示し給うた。「人はパンのみにて生くる者に非ず、神の口より出づる凡ての言葉による。」そして之は又、外なる人は壞れるれども「衷なる人は日々に新なり」とのパウロの言葉及び「エホバ、シロに於て、エホバの言によりてサムエルにおのれをしめしたまへり」との一節と一致するものではないだらうか。我等の能力を新にし給ふ者は神である。而もそれは決して神祕的な方法によつてなされるのではなくて、我等が日々拜讀し、冥想し又それを信仰に

よつて適用する處の、聖言によつてなされるのである。我等は聖言を通してイエスを知り、神を知るに到るのである。

私自身の能力はいつも、新しい真理の開発によつて、或は又、神の御約束及び御言の一部を自分の靈に力強く適用することによつて更新せられる。それ等を私は密室の祈りに於て、明確な又大膽な信仰によつて、自分のものとする事が出来たのである。神の御下には漲り溢るゝやうな能力が貯藏されてゐる。彼には「なほ靈の餘り」があるのである。我等に與へ給うた能力と聖潔の御靈の資源は盡きない。私は屢々ヤコブの「神は更に大いなる恩恵を賜ふ」との言葉を思つて自らを慰め勵ますのである。されば憚らずして恵の御座に來り、そこにて「憐憫を受けん爲、また「機に合ふ助となる恵を得んが爲に」神との交りに入り度きものである。

一 主は僕の貌を取り、呪はしき世の罪を、

身に負ひ給へり。カルバリの丘に、

犠牲として主は立ちて、聖き血を注ぎ給へり、

罪に繋がれし者を、釋かんため。

二 御憐憫いと深きめぐみもて、

主は萬民を統へ給へり、智と義と愛の中に、

救主に走り行く者、そのあがなひを見、

主の大いなる御救を、身に受けん。

三 來り給へ救主——平和の王よ、汝が御國は、

いよゝひろがりて普く世界、汝が榮光を見ん、

汝が義はあまれく満ちて、廣く深き大海のごと、

聖潔もて、地を掩はん。

第十章 一心一念

此の無限なる救靈の仕事に於て、専一ならざる心もて成功せんと思ふ者は、その仕事に就て知るべき程のことをも、未だ知らぬ人である。ダビデは祈つた、「我が心を専らになし給へ」と。

人はその人間的な引力により、或は態度の優美さと、爽やかな演説の力により、或は又人々の感情や利己心に働きかけ、之を巧に利用する技術によつて、殆どリバイバルかと思はるゝ興奮を巻き起し、然も尙その心専一ならざる場合があり得ると思はれる。然し、彼が果して人々を完き罪の悔改と、それよりの離脱に導き、心より十字架を受入れしめ、又その弟子たるの印として、謙遜と柔和とやさしき愛とを懇求し給ふイエスを、己が救主、己が主として、それに心よりの服従をなさしめ得るか否かは猶疑問である。

瓜の蔓に茄子は生らぬ譬の如く、救靈者は己が影響を及ぼす人々の心に、自分自身の靈と聖めの印を刻みつけるのである。そして救靈者自身、主の御旨に適ふ事が不完全なる時は、靈を獲ることも亦不完全に終るであらう。救靈の仕事こそ、人々の就かしめらるゝ最も入いなる働きである。

自然科学者は死物を扱つて之を變化せしめる。新聞記者は、少時人々の心を喜ばせることを以て主なる目的とする。辯護士や政治家は、社會の輿論を變化し、醸成せんとする。然し乍ら救靈者は最も根本的な問題を取扱ふものである。彼の目的は、單に社會の輿論や行爲を變化させるのみでなく、人々の品性を造り變へる事である。人々の愛情に、嗜好に、意思に道德的革命を惹き起すことである。見ゆる世界から見えざる永遠の世界に、彼等の眼を轉せしめ、凡の悪行から凡の善に、自己中心から全き献身に轉せしめることである。而も絶えずつきまとふ利己心に打勝たしめ、又此の世と肉とサタンとの協同の敵に對して戦はしむることである。彼の目的は單に彼等を地獄から救ふのみならず、彼等を罪より救ひ、その愆と永遠の刑罪から救ひ、又罪の汚辱及びその能力から、又罪に對する愛著から彼等を救ひ出すことである。罪より救ひ出すのみならず——これはむしろ消極的な働である——更に彼等を導いて恰も葡萄の幹と枝に於けるが如く、イエスとの生ける永遠の結合によつて、凡ての善と愛と聖潔とに到達せしむることである。その結合は、めぐみと眞實とをもて靈を満し、それに生命と精力とを注ぎ、義と聖潔の豊かなる果を結ばし

むるのである。

此は決して小さな仕事ではない。そして心專ならざるものによつては、到底成遂げられるわざではないのである。それは恰もナイヤガラの瀑を源に逆流せしめんとするにも較ぶべき、或は又は太陽や月の運動をその軌道に於て静止せしめんとするにも似た困難極る仕事である。さればこは人力によらず只神の御能力によつてのみ成され得るものであり、そしてその能力はその心を神に向つて全うする者のみ與へられ、それ等の人々の裏に又それらの人々を通して働き給ふのである。されば救靈者は、この大なる仕事に於て成功せんとせば、先づ自身を主と其の御用とに全く捧げ、一度び手を鋤につけて後は斷じて後を振返らぬことである。斯くの如くしてその業を忠實に勵む時は、彼はやがて「死ぬれども勝者」となるであらう。

救靈者は主を愛し、又己が仕事を愛さねばならぬ。そして凡ゆる困難、困惑、失望の中にも、尙その仕事に堅く結びつき、徒に變化を求めてはならぬ。何となれば此の戦には免除がないからである。

多くの人々が失敗するのは此の點である。彼等は眼を一方に向けない。彼等は他方に退却の備をなして居る。彼等は二心である。私の知つてゐる或る士官は寫眞術に手を出し、到頭心が分れ、終に救靈の仕事に廢さねばならなくなつた。又或る牧師は、一方に法律を勉強しつゝ、人々には他人の説教を讀み聞かせ、自分は他に地位が見付り次第、教職を退いて法律を以て進むのだと云つてゐた。彼は「兵卒を務むる者は、生活の爲に纏はるゝことなし。これ募れる者を喜ばせんとすればなり」とのテモチに送つたパウロの言葉を全く忘れてしまつたのである。

斯る人々はやがて、彼の言葉に従へば——優遇されなかつたからとの理由で、神が爲すべく召し給うた使命から離れ去つて行くのである。併し事實は彼等自身の心が分れ、與へられた仕事をよく處理せず、それに身を打込まざるが爲に、人々はやがて、彼等が最早その仕事に、興味と能力とを失つてゐることを感じ初めるのである。飢ゑたる靈はパンを求めて石を與へられ、地獄への道を辿る者、否已に破滅の淵に臨んでゐる哀れな罪人は、冷やかな心の籠らぬ説教によつては、覺醒もされず、又救はれもせずして出で去つてしまふのである。かくて彼等は先づ神の御手より離れ、次に人々の支持を失ふに到る。彼等の先輩達は彼等を如何に處理し、如何なる地位に置かんと迷ひ、非難的となる。併し他人を非難し乍ら、その非難は實は彼等自身の上に存する

のである。

如何なる大事業と雖も、それに全心を打込まずして成遂けられたものはない。ミケランヂエロは、仕事は己が妻、塑像はわが子供であると云つた。エチソンは全く仕事に没入し、その驚くべき發明の追求は、他の一切のことを忘れて省なさせかつた。凡の時代を通じてとは云はずとも、尠くとも古代雄辯家中の尤なる者とせられた、かのヂモステネスは、初めて演壇に起つた時、罵聲を浴せられて降壇せねばならなかつた。彼の様子は貧弱で、その聲は弱くかすれてゐた。併し彼は是が非でも聞いてもらはねばならぬと決心した。それから後の彼は雄辯の研究に没頭し、頭を半分剃髮して人中に出掛けられぬやうにし、晝も夜も己が演説を切磋琢磨した。發音を完成する爲めに、口の半分に礫を滿し、丘に上つて練習した。又アテネ群衆の怒號に抗せんが爲に、海岸に行つては、岸邊に打寄する怒濤に向つて聲を鍛鍊したのである。

ビーコンスフィールド卿は四度議員選舉に起つた。そして終に議席を贏ち得た。彼が初めて演説をなした時、議員席から盛な嘲笑を浴びせられた。併し彼は坐り乍ら叫んだ。併し乍ら、諸君がやがて耳を傾ける時が来るであらう」と。その時は來た。彼が英國の宰相として、歐洲の運命

を裁定し、ヴィクトリヤ女皇に印度皇帝の冠を捧げた時、議員等は彼に傾聴したのである。あの演説の準備に、どの位かゝりましたか」と、或る大演説家から問はれた時、彼は答へて云つた。「全體から云へば一生涯、特別には十五分かゝりました」と。

ベンヂヤミン・フランクリンが一介の少年であつた頃、或町で印刷屋を開いた。するとある有力な競争者が現れ、その町から彼を追ひ出してやらうと云つた。フランクリンは友に向つて、一片の黒パンと一桶の水を示しつゝ、一體このやうな賄で生活し、一日に十六時間働く人間が町から追出されると思ふかと尋ねた。その競争者の何人なるかを今、誰が知つて居よう、併し乍ら又、誰かフランクリンの名を聞かぬものがあらうか。

若しもかくの如く、此の世的事業に従事する人々がその仕事に没頭し、その目的に熱中し得るとすれば、況や義と聖潔のため、神の御國の擴張の爲、將又人々の靈魂を罪の力から又永遠の滅亡の火から救ひ出さんとする救靈の事業に携はる者に於てをやと云はねばならぬ。

神が貴君を救靈の御用に召し給ひしとすれば、兄弟よ、肉の欲を遂げんとて、備をなすを止めよ。背後の凡ての橋を燒き捨てよ。テモテに與へたパウロの言葉を思ひ出されよ。汝心を傾けて

此等のことを専ら務めよ、汝の進歩の明かならん爲なり」と。貴君の眼を一つにせよ。退却の計畫を樹てるな。否かゝる思念を斷じて許すな。「我聖言を述べ傳へずば禍なる哉」とのパウロの言葉を思へ。主イエスに倣うて、貴君の顔を己がエルサレム、己が十字架に向けて搖ぐな。何となれば、それこそ誠に貴君の冠、王國、榮光への途であり、やがて多くの人々を義に引返らしめ、貴君はあの天の星の如く永遠までも輝きわたるからである。

諸君の或者は無學で目に一丁字もないかも知れぬ。諸君の才能は僅少にして口は吃り、又何等の教養を持たぬかも知れぬ。然し乍ら尙諸君は、神と神が召し給ひし處の仕事とに對して專一なる心を持つことが出来る。而してこの心こそは、凡ゆる教養、教育及び凡ゆる肉體又は頭腦につける賜物、恩恵に遙に優つて貴いものである。若しも諸君が神より、之等の賜物の中の或るものを與へられてゐるとすれば、その賜物の神によつて潔められんことを祈り、又諸君の信賴が決してそれらのものに存せざるやう心せねばならぬ。然し乍ら又、神が此等のものを與へずして、而も御獨子との交際に、又その貴い御用に召し給ひしなれば、兄弟よ、決して心を騒がす勿れ、神の祝福し給ふものは、完全な頭腦にあらずして完全きハートなることを覚えよ。主は「エホバは全

世界を普く見そなはし、己れに向ひて心を全うする者のために、能力を顯はし給ふ」と仰せられたではないか。

此の點に於ては何人も失敗せずすむ筈である。而も尙或者は失敗し、主の御名によつて預言し、御名によつて悪鬼を追出し、御名によつて不思議を行ひながら、「我あへて汝を知らず、不法をなすものよ、我を離れ去れ」と宣ふ主の御聲を聞く者あらんとは、何と云ふ恐るべきことであらうか。

何ものも我が心をなだたしめよ、

我主と共に十字架につき、

主にありて、神の爲に生くれば、

われ世と世のものに死に、

空しき誇と、はかなき快樂をすつ、

イエス君こそ、わが榮なれ。

第十一章 經濟

救靈者は經濟に就て餘り心をわづらはしてはならぬ。否却つてサタンを嘲り、自己の恐怖を笑ひ、神の眞實を信じ、神は必要なるものを凡て満足給ふと確信すべきである。マタイ傳第六章の第十九節以下を繰返し拜讀せよ。凡ての必要が備へられるとの主の御保證程、積極的にして誤りなき確證が、又何處にあり得よう。

私は小供の頃、穿いてゐる靴が壞れたらどうしやうかとか、明日の朝飯はどこから來るのか等云ふことを、心にも頭にも考へたことがなかつた。父が亡くなつた後は、母が一切の心配を下さつたので自分は只遊んでゐた。母をすつかり信頼して、只愉快に吞氣に日々を送り迎へた。イエスは教へ給うた。「汝等何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思い煩ひ、何を着んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧に勝り、體は衣に勝るならすや」と。神が諸君に生命を與へ給うたと思はば、いかでその生命を保つべき糧をも與へ給はぬ筈があらうか。又諸君がその肉體にありて生くる事を許し給ふとすれば、又神はこれに添へて肉體を守るべき衣を與へ給はぬ筈があらうか。

「空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝等の天の父は、之を養ひ給ふ。汝等はこれよりも遙に勝るゝものならすや。……さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな、……汝等の天の父は、凡てこれらのものゝ汝等に必要なるを知り給ふ」

イエスは、私が私の母を信頼したやうに、父なる神を信頼する事を望み給ふ。感謝なる哉、私は再び子供に歸れるのである。そして私のなすべきことは只祈り、主に従ひ、主を信頼し、その御前に楽しく日々を過すこと丈である。彼は我が一切の必要を満足し、又彼が私に授け給ふた幼児達の必要をも、みな満足給ふのである。然りそれが主の御旨なのである。何となれば主は「先づ神の國とその義とを求めよ、さらば此等のものは凡て汝等に加へらるべし」と仰せられたからである。衣食の思ひ煩からの解放は——只自分一個の口を糊するパンさへ得れば足る氣樂な働人から、養育すべき大きな家族を持つ者、或は又古へのモーセや、我等の大將の如く、普通の人の何千倍かの經濟的負擔を負はされてゐる者に到るまで——凡ての救靈者の特權であり又義務である。

信仰——單純な信仰、神の御約束をそのまゝ信する純な信仰と、思ひ煩ひとは、丁度水と火、

或は光と暗黒が互に連添ひ得ないと同様、一つ心の中に住居を共にすることが出来ない。一方が他を消し去つて了ふのである。聖靈により生み出された、明な、過たざる神の御約束を確信することは、人を主イエスに堅く結び、その交友に連らしむるが故に「山の上の千々の牲畜、銀も金も皆主のものなり」との如く、重荷と心勞とは凡て主のものとなるのである。

斯くして主はその子に己れを信ぜしめ、己れと共に波の上を歩ましめ、夢疑はず、主によりて勝利を叫び、主にありて凡ての恐怖に、凡ての敵の力に打ち勝たしめんとする給ふのである。

私は敢て云ふ。聖言に従ふは、救靈者に對する神の御旨であり、此の秘訣は凡ての救靈者がよく知り、否知らねばならぬ處のものである。ハレルヤ。

神は救靈者が己れの費用もて戦ふべく、戦場に遣はし給はない。徒徒パウロによれば、神は「己れの富に隨ひ、キリスト・イエスによりて、汝らの凡ての窮乏を榮光の中に補ひ給ふ」御方である。

神の「兵站部」には糧食が溢るゝばかりに満ちてゐる。そしてに時を定めて與へてゐる。悲み惑ふ不信仰なる者は、その定まれる時に先じて、神が働き給ふことを願ふ。否、否！ 神は

人々の信仰を驗し又強めんが爲に、第一の着物が全く役に立たなくなるまで、第二の着物を與へ給はぬかも知れぬ。又或る時は、夕食後明日の朝飯が何處から來る當もなく、諸君を就床せしめるかも知れぬ。併し朝飯の時になればそれは來るのである。

「神は、之等のものゝ汝等に必要なるを知り給ふ。」されば神を信頼せよ。小雀はその可愛い頭を羽の中にくるんで、あすの朝飯が、何處にあるのかも知らずに眠つてしまふ。そして夜が明けると、樂しさうに讚美の歌を歌ひ出す。すると神は大きな御手を開いて彼等を養ひ給ふ。よろづのものゝ目は汝を待ち、汝は時にしたがひて、彼等に糧を與へ給ふ。汝御手をひらきて、もろくの生くるものゝ願望をあかしめ給ふ」と、詩篇の記者は歌うて居る。また主は仰せられた。擱るゝ勿れ、汝等は之等の雀よりも遙に勝るゝものならずや」と。

おゝ思ひなやむ兄弟達よ。神を信頼なされ。彼は貴方達を失望させ給はない。他の凡てに於けると同様、此のことに關しても主の御保證には間違ないのである。即ち「汝等が遭ひし試煉は人の常ならぬはなし、神は眞實なれば、汝等を耐へ忍ぶこと能はぬ程の試煉に遣はせ給はず、汝等が試煉を耐へ忍ぶことを得ん爲に、之と共に通るべき道を備へ給はん」と。私は私の過去に

於て幾度か之を體驗した。又再びそれを體驗せねばならぬかも知れぬ。併し「神は眞實にて在し給ふ。」讀むべき哉、而して惡魔は、虚吐者であり、常にさうである。フィニーの着物は縫ひてほろ／＼になつてしまつた。然し彼は靈魂の救済に熱中して、誰かがやつて来て、彼の爲に新しい着物の尺を取つて呉れる迄、それを全く氣付なかつた。自分もそれと同じやうな經驗をしたことがある。神様は古い衣服が新しいのと取りかへらるべき時を知つて給うて、丁度よい時にそれを遣り給うのである。

己れの貪慾や經濟上の心勞が一杯になつて、自分の心から幼兒のやうな、素直な信仰が外に押し出されてしまふ爲に、靈魂に對する愛も又それを救ふ能力も失つてしまふ人々が多くある。

「汝等が、わが壇の上に徒らに火を炊くことなからん爲に、汝等の中一人扉を閉づるものあらまほし……」とエホバは、古への背教せる貪慾なる預言者達に向つて叫び給うたのである。彼等は充分の報酬を受くることを知るまでは、何事をも爲さうとしないのである。彼等が働くのは靈魂を獲んが爲ではなくて、金錢を獲んが爲である。此をかのパウロの無私な、利欲を超越した獻身と對照して見られよ。彼は云ふ、「我は人の金銀、衣服を貪りしことなし。此の手はわが必要に備

へ、また我と憐なる者に供へしことを汝ら自ら知る。我凡てのことに於て例を示せり。即ち汝等も斯く働きて弱き者を助け、また主イエスの自ら言ひ給ひし、與ふるは受くるよりも幸福なりとの御言を記憶すべきなり」と。更に又「我は汝等の所有を求めず、たゞ汝等を求む」と。人々が何か持ち來つて彼に贈つた時、彼は次の如くさへ云つたのである。「贈物を求むるに非ず、唯汝等の益となる實の繁からんことを求むるなり」と。彼の心を喜ばしめたものは、彼が人から受くることによつて得る利益ではなくて、人々が自ら與へることによつて得る利益だつたのである。彼に贈物を送つたビリビ人への彼の書簡の中に、彼の內的經驗の一端を我等に示してゐる。「汝等が我を思ふ心の今また萌したるを、われ主にありて甚く喜ぶ。汝等は固より我を思ひいたるなれど機を得ざりしなり。われ窮乏によりて之を云ふにあらず、我は如何なる狀に居るとも足ること學びたればなり。我は卑賤に居る道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも飢うることにも富むことにも乏しきことにも一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者によりて凡てのことを爲し得るなり」と。また彼のテモチへの書には「それ監督は……金を貪らず」とあり、ペテロも又「汝らの中にある群羊を牧へ、利を貪る爲になさず悦びてなし……云々」などと云つてゐる。

斯く云へばとて、私は救霊者が、その生命を投げ出さうとして居る相手の人々によつて充分支へられ、その経済的負擔や心勞から救はれる事を神が望み給はぬなどと云はうとするのではない。神は仰せられた。「働人のその價を得るは相應しきなり」と。又「穀物を碾す牛には、口籠を繋ぐべからず」と御命令になつた。又凡てのクリスチャンが準據すべき十分の一獻金制度によつて、

凡てのユダヤ人は聖職にある者を扶助することになつてゐた。
併し乍ら、私の云はんと欲する處は、自己のパンの問題に思ひ煩うてはならぬこと、貪欲を警戒すべきこと、靈魂を求むべきこと、そして若し己が望む如く人々が自分を扶けぬことがあらうとも尙、極まで彼等を愛し、その靈の救を求め、又自らは晴やかに勝利に満ちて、その古、エリヤを養ひ、四十年の間荒野にマナを降らせ、何百萬のイスラエル人を養ひ給ひし神が、又自分をも養ふ途を開き給ふと信頼申上ぐべしといふのである。私は凡ての惡魔と凡ゆる不信仰に對して主張する。神は彼を失望させ給はぬ。否、神はいと嘉き麥をもて彼を飽かしめ、髓と脂とにて饗す如く、飽かしめ給ふ」と。

凡ての侯は汝が御前にかしこみ、

金と香料とを捧げん。

凡ての國はこぞりて汝が聖名をあがめ、

その民は讚歌唄ひまつらん。

祈りはたきものゝ如く御前にあがり、

誓は日々にその御下にのぼらん。

御國はいよゝ擴まりて、

盡くる處を知らず。

凡ての敵を打ち伏せて、

君は御位に安けく坐さん。

世々ふりて御榮はいやまし、

めぐみに溢れ、祝福に富む。

時の潮流も

その御誓をかへず。

君が聖名は永遠に起ち、

愛の御名のみ、とわに變らず。

第十二章 救霊の眞理

凡ての眞理は貴い。併し乍ら凡ての眞理、必ずしも卽座の回心と全き聖潔とを得しむるに適するとは限らない。それは恰も凡ての薬が心臟病や癩麻質斯に適するとは限らぬと一般である。或る眞理は、聖靈の能力もてそれを語るときに、恰も食物が飢を満し、火が氷を溶す如くに、忽ち靈魂の回心と、聖別とを與へるものであるが、同時に又同じ聖書の眞理であつても、恰も九々法の眞理が、兒を喪つて慥くあはれな母親の心を慰め得ぬと同様に、或は又、天文学の眞理が罪の深い眠りからめ醒た、もがける良心を静めることが出来ぬやうに、回心と聖潔を與へることの出来ぬものがある。

或時私は次のやうな驚くべき又恐れ入るべき記事を讀んだのである。アメリカの或る有力なる二宗派内に於ては、昨年中に信仰の告白によつて新に加へられた會員を、一人も報じなかつた教會が三千以上もあつた。云々と。著者は、それに次の如く書き添へても不當ではないかと思ふ。その二宗派に屬する、教育と教養に於ては世に秀でたる三千人以上の牧師達は、一年間説教

し副牧師、日曜學校教師、長老、教會員、或は祈禱會、日曜學校、共勵會等、無數の援助と援助者に助けられつゝ、而も尙、たつた一人の回心者をも得なかつたのである！」と。

何の故にかゝる愚にもつかぬ失敗を演じたのであらうか。眞理の御言か、講壇で、日曜學校で、又祈禱會で語られなかつた筈はない。彼等牧師、教師、長老達は皆、所謂「正統派」に屬するもの、教養あり、又聖書の教訓に熟達してゐる人々である。疑もなく彼等は眞理を一年の端から他の端まで説教し、訓へて居つたのである。併し乍らそれは眞理ではなかつた。眞理——即ち靈を救ふ眞理、先づ初に良心を鞭打ち、心の秘密を暴露し、墮眠をむさほる靈を呼び起し、その眠れる感覺を呼びさまし、終に自らその罪を自覺し、道にて遇ふ程の人は皆、自分の罪を察知してゐるかの如く感じ、吹く風も、行く人の足音も、みな自分を責むる聲の如く響き、如何なる掩ひも、神の見透すやうな御目から、己が罪をかくし得ぬことを感ずるに到らしめ、而してその自覺が目的を達し、悔心が全く成つた時、之に向つて救しと平安とを告げ、神の羔羊の血による、全き自由なる恩恵と救ひとを與へると云ふ——眞理ではなかつたのである。

若しもかゝる眞理が忠實に、絶えず之等の教會及び講壇に於て説かれ、而も小兒が投げる小彈のやうに、びく／＼した力弱きものではなくて、大砲の口から飛び出す砲彈の如き力と權威とをもて語られたとしたら、全國民をリバイバルの焔に燃やすでは置かなかつたであらう。實際は各々異つた階級の人々に對して、各種類の又各程度の眞理がある。それは恰も、各々異つた病に對して夫々の藥劑があり、又年齢にかなひ、體格に適應した各種の食物があると同様である。

イエスは此の點に關し次の如く宣言なし給うた。「われ尙汝等に告ぐべきことあまたあれど、今汝等得耐へず」(ヨハネ一六・一二)。救霊者は此の事實を認めて「眞理の言を正しく教へ」(テモテ後二・一五)ねばならぬ。信者に對しては未信者或は信仰から墮落した人に對すると自ら異つた眞理の適用を必要とする。聖潔められた人は、神の聖言の堅き糧を受けることが出来るが、他方、信仰の赤坊はミルクに依つて之を育てなければならぬ。

未信者に對しては専らその良心と意思とに向つて、攻撃の鋒先を向けねばならぬ。彼は道德家であるかも知れない。又その家庭に於ても社會生活に於ても氣受けがよく、そしてその事業

係に於ては各望があるかも知れない。然りと雖も尙、此等凡ての下に秘密の利己心と、心の罪の存することは確である。彼は身勝手であり、光に對して不従順であり、イエスが死を以て示せし愛を省みず、又例へ表明せずとも、事實に於ては神に敵對して居るものである。されば彼をして、此等の事實を認識せしめ、若しも彼が悔改めぬならば、やがて全き亡びに到るであらう事を誠實と、愛を以て、而も確信もて警告しなければならぬ。罪の告白に導く、深い徹底的な、心よりの悔改め、及び凡ゆる罪よりの全き、永遠の離脱、生活の完全なる改善、過去の一切の過に對する能ふ限りの矯正等は、「狭き門」に於てなされねばならぬ。

我等は神の與へ給ふ凡ての光に對して、即座の而も無條件の降服を彼に迫り、而してそれに服従を示した時は、キリスト・イエスを通して恵とやさしき愛とを彼の上に供へねばならぬ。

悔改めに導く動機は永遠から引き出される。其處にそれを以つて、罪人を砲撃し、之を陥落せしむべき眞理の完全な武器がある。例へば、己が蒔きしものはやがて必ず自ら刈り取らねばならぬこと及び自らの罪の爲に終には亡びねばならぬこと、死が思はぬ時その身に及ぶこと、そして若し主の恩恵を拒け、神の寛容に付込みて、自己中心と罪の中に歩みつゞけるならば、地獄こそ

彼の永遠の運命なること、之に反し彼が服従する時は、平安と喜悅の滿ち溢るゝ、有益なる生涯を送り、幸なる死の床、永遠の榮光等がその代償として彼に與へられること等がそれである。

信仰から墮落したものに對しては、前と同様な眞理の適用が必要である。只その範圍を變更しさへすればよい。若しも彼が頑固であるなら、彼が白旗を掲げて、憐憫を乞ふまで、彼に向つて律法の砲撃をあげせかけよ。若しも彼が信仰の墮落を自ら悲しみ、而も再び信仰を志すも徒勞なりと考ふる者ならば、凡ゆる方法をつくして、彼が再び神を仰ぎて信頼するやう勵まし、又イエスに顯現し給うた神の無限の御愛と、御憐憫と御能力とを懇々切々と語り、終に彼が身を投げ出して神の恩恵を求むるやう促さねばならぬ。

若しも之等の神に對する悔心の基礎的眞理と、われらの主イエス・キリストに對する信仰とを、誠實と愛情を込めて、而も祈り深き心もて彼等に示し、彼等罪人或は墮落者が、それを掴み、それに服従した時、彼は回心せしめられ、主に受入れられ、神の家族に加へられるのである。而してそれから後の彼は、前とは別の眞理によつて、養はれなければならぬ。若しも彼がやさしい心の持主であるなら、彼に向つて、徒らに厳しい律法を提出すことは愚なやり方である。勿論彼と

雖も、律法の靈的意味に就て、又律法は神がそれによつて彼が己の行爲を整へるやう望み給ふ處の規則なること、更に又此の律法の故にその溢る御恩寵が彼の上に與へられるものなることを教へられねばならぬ。

又、彼に向つては最早服従を求むべきではない。彼は救はれた時已に服従を誓つたのである。併し、彼に期待さるべき獻身の性質及び範圍等に就ては、充分深く之を教へ込まねばならぬ。即ち「その身を生ける犠牲として神に捧げ、死より生に還りたる者の如く、己が身を神にゆだねまつる」やう之を促し、賢明に又やさしく勵まされなければならぬ。

彼はやがて、自己の衷に見出す生來の罪の事實に就て、又心の衷の敵を追ひ出してもらふべき必要とその可能性に就て、充分教へられねばならぬ。又彼の前に聖別が示されねばならぬ。聖い神の嚴かな命令としてではなく、むしろ天父の子としての榮ある特權として。彼は又、それは實に「全き愛は恐怖を除く」處の一經驗なること、及び人間の骨や髓が外から見えぬやうに肉によつて包まれてゐるやうに、尙拘束を残してゐる義務の事實が愛によつて、衣を着せられ、掩ひ隠される處の靈の安息なることを教へられねばならぬ。

されば一方に於て、聖別の必要を提示し、やさしく而も絶えずその意に迫ると共に他方には主として力を智慧の教訓に用ひ、無知なる恐怖を取除き、かくてその心より確信と愛情とな惹き出し、やがてその靈が回心の當時、征服者としてのイエスの足下にひれ伏したる如く、今や智慧と歡喜に満ちて、天の花婿たるイエスの御前に身を委せ、心に注ぎ込まれる聖靈によつて、絶え入るばかりに主を戀ひ慕ひ、ダビデの如く「主よ汝の御旨を行ふは、わが喜悅なり」と叫び、又主の如く「我を遣はし給ひし者の御旨を行ふはこれわが糧なり」と叫び出さしむべきである。

若しも救靈者が、自身明確な暖くやさしい全き救の經驗を有せずとすれば、彼は人々を「全き愛」の經驗に導き入れずして、かの律法的經驗に追ひやる危険がある。律法的經驗とは、人が自己を義務の遂行に堅く括りつけることである。何となれば律法はそれを要求するからである。彼は律法の脅威によつて、無理矢理に義務に逐いやられるものにして、愛の樂しき呼應によつて、義務に導かれるものではないのである。

聖別會に於て、未信者や信仰より墮落せる人々が出席してゐる場合、ともすればそれらの人々に向つて話しかけやうとする誘惑を感じるであらう。而して若しもかくする時は、彼等が要する

眞理は、信者の要求するそれと異つた種類のものである爲に、そこに混亂を生じ易く、又神を愛する人々の心に、一種の不安な經驗が醸される。

斯る集會に於ては、未信者や墮落信者達はこれを別に措いて、直に信者を目ざして進み、その聖別を促すことが、最も賢明な策であることを見出すであらう。主は私に斯く戦ふことによつて喜びと勝利を與へ給うた。のみならずいつも聖別會を通して、數名の回心者をすら與へ給ふのである。

イエスは、クリスチャンを羊に譬へ給うた。されば聖別會に於ける我等の務は、律法を以て彼を鞭つのではないで、福音を以て彼を養ふことである。而して彼が善き羊飼の聲をよく聞きわけ又喜びて主に従ひ行き得るやうに、凡ての恐怖を取除いてやるのでなくてはならぬ。聖徒達の主なる食物は、健全な味を與ふる律法によつて味つけられた御約束でなければならぬ。

主の御約束は、我等を狭き道を通して進み行かしめ、又律法は途に迷はぬやう、われらを圍み守つて呉れるのである。主の御約束及び福音とイエスの中にある完き賜とは、人々の靈魂が主を激しく追ひ求めてやまぬに到るやう、彼等に提出され、又示されねばならぬ。かくすれば随つ

て彼等が籬を破つて、惡魔の領土に入り込まぬやう、絶えず見廻る必要がなくなるに到るであらう。

救はんとする靈魂に必要な眞理を明かに見分け、そしてそれを巧に適用せんが爲には、天來の智慧を要する。さればパウロがテモテに次の如く奨めたのは宜なる哉である。汝眞理の言を正しく教へ、恥づる處なき働人となりて、神の前に鍊達せる者とならんことを勵め」と。併し乍らわれらの勵みも、若しもわれらが「謙遜」りて主の膝下に伏し、神よりの智慧を求め、喜悅と祈深き信仰とをもてわれらを導き、凡ての眞理を悟らしめ給ふ「眞理の御靈」に、われら自身を委するにあらざれば、悉く空に歸するであらう。

靈魂の救に必要な神よりの眞理を含む聖書も、此の世の智慧に傲慢になり切つた人々には、全くの謎であり神祕である。が併し、古の聖徒を動かして書かしめ給うた聖書を、神の御靈に満されて讀む謙遜れる者には、その寶庫は開かれて明にせられるのである。

おゝ主よ、永久に汝が民の上に、此の御靈に満され、此の智慧を豊に備へられたる、よき指導者と教師とを與へ給はんことを！

第十三章 牧會

救霊者は回心者を養ひ、強める爲に多くの時と思慮と祈りと努力とを拂はねばならぬ。パウロと共に「汝等堅く信仰に起たば、われらは生く」と叫び、又「夜晝祈りて汝等の信仰の足らぬ所を補ふことを切に願ふ」ものでなくてはならぬ。パウロの望は単に人々を回心せしめて、或る小隊又は教會に屬せしむるのみではなくて、「凡ての人をして、キリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん」ことであつた。

兎もすれば、人々を恵の座に導くことには、多大の努力と注意を拂ひつゝも、その後には於ける彼等の養ひには、一向力をつくさないといふ危険がある。赤兒が生れた後、賢く又絶えずこれを世話しなければならぬ。さもなければ死んでしまふであらう。救霊者は靈界の産婆ではなくて、靈魂を救ふのみならず、その救はれたる靈魂を育んで行く測り知れない大きな責任を有する父であり母である。

大將が或る時、數人のものをつれて旅行してゐた時、私達に向つて云はれた、「諸君の中にある

火を消さぬやう氣をつけ給へ。火は消え易いものだから」と。

然し乍らその火も、若しも屢々これをかき立て、新しい燃料を加へるならば容易に消えぬものである。我等は回心者の心の中に燃ゆる火の火花をよく見つけ、靜かに、然し力強くこれを扇ぎ煽とならしめ、又彼等自身、己が火の消えゆかぬやう注意し得るやうに助けてやらねばならぬ。

此の救霊の大いなる仕事に於ける最も悲惨なことは、靈魂の火が消えて光がその輝きを失ひ、鹽がその味を失ひ、「貴き血汐」によりて贖はれ、洗はれ、「聖靈にあづかるもの」とせられ、「神のよき言葉と、來世の能力とを味はひ」たる靈が躓いて、恰も「己が吐きたるものに歸り來る狗の如く、或は又「身を洗ひて、また泥の中に轉ぶ豚」の如く、己が舊の罪に再び歸り行く例が幾多あると云ふ事實である。ユダは主御自身の御前からすら墮落した。又他の場合に於ては、主の嚴かな御説教の後に「この時より、弟子達の中、多くの者がへり去りて、復イエスと共に歩まざりき」と記せるを見るのである。

パウロは「此の世を愛した」デマスの背教を悲しまねばならなかつた。彼はエベッ小隊の或る下士官達が、やがて墮落する事を豫知し、それを預言した。彼はエベッに於て、その隣邦の諸國

を振り動かす程の大きい勝利を得たる後に、悲しみに満ちてテモテに書き送らねばならなかつた。「アジャに居る者皆我を棄てしは、汝の知る處なり」と。「蹟きは來らざるを得ず」である。而して墮落はそれに伴つて來る。然し乍ら救靈者はこれに對して激しく戦はねばならぬ。そして終にパウロの如く、「われ今日汝等に證す。われは凡ての人の血につきて潔し。我は憚らずして、神の御旨をことごとく汝等に告げしなり」と、人々に向つて叫び得るものでなくてはならぬ。救靈者は常に罪人を救ふのみならず、己が回心者を養はねばならぬ。

第一、彼等を訪れること。しばらく前、私はキヤリフォルニアの一小隊を訪れた。一人の少校が私を車中に迎へ、小隊への途中、次の如く話して居られた。「私達は昨夜、町の極悪の酔漢を救に導かせていたゞきました。で今朝二回程、訪ねて見て参りましたのですが順調に行つて居ります」と。かゝる程の愛と注意とを以てすれば彼が順調に行くのは勿論のことであらう！
回心者を直に訪問することが出来ないなら、一寸とした普信を與へ、又その中に適當なトラクトを挿入してやつたらいと思ふ。或る時、私の集會で五十歳前後の或る實業家が、その妻共々

救を受けた。處が或る夜、彼が集會に見えなかつたので、早速彼に、彼の爲に祈つてゐる旨を書いて普信をした。するとその翌晩、彼は集會に見えて、彼が強い誘惑を受けつゝあつたこと、そしてあの一片の普信が如何に彼をめぐみ、助けて勝利に導いて呉れたかを物語られたのであつた、その後彼は善き兵士となつた。わづか五分間で書いた、費用と云へばほんの一ペニーもかからぬあの小さな、然し時を得た普信が、彼をしてその救を保ちつゞけしめたのだと云つても間違ないであらう。

第二、次に彼等が他の善良な書物と共に、日々聖書を読むやう勵まされねばならぬ。レツド・ホット叢書等は、若い回心者達には殊に適したものであらう。私が曾てボストンに大尉として在任してゐた頃、聖書會社に行つて、小さな二本スの聖書を四十部程買つて來た。そして、それを助けになると思はるゝ句に印をつけ、表紙裏に、回心者の名前を書き添へて、一人々々に與へて居つた。數年経つて、私が或る小隊を訪れた時、一人の若者が出て來て、「先生、私を御存じでせう」と問はれた。私は彼を記憶してゐなかつた。すると、彼は小さなすり切れた聖書を懐から取り出して、自分の名前の場所を指し、その筆蹟を御存じないかと、私に問ふのであつた。それ

ならば私は知つてゐた。彼は云うた。先生がボストンで小隊長をして居られました頃、私にこれを下さつたのです。私はそれを今日まで持ちつゞけ又讀みつゞけて参りました。今晚私は兵士として入隊することになつて居ります……」と。

第三。彼等に祈ることを教へねばならぬ。多くの規則正しい祈、特に屢々密室の祈をなすことを促し、終に彼等自身祈りの樂しさを、云ひ得ぬ必要と利益とを知るに到るやうにせねばならぬ。

第四。彼等に信じつゞけることを教へ、又彼等が罪と誘惑との區別をはつきり知り得るやうにせねばならぬ。

第五。彼等が他人の救の爲め、殊に己が家族の救の爲めに戦ふやう、忍耐強く之を勵まねばならぬ。アンデレ、兄弟シモンを見出し……イエスの下に「伴れ來れり」と、聖書にある。われらの同心者も又これにならねばならぬ。

第六。彼等を忍耐強く、やさしく而も確固たる態度もて、聖潔、即ち全き愛の経験に導き入れねばならぬ。彼等が獻身と云ふ處で止るを許さず、全き救の確實な経験にまで引き入れねばならぬ。

マハン監督が、フィニーが若い頃の傳道に於て失敗したと云つてゐるのは、此の點であつたのである。彼フィニーは、罪人をして、その罪から完全に離脱せしめ、過去の凡ての不従順を補はしめ、やがてその凡てを完全にイエスに獻けしむると云ふ點に於ては、正に第一人者であつた。彼はその同心者達が、凡てのこと神に服従するとの誓をもて、新しき未來への出發をなすに到らしめたのであつたけれど、更に進んで彼等が聖潔めらるゝ爲に主イエスに頼り、又聖靈もて己が心を満されると云ふ點に關しては、彼等に何にも教へなかつた。聖靈が焼きつくす火を以て我等の心に來り、全き愛を以てそれを満し給ふ迄は、われらの誓と云ふものも、實は砂で造つた綱のやうなものである。マハン氏は云つてゐる。「私は信する。恐らく他の何人も、フィニーが主の途を愈々完全に知つた前、彼がその主義に就てなした如く、あれ程嚴格に又あれ程熱烈な倦まぬ忍耐を以て、その信者達を訓練した者はなかつたであらう。彼のリバイバルの後に生じた多くの墮落に驚いて、彼はその最も熱心な努力を、信者達の聖き生活の持續の爲に注いだ。此の目的を達せん爲に、彼は只一つの方法を知つて居つた。即ち絶對的な、不變の罪の抛棄、神への獻身及び服従であつた。然し聖靈を受ける信仰に就ては一言もしなかつた。例へば彼がニューヨークで牧會に

従事して居つた頃、彼は數週間連続で特別集會を持つた。その時出席した人々よりも、もつと嚴しい訓練を受けたものは、恐らく他にないであらう。彼等の牧師が私に告げた處によると、數年の後、それらの人々はフィニーが施した恐ろしい訓練の結果生じたる内的弱さと、疲勞とから恢復し得なかつたと語つたとのことである。これが彼の大きな努力の所産の全部であつたのである。

彼がオベリンに行つて、教授の職に就いた時、彼は神が自分に教會に對する理想を完全に實現するの機會を與へ給うたと感じた。彼の前には、教師の智慧に絶對の信頼を置き、同様の眞剣さをもて師の教導に従はんとする、幾多の才能ある前途有爲の神學生がゐた。そこで彼は數ヶ月に亘つて、一定の期を定め、學生を共に集め、最も慎重に罪の離絶の内容、キリストに對する獻身及び服従の決意等に關して薰陶したのである。彼の指導と獎勵の下に彼等は能ふ限りの熱誠と堅き決心もて、罪との離絶獻身及び服従の決意を常に新にしたのであつた。何れの場合に於ても結果はみな同一であつた。——即ち期待されたものは新生でもなく、喜悅でも、平和でもなく、又能力でもなくて、罪と死の律法の下に於ける呻きの鎖であつた。各集會の開始からその進行中も彼

等の罪の告白、罪の抛棄、厭かな獻身と服従の誓が、前にも勝つた決意もて新にせられた。併しどの集會もくいつも同じい悲歌で閉ぢられるのであつた。

われらは低く此處にはらばふ。
還れ、聖靈よ、われらに還れ。

そして彼等の出で行く時、歡喜の歌ならずして、呻きの聲のみが聞かれるのであつた。彼等は懸命に義の律法を追ひ求めた。然し乍ら終に、その義の律法に達することが出来なかつた。何故か！ 彼等はそれを信仰によつて求めずして、いはゞ律法の行爲によつて求めた爲である。即ち自發の努力と決心によつて求めたからである。と。

感謝なる哉、フィニーはその後、更に深く神の御旨を學んだ。救靈者は凡て彼の例によつて學ぶべきである。回心者は全く罪を抛棄せねばならぬ。誤てるを正し己が身を全く主に獻け、細大となく凡て主に従はねばならぬ。併し同時に又、それは飽くまでも只人間側の努力であつて、今や彼等は天の父を待望み、神が御自分の分をなし給ふを信じ、即ちそれが彼等の心を潔め、聖靈にて満しめ給ふと云ふことを、充分悟らなければならぬ。而して喜と信仰もて神と相撲を取り、

與へられずば止まざる祈りをつゞけ、やがて慰主なる聖靈、その聖別と慰安の能力もて彼等の心に満つるまでそれをつゞけねばならぬ。彼等は即ち「上より能力を着せらるゝまでは、エルサレムに止らなければならぬ。神は求むる者に、親がその子に、善き賜物を與ふるにまさつて、聖靈を與へんとする給ふことをおほえ、神を信じ聖靈を受けなければならぬ。それは事實である。ハレルヤ」私はそれを體驗した。

救霊者は己が仕事を組織立て、部下の人々を訓練し、かくて慧い熱心な兵士や下士官達を擁し改心者の養ひの爲に己を補助せしむるやうにせねばならぬ。

人々を斯く訓練するには、尠からざる忍耐と技術と祈りとを要するであらうが、併しその凡ての努力は豊かに酬ひられる。「各自に夫々の仕事」をさづけ給ふのが神の御計畫である。モーセにはさうした補助者があつた。又パウロも大いにさうした補助を要した。然し乍ら火の中に、餘り多くの鐵を投げ込んでではならぬ。凡てのものは只此の一つの目的——人々を救ひ、彼等を勇敢なキリスト・イエスの兵たらしむる——に附隨させなければならぬ。パウロは云つた。「只此の一事を努む」と。組織も又これを無視してはならぬ。そは人々がサウルの武具を着けたるダビデとな

らぬ爲、彼等の能力が徒らに手續に欺されぬ爲、又大きな機械のみあつて、之を運轉する充分の能力なきものとならざるが爲である。機械は簡單にして神よりの靈力を豊富ならしめよ。之が爲に多くの祈りと忍耐もて神を待望まねばならぬ。能力は神にあり、而して忍耐深く信仰もて謙遜に而も大膽に請ひ求むる時に與へられるものである。御榮は神にあれ。

人々をして調和を保ち一致して働かしめんが爲には、我等は一つの偉大なる共通情緒に溶され燃されねばならぬ。而して二つの鐵片が溶解せられる如く溶け合ひ、そこには最早「ギリシヤ人もユダヤ人もなく、英國人も愛蘭人もなく、佛蘭西人も獨逸人もなく、米國人も歐羅巴人もなく只「キリストが凡ての凡て」にならなければならぬ。愛はこれを成す唯一の能力である。愛は必ずこれを成就する。御榮は神にあれ。私は或士官が次の如く語るのを聞いた事がある。「私は言葉が一つも了解出来ない或る集會で救はれた。併しイエス様の愛はそこにあつた。そして私はそれを悟ることが出来たのである」と。

寒い冬は何處の國の人でも火の炊かれてあるストーブの周圍に集るが、それと同様に愛に満ちた士官や兵士達の周圍に人々は集つて来る。パウロによれば、神は實に「徳を完ふする帯」である。

愛は凡ての嫉妬を消し、美望を壊り、猜疑を焼きつくして信頼を生み、死よりも強き繼もて人々を固く結びつけるものである。われはそれを有たねばならぬ。より豊かに有たねばならぬ。更に一層の愛を！ 愛なくして我等は空である。

我等は天使の如き辯舌と歌を恵まれて居るかも知れぬ。われらは慧く、先見の明あり、明に將來を豫知し、又多くの事柄に就て、博い知識を有ち得るかも知れぬ。或は又山をも動かす信仰を持ち、仁慈に富み、多くの貧しき人々に食を與へ、雨露を凌がしめ、凡ての財産を傾けつくし、身を粉にしてその爲に盡し得るかも知れぬ。而も我等が、あの柔和な、聖い、謙虚な、忍耐強くして、無私な、たゆまず、疑を知らず、自己犠牲的な寛容にして心貧しき主イエスの愛を持たずとするか、我等は空である。——實に鳴る鐘や響く鐺鉢に過ぎぬ。

パウロをして「われ汝等を煩すまじ。我は汝等のものを求めず。たゞ汝等を求む。……われは大いに喜びて、汝等の靈魂の爲に、物を費し、また身をも費さん、われ汝等を多く愛するによりて、汝等我を少く愛するか。」と書かしたものは實に此の愛である。茲に今一つパウロの自叙傳の一部がある。その言葉の一つは、彼の偉大な心に溢れてゐた愛が脈々として流れて、全世

界の士官の居室の壁に貼つて置かるべきものである。兄弟よ、我らの汝らに到りしことの空しからざりしは、汝ら自ら知る。前に我等は汝等の知る如く、ビリビにて苦難と侮辱とを受けたれど我らの神に頼りて、大いなる紛争の中に憚らず神の福音を汝らに語れり。我らの勸は迷より出でず、汚穢より出でず、詭計を用ひず、神に嘉せられて、福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鑿給ふ神を喜ばせ奉らんとして語るなり。我らは汝らの知る如く、何時にても諂諛の言を用ひず、事によせて慳貪をなさず（神之を證し給ふ）キリストの使徒として重んぜらるべき者なれども汝らにも他の者にも、人よりは譽を求めず、汝らの中にありて優しきこと母の己が子を育てやしなふ如くなりき。かく我らは汝らを戀ひ慕ひ、汝らは我らの愛する者となりたれば當に神の福音のみならず、我らの生命をも與へんと願へり。兄弟よ、汝らは我らの勞と、苦難とを記憶す。われらは汝らの中の一人をも累はすまじとて、夜晝、工をなし、勞しつゝ福音を宣傳へたり。また信じたる汝らにむかひて、如何にも潔く正しく、責むべき處なく行ひしかば、汝らも證し、神も證し給ふなり。汝らは知る、我らが父のその子に對する如く各人に對し、御國と榮光とに招き給ふ神の心に適ひて歩むべきことを勧め、また勵し、また諭したるを。

と。

此れが即ち同心者達の信仰を築き上ぐる處の愛であつて、他の如何なるものも、それをなす事が出来ぬのである。我等が持つべきものは、愛！ 愛！ 愛！ である。われらは愛を求め、愛の爲に祈り、愛の爲に信ぜねばならぬ。われら自ら愛を働かせ、又凡ての人が相愛するやう鼓舞せねばならぬ。さらば彼等は互に奨め合ひ、互に祈り合ひ、その悲しみを共にし、祝福を頌ち、結ばれて一つとなり、陰府の門も之を打破ることが出来なくなるであらう。

おゝ願くは、我等凡て救靈者をして、聖き愛のバプテスマに溶されんことを、かくて主イエスに似たる者とならせ給へ。忍耐深き、柔和な、忠實な、勇敢な、又倦むことなく、懼るゝ處なき全き無私なる者とならせ給へ！

さらば神の民はいよく増し加はりて強くなり、主の軍隊は「旗をあけたる軍旅」よりも更に恐るべきものとならん。

若しわれらにして此の愛を缺かんか、信じて祈り求むる者には與へ給ふ。必ず與へ給ふ。私はそれを信ずる。

第十四章 兒童の救（上）

主は、自ら「幼兒等のわれに來るを止むな」と仰せられたばかりでなく、ペテロに向うては、進んで「わが羔羊を養へ」との御命令を與へ給うた。此の御命令の中に、子供達に對する救靈者の責任を示し給うたのである。何となれば「天國は斯くの如き者の國」だからである。他の如何なる方面に於ても、又如何なる種類の人々に於ても、幼兒達に於ける如き即座の成功と多大の成果とを收むるといふことは不可能である。

若しも救靈者が單純になり、彼等の取扱ひにわづかの智慧を働かせるなら、いとも容易に福音を彼等に近づけしむることが出来る。彼等は罪の爲に頑固にせられてゐない。彼等の良心は柔和で、その心は開いてゐる。又物事をよく受け入れ、意思は容易に矯め得られる。其の上抱く信仰は極めて單純である。彼等はイエス様の愛、天國の榮光、地獄の恐ろしさ、或は又神の御能力、偉大さ等の事を忽ち受け入れる。そして信仰を以て、凡てのことを神様に祈り、又凡ての心配を神様におまかせすることを直ぐに覺える。その眼は誰のよりも目敏く、人々を照して居る神の御

光を見ようとし、その手は誰のよりも早く主の御命令をなさんとし、その足は誰のよりも早く主に倣つて走らうとして居る。

それにしても、彼等を救うために不斷に努力せねばならぬ。又彼等が救はれて後も怠らずその面倒を見ねばならぬ。何故ならば彼等が早く主に救はれ、その御愛によつて満たされなければ彼等の天性は間もなく破壊せられ、此の世の悪しき感化を受け、絶え間なく機会を窺ふ悪魔の俘虜となつて了ひ、その眼はくらみ、心はかたくなになり、終に全く滅びてしまふからである。

諸君は或は、己は此の任に適しないと感ぜられるかも知れない。併し乍ら神が諸君を召して、救霊者たらしめたとすれば、自分をその任に適せしむるやうにすることが諸君の務である。先づ第一に必要なことは、子供達の回心の可能なることを信することである。確にイエスの平易な御教訓や、聖書の中に見出さるゝ例や、又誰でも眼さへ開けてゐれば、容易に目撃し得るられ幾多の實例は、此の可能性に就いて、最も懐疑的な者にも、疑を挿ませないに違ない。

未だほんの幼少の頃から、神はサムエルに語り、その心と口とを神の智慧もて満し給うた。

されば、彼の言葉は一つとして空しく地に落ちなかつた。小供の時から神はエレミヤを諸國民

の預言者と定め、御霊もて之を満し給うた。若しも此の事が、昔律法の下に於て可能であつたとすれば、今日此の福音の下に於ては、更に優つて可能ではないか。

ブース大將夫人は、まだほんの一少女の頃回心した。ブース大將は亦少年の頃救はれた。それからその息子や娘達が救主を信じたのも、ほんの小供時代であつた。

ジョナサン・エドワーズは、その著書の中に、小さな五つになる少女がさも悲しさに、なさけなさそうに、自分の部屋に入つたり出たりしてゐる有様を書いてゐる。彼女の母が何うしたかと尋ねると、少女が云ふには「御母さん、私が御祈する時、神様は来て下さらないのよ。」母は彼女を慰めやうとした。然し、彼女の心は慰主御自身が御出で下さる外に、誰も之を満すことの出來ない餓ゑ渴きを覺えて居つた。そして尙も續けて彼女はさびしさうに部屋に入つて行くのであつた。處が、或る朝彼女は部屋から駈け出して来て、母の膝に飛び上りざま、その首に兩腕を投げかけて叫んだ。

「御母さん、私が今お祈しましたら、神様がいらつしやつたの！」かくて彼女の幼年時代、青年時代、又中年時代を通じて、彼女を知る凡ての人々の奇しと思ふ程に、主に似たる謙遜と恵

と眞實との生活を送りつゞけたのであつた。

第二に、彼等の靈魂を救ふことが出来ると思へば、諸君はそれを爲さうと決心せねばならぬ。併しそれをなす前に諸君は先づ自分の心の中から、「子供達には、何んでもよいのだ」といふやうな考を、全く棄て去らねばならない。彼等の靈魂を主に導き、又それを養うて行く爲には、多くの祈と忍耐と愛と熟練と、そして神よりの智慧とを要するのである。彼等には「のりにのりを加へ誠命に誠命を加へなければならぬ。一度教へてもまだ不充分だと思はれる時には、それを繰り返しく教へ込むことが必要だ。」ウエスレー兄弟の父親がその妻に「御前は、何故チャールスに一つのことを二十回も話してゐるか」と尋ねた。でも十九回教へてもまだ駄目なものですもの。之が賢い忍耐強い彼女の答であつた。「イスラエルよ聽け、我等の神エホバは唯一人のエホバなり。汝心を盡し、精神を盡し、力を盡して汝の神エホバを愛すべし。今日我が汝に命ずるこれらの言は、汝これをその心にあらしめ、勤めて汝の子供に教へ、家に坐する時も、路を歩む時も、寝る時も起る時も之を語るべし。汝又これを汝の手に結びてしるしとなし、汝の目の間におきて、おほえとなし、また汝の家の柱と汝の門に書き記すべし。」(申命記六・四九)とある様に、古のイスラエルの子供達は教へ込まれたのであつた。今日も亦救電者は、己が爲にも又人々の爲にも、右の様な標準でやらなければならぬと思ふのである。

子供達のために意を用ひてやらねばならぬ。これは愈々深く確信させらるゝのであるが、どんな集會に於てでも、子供達がそこに居る時は、彼等に向く様な話を何か語り、又人々を恵の座に招く時も、子供達でも進み出らるゝ様にしてやらねばならぬ。

彼等が主の御許に來た時は充分徹底的に之を取扱はねばならぬ。即ちその幼き心を味し、罪をさぐり至き悔改めをなさしめねばならぬ。又之に豊かなる神の御愛を教へ、罪と縁を切るならば必ず救はれることを示して、彼等の恐怖をやさしく取除けてやらねばならぬ。彼等の思がイエスに向けられ、その信仰が、主に結びつけられ、且つ御聖言の上に立つものとならしめねばならぬ。彼等に主の確なる御約束、例へば「もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ、我等の罪を赦し、凡の不義より我等を潔む」の如きを與へよ。それにしても諸君自身が、單純になり、子供達に凡てのことが容易に了解せらるるやう意を用ひることが肝要である。諸君には了解し得る言葉でも彼等には意味がよく解らないことが少くない。故に諸君は努めて單純にな

り、自分の云ふことをよくわからせるやう心掛けねばならぬ。過日私は數人の子供達に御話を
して居た時に、「汝の若き日に、汝の造主をおほえよ」といふ聖書の句を述べた。そして私は「造
主」なる言葉の意味を尋ねて見た。處が彼等の中のたゞ一人も、それを知らなかつた。又「若き
日」といふ言葉の意味もわからなかつた。そこで私は改めて彼等にその聖句の意味は、みんな
がまだ小供の中に、神様を知り、神様のことを考へ、又神様を愛するやうにしなければならぬ
といふことだと説明しなければならなかつた。

私は、更に次の聖句を與へて見た。「見よはらから相睦みて共に居るはいかに美しくいかに樂し
きかな。」然し又誰も「相睦む」の意味を知らなかつた。一人の生徒が答へて、「それはホームのこ
とです」というた。これはどうにか當つてゐる想像ではあつたが、私は矢張り改めて、その聖句
の意味は、小供も大人も一家中、みんな一處になつて、争も喧嘩もせず平和に暮すことは、ど
んなに樂しいだらうかといふことだと話すと、彼等は初めて納得した。

諸君はよく頭を働かせ充分考へて、子供達にもよくわかるやう、單純に話すことを心掛けねば
ならぬ。愛は諸君を助けるであらう。

しばらく前のこと、私は或る若い教師が子供達に、次の歌を一生懸命に歌つて聞かせて居るの
を見た。

「荷物はデツキにお置きなさい。

合札を確かにお持ちなさい。」

然るに彼は、その歌の意味が、誰でもその罪を棄て、自分自身を主イエスに獻けるならば、そ
の心の中に、きつと主の御愛を受け得らるゝといふのだといふことを一つも説明しなかつた。そ
れで、彼が歌つた後には、荷物だのデツキだのチエツキだのといふ言葉が、唯こんがらがつて子
供達の耳に残り、その幼い頭や胸には大切な、救に就いての考なんかは、少しも残らぬであらう
と私は感じた。

若しも諸君が、智慧と愛とを神に求めるならば、神は必ず諸君を扶けて、最も深い靈的眞理を
子供達にもよく解るやうに教へる道を拓いて下さる。話を單純にすることによつて、多くの子供
達が主の救を見出したといふ事實を知るの喜びを私に與へて下さつた。そして更に嬉しいこと
には、その中から見事に聖潔の恵を受けた者さへ出來たのである。暫く前のこと、私が導いた

集會で恵の座が子供達で一杯になつたことがある。其の時私はその一人々々を自分で取扱つた。一人の子供に向つて尋ねた。

「あなたはどうしてこゝに出て來ましたか。」

「イエス様に救はれたいのです。」

「何から救はれたいのですか。」

「私の罪からです。」

「ではあなたの罪とはどんなことですか。」

「私は喧嘩をしました！」

といつて其の子供はそこに泣きくづれた。

私は又一人の少女に尋ねた。

「貴方はなぜ此處に出てこられましたか。」

すると彼女もやはりイエス様に救はれ度いからだと答へた。

「あなたの罪は何ですか」と尋ねると、しばらくためらうてゐるが、

「私は弟や妹をいぢめました……」と叫びつゝ、彼女もそこに泣きくづれてしまつた。

他の一人の少女は、人の悪口を云つたこと、又もう一人の少女はお母さんにさからつたことを告げた。一人の少年は嘘を吐いたこと、又もう一人の少年は、煙草を飲んだことを告げ、又或る少年は、先生のいひつけを聞かなかつたことを告白した。かやうにして彼等は各々罪を云ひあらはし、くづ折れて泣いて神に訴へ、罪の赦されんことを祈り求めた。私は彼等の大部分が救を得たと確信するものである。

又別の集會には、わづか十歳の少年が聖められ、聖靈に満され、それまでは非常に臆病だつたものが、その恐怖の心を全く取り除かれたのであつた。何故つて、イエス様がいつも僕と一緒にゐて下さるんだもの」と、彼は云ふのであつた。

又ある集會では、やはり十歳の少女が聖められ、その後三年間聖い生活を送り、喜んで御國に召されて行つた。其の時彼女は、神様が尙も彼女を聖め、いつまでも愛して居て下さるとして私に送つてくれた。

然し私達は、これ等凡ての事をなした後も、尙常に彼等は羔羊であつて、大人の羊ではない。

とを忘れてはならぬ。即ち彼等は、成長しつゝある子供であつて、成長し切つた大人ではない。彼等の凡ては未完成で、その上微弱である。又至つて経験にも乏しい。それで毎日身邊の見る物や此の世の事柄には、大小となく氣を奪はれて居るのである。

それから又私達は、彼等も亦各自人格と個性とを有すること、従つて彼等は、必ずしもいつも年上の人から單純な平易な言葉を聞かうとも又その教訓や忠告に従おうともせず、自らの能力を發揮して、獨りで凡てのものを「味はひ知らん」とする場合が少くない事を知らねばならぬ。

それであるから我々は、彼等に對して、神様のことを澤山語つてやるばかりでなく、更にまして彼等のことを神様に告げ、彼等の救を確保し、我等の主キリスト・イエスの御恵の中に保ち得るやう、不斷に能力ある聖靈の御協力に依頼することが肝要である。

われらは、爲し得る限りの努力を拂ひ、終に、テモテに書き送りしパウロの如く、「汝幼き時より聖なる書を識りしことを知ればなり。此の書はキリスト・イエスを信する信仰によりて、救に至らしむる智慧を汝に與へ得るなり」と叫び得度いものである。

恵ある主よ幼兒達を、
導き救へ何時までも、
惡魔の手より彼等を守り、
いかなる時にも伴なり給へ。
白衣を纏うて歩む彼等と、
遇はせて給へあまつ御國で。

恵ある主よ幼兒達に、
なさせたまへ主の用を、
よしカルバリを通るとも、
此の世の敵に攻めらるゝとも、
彼等は遂に凱歌を擧げて、
勳功に輝きみ前に出づべし。

惠ある主よ幼兒達か、
 生かしめ給へたゞ主のために、
 よし死の波は高く擧るとも、
 汝は岩、光、支柱なり。
 あゝ主よ我等は終に、
 御胸に憩う彼等を見るべし。

第十五章 兒童の救(下)

あのごつぐの手をした粗暴な氣の早い漁夫ペテロは、自分自身を一國の首相が大臣か、或は大僧正か、それとも大佐とか中將とかに最もあつらえ向きの者だと考へたらしい。そして他の弟子達と、彼等の中で、自分が一番優れた人物だなどと言つて争つたものゝ如く見える。その彼が主から幼兒達のために働くやうに言ひつかり、羔羊をやしなふことを命ぜられた時、彼の驚きは如何に大きかつたであらう！そして彼が子供達の爲に働くに適しないことを證明するために、どれ程大きな議論をやり得た事であらう。彼は確かに、少くとも一人の子供を持つて居た。或は數人だつたかも知れぬ。併し當時はまだ漁師だつたから、子供等の世話は大部分妻の手に委せてあつたであらう。實際彼は、性格から言つても、教養から言つても、さうした種類の仕事には、何等の適合性を持つてゐなかつた。彼の仲間と云へば皆大きな逞しい海の男達のみであつたし、又子供達にお話することに就いて、何程の事を知つて居たであらう。彼の思想、願望、野心等も全く異つた方向に走つてゐたし、もう一度變はるには餘り年取り又、固まつて居たではないか。

併し乍らイエスは、無限の知識と慈愛とを以つて、彼の眼をまともに見つめ、あのさぐるやうな質問を發せられた。「汝このものに共に勝りて我を愛するか」と。それに答へて「主よ然り、我が汝を愛することは、なんぢ知り給ふ」と。イエスは又言ひ給うた。「我が羔羊を養へ」と、ペテロは何と答へ得たであらうか？ かくてペテロは初めに子供達の働人として任せられたのであつた。

「併し、主が我が羔羊と仰せられたのは、若き回心者達ではなくて、新しく回心したばかりの人を指したのではなからうか」と、諸君は言はるゝかも知れぬ。

なる程、主は新しい回心者を意味されたのかも知れぬ。併し新しい回心者の中には、子供達も含まれてゐる。何となれば、子供達も亦屢々回心するからであり、主は又子供達に就て「天國はかゝる者の國なり」と仰せ給うたではないか。されば如何様にその句を解釋しようとも、ペテロが子供達と共に、又その爲に働くことを命ぜられたとの事實を認めぬわけには行かぬ。そして若しペテロが然りとせば、諸君又は私が、同様にさうでない筈があらうか。私達は皆、聖靈がその爲の監督者として私達を御召命下さつた群を、よく見守るやう命ぜられてゐるのではなから

うか。そして又、その中に羔羊なき群が果して存在するであらうか。若しさうした群が存在するとすれば、かゝる群は、忽ち消滅せねばならぬであらう。

我等は手の届く所のものを、力を盡してなすことを命ぜられてゐるではないか。而して我等は一方に「牧ふ者も愛する者も教ふる者もなく、その可憐な小さい靈に意を注ぐ者もなく、その爲に主の御前に祈り且つ泣く者もなくして、彼等の小さき手をわれらに向けて「來りて我等を救へ」と叫ぶ無数の子供達の群を見出すではないか。我々は、彼等が老いて、罪の深みに陥り、邪惡の中に、かたくなになり、けがらはしき習慣に陥り、サタンの奴隸となるを待つて後、彼等の救の爲に働き、計畫し、祈り、その救を求めねばならぬであらうか。われらは救靈の使命を持ちつゝ尙、然も子供達に對する任命はないといふことがあり得るであらうか。否、否、否！「汝我を愛するか」と主の御問ひに對して「主よわが汝を愛するは汝知り給ふ」と答ふる凡ての人に向つて、主は「我が羔羊を養へ」と仰せ給ふ。或る者は、自分はさうした仕事には適しないし、手練も腕もなく、才能もないと感ずるかも知れぬ。併し任命はその人に、自ら學び、考へ、めざめて、祈り又愛し、信じて己をそれに適せしむべき責任を負はせてゐる。そして今持つてゐる貧弱

な、訓練のない、能力も以て始め、凡ての機会を利用し、又常に勤勉に、忠實に、勇氣と快活と信仰とによつて、そして又、日々に神の祝福を求むることによつて、此の適應性は勝ち得られるのである。

哀れな酔漢で、その靈魂にも手にも、夢にも音楽らしいものをもつとは思はれない者でも、一たび恵の座で同心し、やがて音楽に意を向け、半年もつゞけて、楽器を吹いて居ると、終には見事に吹けるやうになる。それと同じ勤勉と、忍耐と決心とを以て、又子供達を喜ばしめ、祝福しそれを助けることが出来るやうになる。併しそれには、彼はその全心全靈をそれにそゝぎ込まねばならぬ。

私はしばらく前一人の牧師のことを讀んだ。彼は、自分は大人の人々に向つて大きな説教をする爲に召され、又それに適してゐると思つてゐた。處が或日、仲間の牧師が、子供達に向つていとも面白く、又教訓に満ちた御話をしてゐるのを見て、自分もその力を獲たいものだと思ひ、決心し、思考をこらし、祈り又自ら練習した。彼も亦能力ある子供達の働人となつたと云ふことである。「わが兄弟よ、姉妹よ、諸君も行って、かくの如く行へ。諸君は、それならば、どうすれば、

さうした働人になれるかと問はるゝか。それには、

第一に、自分はさうせねばならぬ義務があると決心せよ。そして又、神の御恵によりて、それをなさんと決心せよ。かくてそのことを日々の祈りとし、思念とし、冥想の題目とせよ。とりわけ、神よりの助けを求めよ。

第二に、他の人から出来る丈の助を得よ。彼等の方法を學べ。さり乍ら、鶉の眞似する鳥とはなるな。諸君自身であれ。

第三に、その問題に關して書かれた最良の書物を讀め。本營から出るものゝ中で、諸君を大いに助くる多くの書籍がある。

第四、自身を子供の位置に置いて見よ。そして何が自分を喜ばせるかを考へて見よ。凡てのものを單純にわかり易くせよ。子供達の了解し又興味を惹き得るやうな例話や逸話を求めよ。

第五、併し、就中、その心が、やさしき愛と子供達に對する同情とに満さるゝ様にせよ。さすれば、假令、その語ることは少くとも、彼等を喜ばせ、その助となるであらう。彼等は諸君の愛を感じ、それに應へるであらう。かくて諸君は、彼等をイエス様に向けることが出来、その天

國への最初のかよわき歩みを助けることが出来る。

若き日の危き道を、

迂闊な心もて歩み居たれど、

見えざる主の手に守られければ、

生立ちにけり今日の日まで。

危険と戦と死の闇路にも、

尙又甘き惡の誘ひの日にも、

優しき主の手の降りければ、

道は拓かれ歩むを得たり。

吾が身の病に疲れし時に、

主は健かを與へ給へり、

吾れ罪と悲哀に沈む日に、

主は救して慰め給へり。

無限の恩寵を賜りければ、

心は日々に感謝に溢る。

喜び跳る此の心をば、

何に例へん術もなし。

主を慕ふ吾れ生くる限り、

更に求めん主の御恩寵を、

かくて讃えんあの世までも、

較ぶものなき主の榮光を。

第十六章 戦術

最近、平常の通り聖書を読んで居た時、私は、ダビデ王が、アブサロムを討伐するために出で行かんとする武將達に向ひ、「わがために少年アブサロムを寛に待へよ」(サムエル後一八・五)と訴へて居る箇所に到り、そのメッセージがイエスのそれに似通う點の多いことに氣付き、大いに心打たれたのであつた。

アブサロムは、己が父ダビデ王に反逆し、之を王位より追ひ、その家族に危害を加へ、子としての愛情を犠牲にし、子たるの分を盡さざるのみか、國民としての義務をも踏躪り、今や、父の生命を求めつゝあつたのである。併しダビデは、依然彼を氣まぐれな少年と見做し、之を愛し、武將等に、之と戦を交ふると雖も、宜しく寛に待へよと命じた。ダビデは、反逆といふ行爲は憎むが、反逆者は救はるる様に願ひ、罪は罰するが、罪人は救はるゝ様に願つた。

其の態度は、何とイエスのそれに似て居るではないか。主イエスは、最も絶望的な背教者や、最も反抗的な罪人に對しても、斯くの如く感ぜられたのではなからうか。主の心は言ひ難い程のやさしさをもつて彼等の上に注がれたのではなからうか。そして之は、吾々を訓へ諭すために書かれたものではなからうか。主は吾々に、「我が爲に寛に待へよ」と語り給ふのではなからうか。

其の日戦はアブサロムに利あらず、無情にして頑固なる老ヨアブは、王の願があつたにも拘らず、敢て彼を殺してしまつた。同様の事が、今日も尙屢々行はれて居る。主御自身は、背教者や罪人等を、寛に待はんとして居給ふにも拘らず、ヨアブの徒は却つて數を増し、到る處に跋扈し、之等の者に苦き言葉を與へ、險しき顔に向け、すつかり度膽を抜いて殺してしまうのだ。それはダビデの場合と同じく、主がどんなに心を悩まして居なさるか知れない。放蕩息子には、荒んだ生活に陥つて、父に尠なからず心配をかけたが、其の兄は、酷薄な嫉妬心と無情な言葉と頑固な考とによつて、もつと甚だしく父に心配をかけたかも知れぬ。

我々が、罪人や背教者等を寛に待はねばならぬ理由は多くある。

一 我々がイエスの如くあらん爲に。ペテロがイエスを拒み、咀ひ、罵つた時でも尙、イエスは彼を愛し、振返つて之にやさしき顔を向け給うた。彼は、それにはいたく心打たれ、出でて激

しく泣いたのである。イエスは復活せられてからも、之を責め詰る如きことは少しもなさらず、却つて「汝われを愛するか」とやさしく問ひかけ、之に、神の羔羊と羊の群を養うべきことを託し給うた。

我々はどんなに善いとしたところで、「恵によつて救はれた罪人」に過ぎない。それなのに、主の御模範を蔑ろにして、迷へる神の羊を荒々しく待つてよいであらうか。又主が、我々のために一萬タラントの負債を免じて下さつたとすれば、我々が、兄弟達のために僅か百ペンスの負債を免じてやれないといふことがあらうか。

二 我々自身が御霊を憂へしめ、且つ、自ら躓く者とならぬために、彼等を寛に待たねばならぬ。パウロは、ガラテヤの兄弟達に書き送つて言つた。「もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘はるる事あらん。」(ガラテヤ書六・一)もしもクリスチャンだと自稱する者が、躓いた者を冷酷に待つとすれば、彼等自身が又躓くのは、唯時の問題だといふことを私は知つて居る。實際彼等は、心の裏では既に躓いてゐるのだ。ヨアブは、假令忠誠の衣服を纏うて居たとしても、反逆者アブサロム

を殺したといふ行爲は、明かに王の切なる願と命令とに背いたものであつた。

それで今日、正義に對する熱心と、眞理に對する忠誠といふ衣の下に隠れて、罪人や躓ける者を冷酷に待つ者は、同様に、主イエスの御模範を蔑にし、その御心を傷めて居るのである。早くそれを悔改めなければ、世間が黙しては居ないと思ふ。

三 我々は、躓いた者を救うために、之を寛に待たねばならぬ。イエスは今日も尚、斯くの如き者を愛し、絶えず探し求め、立ち歸つて來さへすれば、直ちに赦し、そして潔め、救の喜悅を再び與へようとして居なさるのである。我々は夢にも主の御業を妨ぐる様なことをしてよい筈がない。何とかして扶翼し奉らねばならぬ。それには、我々が人を寛に待つことを習得する必要がある。荒々しく扱はれたのでは、我々でも救はれなかつたと思ふ。躓いた者とても同じ事だ。

パウロはテモテに書き送つて言つた。「主の僕は争うべからず、凡ての人に優しく能く教へ、忍ぶことをなし、逆う者をば柔和をもて戒むべし、神あるひは彼らに悔改むる心を賜ひて眞理を悟らせ給はん。彼ら一度は悪魔に囚れたれど、醒めてその良をのがれ、神の御意を行ふに至らん。」(テモテ後二・二四・二六)併しながら、此の優しいといふ事は、斷乎たる態度を採る事とも、眞理

に對して忠實だといふ事とも、聊かも矛盾するものではない。事實、優しさが之等の徳と結びつく時、はじめて、罪の中にある者の心に訴へ、之を喚び覺まし、其の者を眞に、誤れる道より立返らせることが出来るのである。

心には大なる優しさを持ちながら、斷乎たる態度に出ることは出来る事である。自分の子供が火傷した時、やさしく勞つてやるのに不思議はないとして、その前に、それと同じ精神で、火を氣をつけよと嚴に警めることは出来るのである。神に背いてる者に對して、荒々しい態度や嚴しい扱ひを與へて、其の者の心を唯頑にしてゐるとすれば、どの様な有難い福音だとして、受付けられる筈がない。其の者は、益々之を輕蔑し、もう願みなくなるのは當然である。それ故救靈者たる者は、硝子や鑄鐵の如く唯堅くて脆い丈では困る。又、鉛やバテの如く軟弱であつても不可ない。宜しく鋼鐵の如く、曲りはしても決して折れない處の強さと柔軟性を持つて居なければならぬ。救靈者が斯くの如くであれば、一時は讓歩する如く見えても、元の形をちつとも失はずに居ることが出来る。

一般に聖められた母親は、父親よりも、我儘な小使達に對してより多くの感化力を有し、又之

をよく矯正するのは事實である。それは其の母親が、輕々しく主義を棄て、眞理を犠牲にするかではない。寧ろ正義の精神を失はない限り、制裁の中に慈悲を混へ、完くして聖なる神の法則に従はしめる時にも、強い愛と優しい心遣とを取入れることを忘れないからである。

然らば此の完き慈悲の心を持たない者は、如何なる方法でそれを己が所有とするであらうか。それには唯一つの道がある。それは御靈の果である。故にそれは、イエスの足許に来る時に初めて得らるのである。

イエスは「屠られし羔羊」の如くに黙して忍び、甚だ優しく見えたが、他方「ユダ族の獅子」の如く強く猛くあり給ふた。彼は獅子の強さに加へて、羔羊の優さを有し給うた。斯くの如きキリストの御靈を、己が所有となさんとする者は、自分が未だそれを與へられて居ないことを正直に告白せよ。諸君の心が、頑で荒々しく、冷たく、嚴しく又無情であるか。きうだとすれば宜しく神に訴へて、己が肉の心が打碎かれ、キリストの心が與へられんことを願へ。その時は「信する者には凡ての事なし得らるるなり」との聖言を飽くまで信ぜよ。

又此の心を持ち續けるためには、イエスの御足跡を歩むと同時に、常に聖言の中から糧を得て

居らねばならぬ。日々心に盡し、喜悅の情をもつて神を求むる者のみが、此の心を授けられる。そして性情や氣質が、キリストに似たものとせらるるのである。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。」

敵は幾萬ありとも、

世人は擧りて猛るとも、

我が魂は戦かじ、

我が持つ楯は神の楯、

流血の羔羊刻まれあれば、

如何なる敵も抗し得て、

矛を納めてやがて去るべし、

イエスの御名により我かく信ず。

陰府の王たるサタンの手より、

罪科滿つる此の悪しき世より、

救ひ給へ我が魂を、

穢れを洗ひ枷を除き、

解き放ち給へ憫む我を、

天より降りし主なる神は、

僕の願を聞き給うべし、

イエスの御名により我かく信ず。

第十七章 如何に語るべきか

「二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の會堂に入りて語りたれば、之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり」(使徒行傳一四・一)と聖書の中に書き誌されてあるが、斯の如き説教が、此の二人の者によつて語られたといふことは、神に感謝すべき事である。然らばその説教者は、どうしてそんな説教をなしたであらうか。彼等の秘訣は一體どこにあつたであらうか。私はそれを三つに分けて考へるのである。

第一に彼等の態度である。彼等の態度は、慇懃で惠深く、其の上熱誠で言葉に力があり、ために、人々を捕へたものに違ひない。そして屹度、荒々しい、野鄙な又異様な言葉を用ひたり、又は怖ぢけづいた確信のない様子、輕薄で馬鹿けた所作又は、傲慢で壓しつける様な態度を示したりなどして、人々の反感を買ひ、氣をいら立たせるやうなことはしなかつたであらう。

ソロモンは言つた。「心の潔きを受する者は、其の口唇に憐憫をもてり、王その友とならん」(箴言二二・一)と。此の「口唇に憐憫をもつ」といふことは、決して忽せにして置いてはならない事である。須らくよく心に留め、切に祈つて、養ひ育つべきものである。

ナザレの人達は、イエスに聽いた時、「その口より出づる惠の言葉を怪しんだ。」又エルサレムの警備の下役共は、同じくイエスの言ふところを聽いて、「未だ此の人の如く語りし者はなし」と言つた。此の惠といふのは、單に言葉の内容でなく、話された態度をも指したものに違ひない。主の御態度は、權威があつたばかりでなく優しかつた。強かつたばかりでなく柔かかつた。又威嚴があつたばかりでなく平易で親しみのあるものであつた。諸君は、「コラ小僧、こゝへ來いッ」と言葉では表はしても、その中に温情を籠め、其の子供の心を捉へて之を惹きつけることが出来る。反對に口では、「坊ちゃん、こゝへいらつしやい」と言つても、亂暴な荒々しい語調を用ひ、之に恐怖心を持たせて遠ざけてしまふことも出来る。それは大部分態度の問題である。

或る人が、一人の有名な俳優に次の様な質問を發した。「説教者が重大にして嚴肅な眞理を語りながら、一向人々を動かさないのに、貴君は苟且の臺詞でもつて、どうして斯くまで皆を感動せしむることが出来ますか」と。それに對するかの俳優の答は、「説教者は、眞理を恰も臺詞でもあるかの様に語るからでせう。しかし私は、臺詞であつても、眞理の心算で語ります」といふ

のであつた。之は態度の問題である。又一人の婦人が、或る時ホイットフィールドの説教を聴いて居た。しかしあまり座席が遠いので、言ふ處が聴きとれなかつた。それなのに彼女は泣いて居つた。側に居る者が、話が聴えないのに何故かと思ひ、その理由を訊ねると、「オー先生の頭があんなに神々しく動いてるのが見えませんか」といふのであつた。實際彼の話す態度は、較ぶものなき程に神々しいものであつた。裁判官や陪審官の前で供述する辯護士や、議案を通過せしめようとして語る政治家達は、どうすれば相手を動かすことが出来るかと、その態度に就いて随分工夫を凝し、練習するのである。それなのに、靈を救ひ人々をイエス・キリストに導かうとする者が、どうして、それを爲すに就いて最善の態度を、神から學ばずに居てよいであらうか。

第二には彼等の題目である。私は彼等の態度が甚だ氣持よく、魅力に富んで居たといふばかりでなく、その題目が又興味を惹くに足り、眞面目で、言ふに言はれぬ程重大であつたと思ふのである。彼等は神の聖言を語り、聖書に基づいて論じた。彼等は、預言の已に成就せられたことを宣言した。モーセ初め他の預言者等が預言した神の子イエス・キリストは既に臨り、十字架に附けられ、葬られ、而して甦り給へりと言つた。そして唯彼を信するならば、罪赦され、心洗は

れ全く聖くせられて神に満さるべしと説いた。彼等は決して、陳腐な事を言つたり、第七の日のこと、洗禮、洗足、香、禮服等に關して、用もない詮索をしたり、當局者や權威者を攻撃したり、又は、異説や變つた教理を述べ立てたりはしなかつた。唯専心、神に對して悔改め、吾等の主イエス・キリストを信ぜよと説いた。それが彼等のメッセージの眼目であつた。そのメッセージを今少し精しく考察すれば、

先づ第一に喜ばしきメッセージであつた。神が人間に對して非常な關心をもち給ふ事を宣言する、よきニュースであつた。「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。凡て彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」といふことを宣揚するニュースであつた。此の争闘絶えず、悲みの滿ちた古き世には、斯くの如き喜ばしきメッセージが必要なのである。

次にそれは光を放つメッセージであつた。そして人々に、罪から救はれ、神に受納さるる道を示した。更にそれは、墓の中に又墓を乗り越えて豊に光を投げ込み、「生命の朽ちざる事を明にした。實際イエスは、眠りたる者の初穂であり給うた。そのメッセージによつて、地上から寂寥が除かれ、墓から恐怖が取り去られた。そして此の世は化して、天父の住家へ行く者のため

學校であり又準備の場所たるに至り、天國は如實に感ぜらるるものとなつた。

更にそれは、嚴肅で、心に深い反省を求めるメッセージであつた。人々はそれに聽いて、己が罪を認め、悔改めてそれを棄て去り、最早此の世の逸樂を追はず、唯専ら神に奉仕するやうに導かれた。彼等は神の側に立たざるを得なくなつた。救はれたいと願ふならば、十字架のキリストに従はねばならなかつた。凡そ道は二つある。もしも罪を棄て、イエスに従ふならば、神は天國に引き入れ給ふ。しかしイエスを拒むならば、亡びの道即ち地獄へ行くより仕方がない。

第三に擧ぐべきものは、彼等の精神である。態度が氣持よく、又メッセージが眞であつても、語る者の精神が正しくなければ、多數のものを信ぜしむるといふ事は殆ど不可能である。どんな立派な大砲があり、又完全な火薬と弾丸があつても、そこに火がないならば、何等敵に脅威を與へることが出来ないと同様だ。態度が洗練されて居らず、メッセージが矛盾と誤りに満ちて居つても、精神さへ正しく、眞實で且つ愛の火に燃やされて居るならば、信する者を獲ることが出来る。

ローマの一市民が、國に謀反を企てた時、かの有名な雄辯家シセロが、素晴らしい辯舌を揮つて

之に論難を加へた。人々はその華々しい辯説にすつかり魅せられてしまひ、參々伍々會堂を出でて歸る道すがら、口々に、その雄辯宏辭を嘆賞し、チエスチユアや衣さばきの美しさを讚美して止まなかつた。

マセドニアのフィリップが、ギリシヤに戰を挑んで、之に侵入せんとした時、アテネの雄辯家デモステネスは、立つて大演説を試み、フィリップに當たれと叫んだ。人々は其場から、「行いてフィリップと戦はん」と言つて立ち去つた。

此の兩雄辯家の態度が、何れも立派で、其の題目が又共に極めて重大であつたことは想像するまでもない。しかし兩者は、その精神に於て雲泥の差があつた。それで前者の場合人々は、口先で演説者を褒めそやすに止つたが、後者の場合では、演説者の精神に動かされ、必要ならば、劍を執つて立ち上り、戰場に骨を埋むるも可なりとの意氣に燃えて去つたのである。

要するに私は、かの日使徒達か、イコニウムに於て多くの信者を得た主なる原因は、此の正しき精神であつたと想像するものである。即ち、彼等の白熱せる魂と、ハチ切れる様な心の願望とが、人々を捉へたのに違ひない。彼等は自身大なる信仰に立つものであつた。彼等は喜ばし

勝利の信仰を持ち、地獄を滅ぼし悪魔に打勝つ確信を懐いて居た。そこには何等の疑惑も、不安もなかつた。彼等は疑い一つも語る如きことを決して爲なかつた。彼等は何を信ずるかを確認に知つて居た。信するが故に語るのであつた。その様であつたから、多くの人々の信仰は、又火を點ぜられて燃え上つたのである。

彼等の白熱的信仰は又、其の心に、大なる愛を湧き起さしめた。彼等は、彼等のために獨子を賜うた神の大なる愛を信じた。そこから神を愛する念が、限りなく湧いた。彼等は十字架の死を甘んじて受けた主の愛を信じた。そして主のために喜んで死なうとの愛を植ゑつけられた。彼等は凡ての人を愛する神の愛を信じた。そして彼等も亦、その如く凡ての人を愛し、之に責任を感じ、之が救のためには何時でも生命を獻ぐべしとの覺悟を有つた。

オー、かの使徒達の精神を、かくも燃やさしめた信仰の如何に輝かしく、又其の愛の如何に熱きことよ！ 而して私は信する。此のキリストに似たる精神が、自ら彼等の正しき態度を生んだことを。其の精神があつたればこそ、彼等は自然に又寛容であり得たのだ。眞實で又強くあり得たのだ。そして顔貌にも音聲にも又感情にも、少しの誇張や作爲も交へず、唯熱誠をもつて

語り得たのだ。そこには何等の峻しき語調、何等の皮肉な諷刺、何等の不誠實も認めることが出来なかつた。今一人の母親が、火に焼かれんとする小供を見て、その生命を救はんとする衝動に動かされて、突差の間に自ら火に飛びこんで行つたとする。さうすればその母親が、假に平常應病であり、その上一向訓練を受けて居らなかつたにしろ、その時の態度は批評を絶した程立派であるに違ひない。一體之に較ぶべき態度を、一時たりとも爲し得る様に教へることの出来る辯論學校といふものが、あるであらうか。眞實イエスを愛し、人々に對して燃ゆるが如き愛と希望と信仰とを持ち、尙之を畏敬する心があるならば、その心こそ、説教をする時の態度の最上の教師である。人は皆、滅びの道から救はねばならぬ。そして正義に立ち、天國に眼を向け、神に立歸らねばならぬと強く感ずる丈の愛があるならば、其の者の態度はやがて必ず立派になるのである。

説教者の精神は、メッセージ其のものを作らないかも知れない。然しながら、少くともその形を整へて力あるものたらしめる。心燃やされて居る人が、斯くの如きメッセージを得るといふことは、定に驚くべきことである。或る人が、「ブラムエル君はどうしてあの様な驚くべき事を語るこゝとが出来ますか」と問うた。それに對する答は、「彼は神の御座の側に立ち、其の御心に觸れて

居るから、神のメッセージを受けてそれを吾々に傳へてくれるのであります」といふのであつた。誰でもその信仰が薄弱で又心情が冷たい爲に、陳べるメッセージが低調で、無味無力で、又魂の抜けたものであるとすれば、それは本當に悲しむべきことである。

ソロモンは「すべての操守べきものにもまさりて汝の心を守れ、そは生命の流これより出づればなり」というたが、之はかの力ある説教者の秘訣をよく言ひ表はしたものではなからうか。

第十八章 集會の後

最近一人の女兵士が、私の友人に向つて言つた。「私共の小隊長は、話は上手ですし、集會も仲よく導きます。その集會では、救はれた者も未だ救はれない者も、つまり誰でも皆益を受けます。暫く間を置いて、その事を又語り続けた。然し小隊長は、集會が終れば、つまらない戯言を言つたり、輕口をたゞいたり致します。それで私は、集會では澤山の恵を與へられますが、彼の戯言や輕口のためにそれが吹き消されてしまうのです」と。

右の小隊長は、集會中罪人に向つて警告し、懇願し、訴へる時は、假面を被つて居て、集會が済めばそれを脱いでしまうのであらうか。讀者はどう考へまするか。

誰でも人は、集會が続けられてる間、魂の救に熱中しようとする時、死んで居るといふ事は可能なことであらうか。又そこから人々が立去るやいなや、幾分でも無考な又不注意な態度を探るといふことは出来ることであらうか。救靈者とは、風のまにまに方向を變へる風見に過ぎないものであるか。それとも救靈者は、講壇から下つても、其處に登つて居る時と同じく、神の榮えを

焦るる程に求め、人々の救を己が責任と感ず程の主義の人であらうか。讀者はどう思ひまするか。救世軍の早い頃の非常な成功を納めた士官達は、集會が濟んでも尙緊張した面持を失はず、氣を他に轉ずる如きことはしないで、會場を立去るのが常であつた。そして家に歸つてからも、罪人の救に就て心を傷め、彼等のために神に祈り、時には涙をもつて訴へるのであつた。私は、今日も尙、斯くの如き士官の居ることを知つて居る。現大將（ブラムエル・ブース）の如きは、その最も顯著なる一人である。オー神よ、吾等の中に生命を吹込み給へ！ 吾等の中にその精神を注ぎ入れ給へ！

戦友諸君、右の精神を吾々が獲るか獲ないかは、吾々各自の心掛に寄ることである。世の人は、吾々を見て、右の精神を有するかどうかをよく見別くるのである。我々が裁かれ、批判せられ、又報いらるるのは、決して單に講壇上のことのみによるのではない。寧ろ講壇外でなす言行や心掛による處が多いのである。

使徒パウロは、「信者の模範となれ」と言つたが、實際さうだ。本當に慎しまねばならない事である。

假に諸君が、輕口や戲言を言ひ、馬鹿氣たことを口にし勝ちなものであるとしても、そのために失望してはならない。それに打勝つ様に堅く決心すべきである。講壇から降りるや否や、氣分が上調子になることを氣付いたならば、それを氣付かして下さつた神様に感謝し、直ぐに改め、其の惡癖から救はるる様祈るがよい。さうすれば神は、屹度聽き給ふのである。二十年近くも此の惡癖を有つて居た一人の婦人士官が、右の様に引續き救はれて居るのを私は知つて居る。とは言へ。決して喜ばしい言葉を用ひ、晴々しい態度に出でてはならぬといふのではない。それらのことは、聖靈の御指導によつて適當に調節せらるべきものである。かくして、集會で恵を與へられたものは、それを失うどころか、寧ろ恵を増加へらるるのである。

なごて靜かに憩ひ得ん、

見よ、死の國へ急ぐ世人を、

見よ、黄泉の國へ走る罪人を、

オー、彼等は滅ぶるなり。

救へ、彼等を晝の間に、
間もなく夜は来るなり、
吾等は瞞みて見ゆべし、
善いかな、僕とのたまふイエスに。

第十九章 救靈者の警戒すべき危険

聖潔は、魂に非常な光と大いなる愛とを附與する。従つて其の恵を受けた者は、稍もすれば、二つの異つた重大な誘惑又は危険に陥る。

聖められた者が、光の側に片寄れば、兎角人を批評的に見、その過失が眼につき、寛容の心をもつて之を扱ふことを忘れ、どちらかと言へばまだ暗黒の中にある者に、餘りに峻厳に當り、又あまりに高きを要求するに至り勝である。そして、イエスが折ることをなさらなかつた傷へる葦を折り、イエスが、燃へ上らせようとせられた煙れる亞麻を消し、「眞理をもつて道を示す」といふ如きは、思ひも及ばないこととなつてしまふ。それといふのも、聖められた者は、自分が物事をよく明察する處から、人も亦さうだと思ひ、その人々が事を實行しないのは實行する意志がないからだ、うつかり考へるからである。しかし彼とても、初めは罪の陥穽の中から救ひ上げられた者であり、又聖潔の恵を與へらるる前は、甚だしく頑固で、偏癩だと言はぬまでも、尙智慧が足りず、意志が弱く、兎角消極的であつたのだ。その事をよく反省して、他人に對しても、主が

彼自身になし給ふた様に、飽くまでも慈悲の心をもつて當り、忍耐深く扱ふことが出来れば幸である。その事を努めて行ふのでなければ、彼は甚だしい危険の中にある者である。

次に彼が、愛の方に片寄れば、エリがその息子等に對した様に、あまり寛かで放肆に流れしめる惧れがある。即ち吐薬を與ふべき時に砂糖水を與へ、切開すべき時に氣安めの膏薬を貼つて置くといふ様なことに陥り勝である。斯様なことをやつたために、神の業がどれ程徒勞に歸するか解らない。又斷乎として時機に適つた懲戒を加へ、嚴格に扱つたならば救はれたかも知れぬ魂が如何に多く失はれたことであらう。

それで聖められた者の是非とも心掛ねばならぬことは、何事もよく中庸を守ることである。即ち、どんなに明察の光を與へられても、批評的になつたり、厳し過ぎたり、又精神的に高慢になつたり、横柄になつたりすることを充分慎まなければならぬ。それから又、愛すると言つても軟弱であつたり、叱責することを恐れたりしてはならぬ。それがよく出来さへすれば、彼は益々恵まれて更に更によく用ひらるるに至るであらう。

以上のどちらの側にも片寄らないといふためには、心を低くし、勇氣をもち、意志を強固にし

信仰に堅く立ち、何事にも慎み深くし、よく祈り、神の御業と方法とを深く考へ、忍耐をもつて事に當り、其の上、信じて聖靈の導きと、よき智慧とを待望むことが必要である。どちらの側へも偏することなく、神と偕に歩み、中庸を守り得る者は、眞に祝福せられた者といふべきである。

オー神よ聖なる神よ、

吾は待望めり汝が恩寵を、

されど汝が御顔の榮光は、

聖められずば拜し得ぬなり。

正しき道へと吾を導き、

世の誘ひより救ひ給へ、

オー吾が神よ吾が守護よ、

示し給へ行くべき道を。

汝を信する凡ての者に、
汝が恵は注がるしなり、
かくて吾等は歌うべし、
救主の御名を高らかに。

汝の恩寵に浴しつゝ、

喜び唱へん讚美の歌を、

喜び叫ばん感謝の歌を、

かくて勝ちなん永久までも。

第二十章 神の秘密

人は、こちらから探つて神を見出すことは出来ない。然し神は、御自身を人に顯はし得給ひ、又それを爲し給ふのである。不可思議論者や懷疑者が、どの様に神を否定し又疑つても、神は御自身を、其の被造物に知らしめ得給ひ、又それを爲し給ふのである。神は人々と交り給ふ、その耳を開き給ふ。其の心に語り給ふ。其の秘密を打ちあけ給ふ。來るべき事を告げ給ふ。而して其の聖旨を顯し給ふ。

「エホバの言ヨナに臨めり。幸なる者よ！ 膏力あり、精神旺んなる者は、彼の王又は支配者に全く信任せらるる立場に置かるることを欲するものである。即ち絶大なる信頼を得て、重き使命を言ひつかるることを願ふのである。而して茲に、未だ知られず又顯れざる一人の人の人がある。彼は主なる全能の神により、多くの者の中から特に選ばれて、天國の全權大使たるの任命を受けたのである。どういふ貴い又名譽なことであらうか。

神の言か人に臨む時、彼等の中に驚くべき大變化がなされる。彼等は最早、その御業がなされ

し前の彼等ではあり得ない。彼等は、高められて神と偕に働き、神の御前でイエスと共に座することを許さるゝ者となるか、それとも御前より追放せられて、地獄に落さるる者となるか。何れか一つより途がない。もしも聖言に従ふならば、救はれ、力を與へられ、神との親交を許され、その信任を受け、その獨子イエスに似たる者とせらるる。しかし従はないならば、ユダの如く惨めに敗れ、悪魔の群に入るより外、仕方がない。

神の御言が一人の人に臨むといふことは、畏るべき事である。彼の時は来たのだ。今や彼は一つの機会と目的との前に立たされて居る。彼はそのために生れ更らしめられたのである。彼の永遠の運命は、受けた聖言によつて定められ、又それを如何に用ひるかによつて決せられる。静かなる細き聲が幽冥境より出で来り、誰かの心に囁かれたとする。その時其の者が、これは神より来たものであることを認め、爾後、落ちついて心を開き、謙遜になつて其の聲に従ふならば、彼は、世間一般の牧者とは全く違つた者となり、神の子たり、世嗣たり、又共勞者たるの一人とせらるるであらう。

神の言がノアに臨んだ。彼は其の言に従ひ、其の時代の人々とは別個の行動をとり、方舟を造

つた。かくして彼は、此の世を繼ぐ者とせられた。神の言がアブラハムに臨んだ。そこで彼は、唯信仰によりて命に服し、親兄弟に別れ、父祖の地を離れ、行くべき土地の何處なるやも知らずして出で往いた。而して彼は信仰の父とせられ、全地の人々が之によつて祝福を蒙つた。

神の言が、荒野に羊の群を牧して居たモーセに臨んだ。そこで彼は、牧者の杖を携へたまふ、バロを説伏し、イスラエルを解放しようとして出で往いた。かくして彼は、世界の立法者となつた。

神の言が、心を頑くなしに殺氣に充てるサウロに臨んだ。そこで彼は、心が幼児の如く虚しくせられ、やがて遂に、萬民に對する十字架の使者、燃ゆる傳道者、世界的な不撓の宣教師、深みある優しき教師、優秀なる統率者、キリストの愛の奴隸、勝ち誇れる殉教者、そして使徒パウロとなつた。

神の言が、ジョン・ウエスレーに臨んだ。彼はそれに聽いて、殆ど七十年に渉る斷のまざる勞苦の道に敢て入つた。彼の忍耐強き、愛に充てる、動かさるる事なき、犠牲的の、そして勝利あ

る奉仕は、全世界を愛の火で燃やした。それは實にペテロ、パウロ以來會てなかりし程の事で、キリスト教國を脅威し、呑み盡くさうとして居た不信仰と異端的精神との大濤を、せき止めるのに充分の力を有つて居た。

神の言が、十五歳の少年ウイリアム・ブースの上に下つた。見よ！斯くして、生れた救世軍を！今や幾千百の働人が、魔窟に、酒場に、細民街に、淫蕩の都市に又寂寥の荒野に、中夜に太陽の尙空に掛るノールウエーに、炎熱の日の照りつくるインドやセイロンに、ロンドンに又パリに、ベルリンに又ニューヨークに、そしてアフリカの山野に又遠くアラスカに、世界至る處に戰つて居るではないか。

神の言が、幾千幾萬の卑しき、名もない青年男女の上に下つた。彼等は臺所に、洗濯場に、製粉場に鑛山に又市場に、商店に工場に又事務室に、汽船に又農場に働いて居た者である。しかし神の御聲を聽いて單純に信じ、燃ゆるが如き愛とキリストに似たる克己心が與へられて、此の世の智者を驚かし、此の世の權力を滅ぼして、地上に天國を築くために働くものとせられた。神の言は、世を震駭する雷鳴の如き様で臨むものではない。神が告げようとする者の心に、極

めて靜かな囁きとして下るのである。世の人は、その聲を聽くことが出来ない。がしかし、誰に神が囁き給うたかを知ることは出来る。其の者が神の言を喜んで受納れたとすれば、眼が愛に充ち、顔が輝き、歩調が元氣よくなり、聲が澄んで來、メッセージが實證的で、勇氣に満ち、その上態度が謙遜に、忍耐深く又犠牲的になつて來るから、それは誰にでも直ぐに解る。反對に、喜んで受け納るることをしなかつたとすれば、顔色が暗く、眼は伏目勝になつて眞ともに見張ることが出来なくなり、といつていかにも傲慢らしくなり、坐るにも後の方か隅の暗い處で、おどおどして小さくなつて居るから、是亦、誰の眼にもそれと氣付かれる。

神の言が一人の人に臨むといふことは、眞實名譽な事であり、貴い事であり、又喜びとすべきことである。と同時にそれは、非常に悲痛なことであり、大變な試鍊であり、又永い嚴しい鍛鍊を加へらるることを意味する。しかしその聖言を喜んで受け取るものは、最後には屹度、言ふに言はれぬ永遠の名譽と高貴と喜悅とに導かるるのである。

神がエリヤに臨んだ時は、エリヤの心は喜悅の情で震へたに違ひない。しかし一方、惡魔が夜晝彼に來つて、鴉が來なければどうするかと囁いた時、彼の信仰はいかばかり激しく試みられた

事であらう。それから川の水が涸れた時、又一個人の大丈夫たる彼が、貧しい孤獨な寡婦の許に身を寄せねばなくなつた時、そして又その寡婦の唯一の子が死んで、そのために彼が責められた時、それらのことが、どのやうに恐ろしい信仰の試練であり又忍耐と希望との激しい鍛錬であつたらうか。

ノアやヨセフ、又モーセやダビデやパウロの、永い間の試練が、どの様であつたかを考へて見るがよい。神の言に聽き、それによつて貴い使命に生きるといふことは、確かに己が肉を削り血を涸らす程の事ではあるが、しかし又喜ばしきことである。それは眞の平安を得る唯一の道である。そこにこそ最高の奉仕がなされる。そこにこそ又、盡きざる榮光と永遠の喜悅とが備へられて居る。その事は確に懊惱であり勞苦であり痛事ではある、がしかし、信仰が持ち続けられる限りそれは最後のそして永遠の勝利である。

斯くの如き激しき苦闘と長き戦の後、エリヤは、天より低く垂れ下つて居る車に乗り、火の雲に巻き上げられ、死を味はずして天に昇つた。非常な試練に出遭ひ、數度度勞し、凡ゆる苦惱を嘗め、その上斬首人の斧が、己が首に置かるることを感じながら、パウロは高らかに勝鬨の

聲を擧げた。「われ善き戦闘をたゝかひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。今よりのち義の冠冕わが爲に備はれり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜はん。」

イエスは尙も我等に求めて居給ふ。汝等わが飲む酒杯を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか」と。何故ならば、我等が祝福の國へ入るのは、試練と苦痛との門を通つてのみ可能だからである。その處にさへ入れば、もうそのまま永遠に神と共に在ることが出来るのである。

「若し耐へ忍ばば、彼と共に王となるべし。」キリストと共に榮光を受けんために其の苦難をも共に受くるなり。」

神が御自身を其の民に顯はし給ふのは、常に神の言によつてである。もし諸君が、立つて救世者たれと命する神の言を聽く耳を有し、それを理解する心を有し、又それに従ふ意志を有するならば、どんなに幸なことであらうか。さうすれば諸君は、亦神の秘訣を知ることが出来るであらう。

讀者に告ぐ

此の書は、貴君に救世者の秘訣に就いて語つた。神は彼を愛する凡ての者にその秘訣を知らせたく願うて居らるる。貴君はそれを學んだであらうか。貴君は一個の救世者であるか。全世界を通じて、二萬にも餘る男女が、神の御聲に従ひ、救世軍士官となるために選出された。彼等は、唯救世人を願ひ、克己と犠牲との生涯を送るために献身したものである。貴君はその生涯を神に獻けよと求めて居給ふ御聲を聴かぬであらうか。その御聲に耳を傾けることをもう中止せられたか。その事を自身の胸に問うて見て、今日といふ日に返答せられよ。又其の事に就きよく考へ、よく祈つたならば、誰でもよいから救世軍士官を訪ねて之に相談せられよ。士官は喜んでその相談に應ずるであらう。

Printed in Japan

昭和七年十二月二十八日發行
 昭和九年七月三十日三版

定價金參拾錢

不許
 複製

著作發行者
兼印刷者

東京市神田區神保町二丁目十七番地

山室軍平

印刷所

東京市牛込區赤城下町八十七番地

救世軍勞作館印刷部

發行所

東京市神田區神保町二丁目十七番地

救世軍出版及供給部

(振替東京四〇〇番)
東京一五六四五六番

中將山室軍平著 四六判 一二四頁

日常生活の宗教

定價金二十五錢
郵税金四錢

【基督世界評】 宗教は生活である。日常生活が直ちに宗教であらねばならぬ。著者は實際的實踐的な基督者生活を平易通俗に示す第一人者である。その著者が「基督教信仰の簡単なる案内記」と銘うって本書を送り出された。神の問題、救の問題、祈禱の問題、職業の問題。道德の問題、死の問題などを誠に解り易く説いてある。

中將山室軍平著 四六判 一三二頁

箇人傳道

定價金二十五錢
郵税金四錢

【福音新報評】 例によつて、著書のきびきびした筆で箇人傳道の秘訣十五項目が、興味深き實例の數々を巧に織込みながら叙述されてゐる。言ふまでもなく、本書は、救世軍々々人を目標としてその實行方法が現れてゐるのであるけれども、一般基督者の參考と奨励にも、役立つであらうことを疑はぬ。

中校秋元巳太郎編著 (第三版) 四六判 一七四頁 (繪入)

救世軍の母 カサリン・ブリス

定價金五十錢
並郵税金四錢
郵上製九拾錢
稅金六錢

【基督家庭新聞評】 救世軍で出ずものは、的にすぐ血となり肉となるものが多い。救世軍に於ける養育研究所だ。本書もその靈的養育素の一つだ。善真に愛に充ちて勇敢な戦士であつた。彼女の面目が、流麗な執筆で、遺憾なく描かれてゐて、巻を捲く處はさざめくものがある云々【入道評】 近ごろ出た新しい書物の中に、魂の養ひとなり、處世に役立つ書があるかと問はれるなら、吾人は何らの躊躇なく本書を以て其間に答へ度いのである。誠にカサリン・ブリスは救世軍の母であるのみならず、人類の眞の友で、偉いといふ感じを與へる女性だ。そして創立者ブリスに取つては最も信頼すべき妻であり、八人の子供に取つては慈愛の權化といふ母だつたのである云々。

中將山室軍平著 四六判 三〇〇頁

聖潔とは何か

定價金五十錢
郵税金八錢

【救時時報評】 基督教體驗の極致なる聖潔に就て教理の方面から經驗の方面から實際應用の方面から平易に説いたものである。救世軍に獨特の色彩が濃厚ではあるが、其の説話はくだけた道話風の趣があつて有益である【福音新報評】 それは「とき」の「こころ」紙上に掲げたものに、新に數篇を起稿して追加されたもの、救世軍の立場から、この大問題を取扱ひ、た究によつて此獨特の通俗平易な書き方で、さらさらと書きこなしてある。試煉、聖書の研

振替 東京 〇〇四

救世軍出版及供給部

東京 神田 區 保町

振替 東京 〇〇四

救世軍出版及供給部

東京 神田 區 保町

救世軍出版物

十字架の教	罪より救ふ力	軍令及軍律 <small>(兵士巻)</small>	實行的基督教	基督傳の教訓	再生の恵人	山室機恵子	カサリン・フィス	私の青年時代	五十二文集	基督教講話	使徒的宗教	聖書の宗人	人生の旅	平民の福音
								上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製
二五	二五	二五	四〇	五〇	五〇	七〇	九〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	二一
四	四	四	四	六	六	六	六	六	六	八	三	三	八	四
コリント人への前後書	ロマ書 <small>附エペソ書</small>	使徒行傳	ヨハネ傳福音書	マルコ傳福音書	民衆の福音書	十分の一獻金論	聖書の感化力	勞働の宗教的意義	基督教と日本人	病床の清き慰安	心の清き者	青年への警告	禁酒の基督教	禁酒のすゝめ
上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製	上並製
二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	二七〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
八六六	四八六	六四八	六四八	六四八	六四八	六四八	二	二	二	二	四	四	四	二
東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町	東京神保町

救世軍出版及供給部

終

